

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

越谷遺跡 他 発掘調査報告書

伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群

平成 9 年 3 月

名神高速道路内遺跡調査会

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

越谷遺跡 他 発掘調査報告書

伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群

平成9年3月

名神高速道路内遺跡調査会



島本町遺跡周辺航空写真（平成3年撮影）

は し が き

名神高速道路内遺跡調査会では、平成2年度から今日に至るまでの間に多くの遺跡を名神高速道路の拡幅工事に伴って発掘調査してまいりました。悠久の大地に眠る人類の歴史を掘り起して過去を解き明かすという発掘調査には、最新の科学技術を導入しつつ確実な作業を行ってまいりました。その発掘調査成果は当調査会から発掘調査報告書として順次刊行されており、微力ながら地域の歴史の研究の資料として利用されてまいりました。

今回報告いたしますのは、大阪府三島郡島本町桜井に所在の越谷遺跡を初めとするいくつかの遺跡ですが、調査により島本町の歴史に新たな1ページを書き加える事となる、縄文時代の遺物が多量に出土しましたことや、中世の島本町桜井と吉備地方とのつながりを示す遺構・遺物を検出したこと等の成果があり、地元の方々には調査中からその成果について、さまざまなかたちで注目されることとなりました。その一端として、平成6年度の島本町文化祭においては、調査で出土した遺物の一部を展示し調査担当者による解説等を行なうこともでき、より多くの方々に越谷遺跡をはじめとするそれぞれの遺跡の大切さを再認識して頂けるとともに、当調査会の業務内容をより一層理解して頂けるとともに、いままでにない新しい成果を得ることができました。それぞれの遺跡の全容解明には未だ程遠い成果ではありますが、ここにその詳細を報告いたします。今後の研究に調査の成果が役立つのであれば幸いです。

なお、今回の調査を実施するにあたりまして、日本道路公団大阪建設局をはじめ、大阪府教育委員会、島本町教育委員会、その他地元の関係各位の多大なるご協力とご支援をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成9年3月

名神高速道路内遺跡調査会
理事長 鹿野 一 美

緒 言

島本町は、京都大阪のベッドタウンとして発展し、人口3万人を数える町となりました。そして、これからのまちづくりの基本となる総合計画には「生活の質的向上のため住民の財産として町の歴史的・自然的風土を基調に、本町固有の地域文化の育成とそのための条件整備が求められている」とあります。このことは、経済活動を中心に発展してきた時代は終息を告げ、心豊かな文化のまちづくりを指向するものです。

先人の残した数多くの文化財は、その町の文化そのものであります。島本町には、惟喬親王の水無瀬宮、円満院法親王の桜井御所、後鳥羽上皇の水無瀬離宮など、皇族・貴族たちの別業に関する遺跡が多く、古代から中世にかけて都の最先端の文化がこの地で開花したといわれています。これらの遺跡の調査は、この町が未来に伸ばして行くべき文化の道筋を示してくれるものと考えます。

今回報告されます越谷遺跡も桜井御所との関わりが考えられる重要な遺跡であります。この調査で得られた成果を、今後の文化のまちづくりに十分生かしてまいりたいと思います。

最後になりましたが、日本道路公団大阪建設局ならびに、地元の方々、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、調査を担当されました名神高速道路内遺跡調査会の皆様には深く感謝いたしますとともに、本町の今後の文化財行政に対し、変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成9年3月

島本町教育委員会
教育長 吉田 博

例 言

- 1, 本書は中央自動車道西宮線（名神高速道路）拡幅工事予定地内に所在する、大阪府三島郡島本町源吾山古墳群、越谷遺跡、桜井遺跡、桜井御所跡、御所池窯跡、伝待宵小侍従墓の発掘調査報告書である。
- 2, 調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課、島本町教育委員会の指導のもとに、名神高速道路内遺跡調査会が実施した。
- 3, 調査および報告書作成に要した費用は、日本道路公団大阪建設局が全額負担した。
- 4, 調査は名神高速道路内遺跡調査会技師大塚 隆、川端博明、和田 武、井上克恵を担当者とし、平成3年度から平成5年度まで行なった。遺物の撮影は小倉 勝が行なった。本文中の第Ⅲ章第3節越谷遺跡のうち出土縄文土器については川端博明が、その他と本書の編集は大塚 隆が担当した。なお、遺物観察表は藤本礼子が作成した。
- 5, 調査は国土座標を用いており、本文中の方位は座標北である。標高値はT. P. 値を用いている。図化作業には航空写真測量を利用した。
- 6, 指導・協力をいただいた方々は、次のとおりである。記して謝意を表したい。（敬称略）文化庁、奈良国立文化財研究所、通商産業省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター、日本道路公団大阪建設局、大阪府立島本高等学校、高槻市教育委員会、茨木市教育委員会
岩井長信、大船孝弘、鐘ヶ江一郎、小坂隆規、坂田育功、寒川旭、清水勇、高橋公一、高山久、田中幸造、大楽康宏、中川靖士、野口尚志、橋本久和、福田英人、馬場保、南博史、宮崎康雄、森田克行、山本彰、湯浅淑子、吉川廣信、渡辺昌宏

特に名神高速道路内遺跡調査会の理事の小野山 節先生には有益なご助言を頂いたので記して感謝申し上げます。

[調査参加者]

荒井麻紀、池田理美、稲津ゆち子、今堀圭子、岩城恵、岩本淳子、大石知世子、大枝晃子、大西香也子、荻原亜希子、佳川記子、片山実希、金子佐織、川地ちぐさ、河原善之、川淵郁子、川向輝美、加山泰代、瓦林三千代、神田千砂、岸本晋一、熊田武生、久留島透子、小出恭子、佐伯美砂、瀬川大介、武田真一、武田靖宏、武田陽子、竹村雅代、田中裕子、立岩美津子、辻井一美、坪倉睦子、永田えり子、永田景子、永田淑子、西川佳子、西村典昭、服部浩司、橋本京子、福井美弥子、藤本礼子、古澤陽子、前田和子、前田幸美、松井芳実、馬蘭、丸岡鉄也、三島賢司、森川智子、山口浩一、吉岡果名子、吉岡正二、和井田順治

本文目次

はしがき	名神高速道路内遺跡調査会理事長
緒言	島本町教育委員会教育長
例言	
第I章 位置と環境	1
第1節 地理的環境と調査の位置	1
第2節 調査地周辺の歴史的環境	5
第II章 調査の契機と経過	10
第1節 調査の契機	10
第2節 調査の経過	11
第III章 調査の成果	13
第1節 試掘調査	13
第2節 伝待宵小侍従墓の調査	15
第3節 越谷遺跡の調査	18
第1項 第1地区の調査	19
第2項 第2地区の調査	25
第4節 源吾山古墳群	63
第IV章 桜井周辺に分布する遺跡群の特徴	65
第1節 越谷遺跡と周辺の遺跡の分布状況について	65
第2節 越谷古墳群と源吾山古墳群について	65
第3節 総括	67
遺物観察表	69

挿 図 目 次

図1	調査対象遺跡の位置	2
図2	調査地周辺の地勢と水系	3
図3	三島郡島本町遺跡分布	6
図4	調査地周辺の大字・小字	7
図5	越谷遺跡(3~9)・水無瀬荘跡遺跡(1・2)の採集遺物	9
図6	試掘トレンチ位置	14
図7	伝待宵小侍従墓の調査トレンチ位置・土層断面図のデフォルメーション	15
図8	伝待宵小侍従墓石組遺構の平面図・断面図	16
図9	伝待宵小侍従墓の出土遺物	17
図10	越谷遺跡第1地区・第2地区位置	18
図11	越谷遺跡の層序の概念図	19
図12	御所池堤防断面図	20
図13	越谷遺跡第1・2地区第1遺構面	21
図14	越谷遺跡第1・2地区第2遺構面	22
図15	越谷遺跡第1地区の出土遺物	24
図16	越谷遺跡第2地区断面図の位置	26
図17	越谷遺跡堆積状況図のデフォルメーション	27
図18	越谷遺跡第2地区断面図のデフォルメーション	28
図19	第1遺構面の土坑1・3の平面図・断面図	31
図20	第1遺構面の土坑2の平面図	32
図21	第1遺構面の土坑4・5の平面図・断面図	33
図22	第1遺構面の土坑6・7・8・9・10・11の平面図・断面図	34
図23	第1遺構面の土坑12・13・14・15・16・17・18の平面図・断面図	36
図24	第1遺構面の土坑19・20・21・22の平面図・断面図	37
図25	第1遺構面の土坑23の平面図・断面図	38
図26	第1遺構面の土坑24の平面図・断面図(南東部分)	39
図27	第1遺構面の土坑25の平面図・断面図	39
図28	第1遺構面の柱穴1・2・3・4・5と溝1・2の平面図・断面図	41
図29	越谷遺跡第2地区の包含層出土遺物	43

図30	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物	45
図31	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(1)	46
図32	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(2)	47
図33	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(3)	48
図34	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑19・20・23・24・25の出土遺物	49
図35	越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑1・2・3・4の平面図・断面図	51
図36	越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑5～15の平面図・断面図	53
図37	越谷遺跡第2地区第2遺構面の柱列の平面図・断面図	54
図38	越谷遺跡第2地区第2遺構面の井戸の平面図・断面図	55
図39	越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑1(1～4)・土坑2(5～21) 出土遺物(弥生土器)	56
図40	越谷遺跡第2地区第2遺構面の柱穴1(1・2)と井戸の出土遺物(3～5)	58
図41	越谷遺跡第2地区第3遺構面確認トレンチ配置図	59
図42	越谷遺跡第2地区の縄文時代包含層の出土遺物	60
図43	源吾山古墳群試掘調査トレンチ配置	63
図44	源吾山古墳群出土遺物	64

表 目 次

表1	各地区ごとの調査期間	12
表2	遺物観察表(一) 伝待宵小侍従墓出土遺物 越谷遺跡第1地区出土遺物	
	越谷遺跡第2地区出土遺物(包含層 その1)	69
	遺物観察表(二) 越谷遺跡第2地区出土遺物(包含層 その2)(第1面・土坑1 その1)	70
	遺物観察表(三) 越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑1 その2)	71
	遺物観察表(四) 越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑1 その3) (第1面・土坑2 その1)	72
	遺物観察表(五) 越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その2)	73
	遺物観察表(六) 越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その3)	74

遺物観察表（七）越谷遺跡第2地区出土遺物（第1面・土坑2 その4） （第1面・土坑2 その5）	75
遺物観察表（八）越谷遺跡第2地区出土遺物（第1面・土坑2 その6）	76
遺物観察表（九）越谷遺跡第2地区出土遺物（第1面・土坑2 その7） （第1面・土坑19・20・23・24・25）（第2面・土坑1・2 その1）	77
遺物観察表（十）越谷遺跡第2地区出土遺物（第2面・土坑1・2 その2） （第2面・柱穴1・井戸）（縄文時代包含層）	78

図 版 目 次

参照頁

巻頭図版1 島本町遺跡周辺航空写真（平成3年撮影）	1・2・4・10・11・12
巻頭図版2 越谷遺跡第2地区	25・50
上 第1遺構面（南から）	
下 第2遺構面（南から）	
図版扉 島本町遺跡周辺航空写真（昭和30年撮影）	1・2・4・10・11・12
図版1 調査前の調査地（越谷遺跡第2地区）	25
上 調査地遠景（南から）	
中 調査地全景（北から）	
下 調査地全景（北から）	
図版2 御所池瓦窯跡	5・9・13
上 試掘第3トレンチ（南から）	
中 試掘第3トレンチ（北から）	
下 試掘第3トレンチ（東から）	
図版3 越谷遺跡	13・18
上 試掘第5トレンチ（南西から）	
中 試掘第5トレンチ（西から）	
下 試掘第5トレンチ（西から）	
図版4 越谷遺跡	13
上 試掘第7トレンチ（東から）	
中 試掘第7トレンチ（北から）	
下 試掘第7トレンチ東壁	

図版 5	桜井御所跡	13
上	試掘第 8 トレンチ (北側・南から)	
中	試掘第 8 トレンチ (北側・東から)	
下	試掘第 8 トレンチ (北側・北から)	
図版 6	伝待宵小侍従墓の調査	13・15・17
上	試掘第 2 トレンチ西壁	
中	調査区全景 (東から)	
下	石組遺構 (東から)	
図版 7	越谷遺跡第 1 地区の調査	19・20
上	第 1 遺構面の西半部 (西から)	
中	第 1 遺構面の西半部 (東から)	
下	第 1 遺構面の西半部 (南から)	
図版 8	越谷遺跡第 1 地区の調査	19・20
上	第 1 遺構面の東半部 (東から)	
中	第 1 遺構面の東半部 (西から)	
下	第 1 遺構面の東半部 (西から)	
図版 9	越谷遺跡第 1 地区の調査	20・23
上	第 2 遺構面の西半部 (東から)	
中	第 2 遺構面の柱穴と溝 1 (東から)	
下	第 2 遺構面の西半部 (西から)	
図版 10	越谷遺跡第 1 地区の調査	20・23
上	第 2 遺構面の東半部 (東から)	
中	第 2 遺構面の溝 2 (西から)	
下	南壁 (東端部)	
図版 11	越谷遺跡第 1 地区の調査	19
上	南東隅壁面	
中	北西隅壁面	
下	北東隅壁面	
図版 12	越谷遺跡第 1 地区の調査	19・20
上	南壁 (中央付近)	
中	御所池堤防の断面 (東から)	
下	左：第 2 遺構面の土坑 (東から) 右：第 1 遺構面の掘下げ時出土遺物 (西から)	

図版13	越谷遺跡第2地区の調査	25・30
	第1遺構面全景(南から)	
図版14	越谷遺跡第2地区の調査	30
	上 第1遺構面の全景南側部分(北から)	
	中 第1遺構面の全景中央部分(北から)	
	下 第1遺構面の全景北側部分(南から)	
図版15	越谷遺跡第2地区の調査	30・31
	上 第1遺構面の土坑1の遺物出土状況(東から)	
	中 第1遺構面の土坑1の遺物出土状況(北から)	
	下 第1遺構面の土坑1の完掘状況(左:西から 右:東から)	
図版16	越谷遺跡第2地区の調査	30・32
	上 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(南から)	
	中 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(西から)	
	下 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(南から)	
図版17	越谷遺跡第2地区の調査	30・32
	上 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(南側中央部分)	
	中 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(南側中央部分)	
	下 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(北東から)	
図版18	越谷遺跡第2地区の調査	30・32
	上 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(西から)	
	中 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(北側中央部分)	
	下 第1遺構面の土坑2の遺物出土状況(北側中央部分)	
図版19	越谷遺跡第2地区の調査	33・34・35・36
	上 第1遺構面の土坑5(北から)	
	中 第1遺構面の土坑11(西から)	
	下 第1遺構面の土坑12(東から)	
図版20	越谷遺跡第2地区の調査	35・36
	上 第1遺構面の土坑13(北から)	
	中 第1遺構面の土坑14(西から)	
	下 第1遺構面の土坑19(北から)	
図版21	越谷遺跡第2地区の調査	37・38・39
	上 第1遺構面の土坑19(東から)	
	中 第1遺構面の土坑21(北から)	

下	第1遺構面の土坑23（北から）	
図版22	越谷遺跡第2地区の調査	39・40
上	第1遺構面の土坑24（東から）	
中	左：第1遺構面の土坑25（南から） 右：第1遺構面の柱穴1（北から）	
下	左：第1遺構面の柱穴2（北から） 右：第1遺構面の柱穴2断ち割り状況（北から）	
図版23	越谷遺跡第2地区の調査	25・50
	第2遺構面全景（南から）	
図版24	越谷遺跡第2地区の調査	50
上	第2遺構面南側部分（北から）	
中	第2遺構面中央部分（北から）	
下	第2遺構面北側部分（南から）	
図版25	越谷遺跡第2地区の調査	25・26・27・28・29・55
上	調査区南壁	
中	調査区東壁	
下	第2遺構面井戸断ち割りトレンチ南壁	
図版26	越谷遺跡第2地区の調査	50・51・56・57・58
上	第2遺構面の土坑2（北東から）	
中	第2遺構面の土坑2（南西から）	
下	第2遺構面の土坑2の遺物出土状況（南から）	
図版27	越谷遺跡第2地区の調査	54・58
上	第2遺構面柱列の柱穴 左：柱穴1（北から） 右：柱穴1の北側の柱穴（北から）	
中	第2遺構面柱列の柱穴 右：柱穴2（北から） 左：柱穴2の南側の柱穴（南から）	
下	第2遺構面北東部分全景（東から）	
図版28	越谷遺跡第2地区の調査	58・59
上	第3遺構面確認トレンチ全景（南から）	
中	第3遺構面確認トレンチ全景（北から）	
下	第3遺構面確認トレンチ全景（北から）	
図版29	越谷遺跡第2地区の調査	58・59
上	第3遺構面確認Dトレンチ北壁	
中	第3遺構面確認Eトレンチ全景（北東から）	
下	第3遺構面確認Eトレンチ北壁（溝部分）	
図版30	源吾山古墳群試掘調査	63・64
上	南トレンチ（西から）	

中 北トレンチ（西から）

下 北トレンチ周辺のグリッド

図版31	伝待宵小侍従墓の出土遺物	17
図版32	越谷遺跡第1地区の出土遺物	23・24
図版33	越谷遺跡第2地区の包含層の出土遺物	42・43・44・62
図版34	越谷遺跡第2地区の包含層の出土遺物	42・43・44
図版35	越谷遺跡第2地区の包含層の出土遺物	42・43・44
図版36	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物	44・45
図版37	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物	44・45
図版38	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物	44・45
図版39	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物	44・45
図版40	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版41	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版42	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版43	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版44	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48・62
図版45	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版46	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版47	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版48	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版49	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版50	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版51	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版52	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版53	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版54	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物	44・46・47・48
図版55	越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑19・23・24・25の出土遺物	49・50
図版56	越谷遺跡第2地区の第2遺構面の土坑1・2の出土遺物	56・57・58・62
図版57	越谷遺跡第2地区の第2遺構面の土坑2の出土遺物	56・57・58・62
図版58	越谷遺跡第2地区の第2遺構面の土坑2・柱穴1と井戸の出土遺物	56・57・58・62
図版59	越谷遺跡第2地区の縄文時代包含層の出土遺物	60・61・63
図版60	越谷遺跡第2地区の縄文時代包含層の出土遺物	60・61・63

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境と調査の位置

大阪府三島郡島本町は大阪府の最北東端にある面積約16.8km²、人口約3万5百人の町制施行から約55年になる活気にあふれた町である。鉄道を用いれば大阪・京都の中心部へ約30分程度で着くという便利さから、近年は大阪・京都のベッドタウンとして著しい発展を遂げている。この島本町の周辺を取り巻く市町には大阪府高槻市、同枚方市、京都府亀岡市、同長岡京市、同八幡市、同乙訓郡大山崎町等がある。また、島本町の行政境の一部分には京都府と接している所があり、そのまま大阪府と京都府の府境となる部分が含まれている。地図上では、水都大阪のシンボルともいえる淀川の上流の右岸に位置する。

ここ島本町を大阪府と京都府の府境付近の地形のなかでとらえると、京都盆地と大阪平野の接続部分のような地であり、その地形を3つに分けることができる。地形的にみると山地部と丘陵・台地の部分が町有面積のうちの約7割近くを占拠し、残りの約3割は低地と扇状地性の沖積層による平野部の構成である。それぞれの地形的特徴を列記すると次のようになる。

山地部分 山地は島本町の北側にある。それらは丹波高原の地壘山地である西山山塊を構成するポンポン山山地（北から小塩山641m、ポンポン山679m、釈迦岳631m）と天王山山地（ポンポン山山地の南東側、天王山は270m）である。

丘陵部分 島本町域には北側の山地と南部の淀川低地にはさまれるようにして、丘陵がある。丘陵は天王山山地の西側と南側の山麓に巾狭い丘陵地形が分布しており、周辺の市町には一定の高度を保つ丘陵地から台地地形が展開しているが、島本町域にはそれらの発達は見られず天王山山地と男山丘陵が接近する狭隘部地形のため、丘陵や台地が発達しなかったと考えられる。天王山と男山は直線距離にして約3.0kmで山崎狭隘部と呼ばれている。また、大阪平野北部を扇にたとえたとこの山崎狭隘部は扇の要部分にあたり、島本町ならびにその周辺の平野部分は、淀川とそれに注ぐ支流の造作による扇状地性の堆積によって造られているとみることができる。なお、かろうじて丘陵地と分類できる山崎・桜井付近の海拔高は約30mの等高線で低地と分けることができる。

低地部分 島本町がその一環をなす淀川低地は、山崎狭隘部から下流に三川合流した淀川の作り出す氾濫平野の低地が中心で北西に富田台地、茨木台地、吹田台地、東の男山丘陵に続く交野台地、枚方台地からなり、さらに西南の大阪海岸低地とは吹田砂堆と天満砂堆によって区切られているが、南側は、寝屋川低地に移行している。島本町域内の沖積地は、大山崎から山崎にかけての丘陵ぞいの扇状地地形が前面に張り出し、さらに桜井西から神内にかけても扇状

地が見られる、これらは小河川の堆積物によるものであり、扇状地地形の発達は非常に悪いのが特徴である。淀川低地における平均的な海拔高は約10m前後である。同様に扇状地面のそれは約30m前後を測る。

次に平野部分における主要な河川の状況を見ると、先述の山崎狭隘部で京都盆地内を南流してきた桂川、琵琶湖から流れ出て京都盆地を西流してきた宇治川、南から北流してきた木津川の3河川が合流し淀川となって南西方向に流れるのである。島本町域内の主要な河川はこの淀

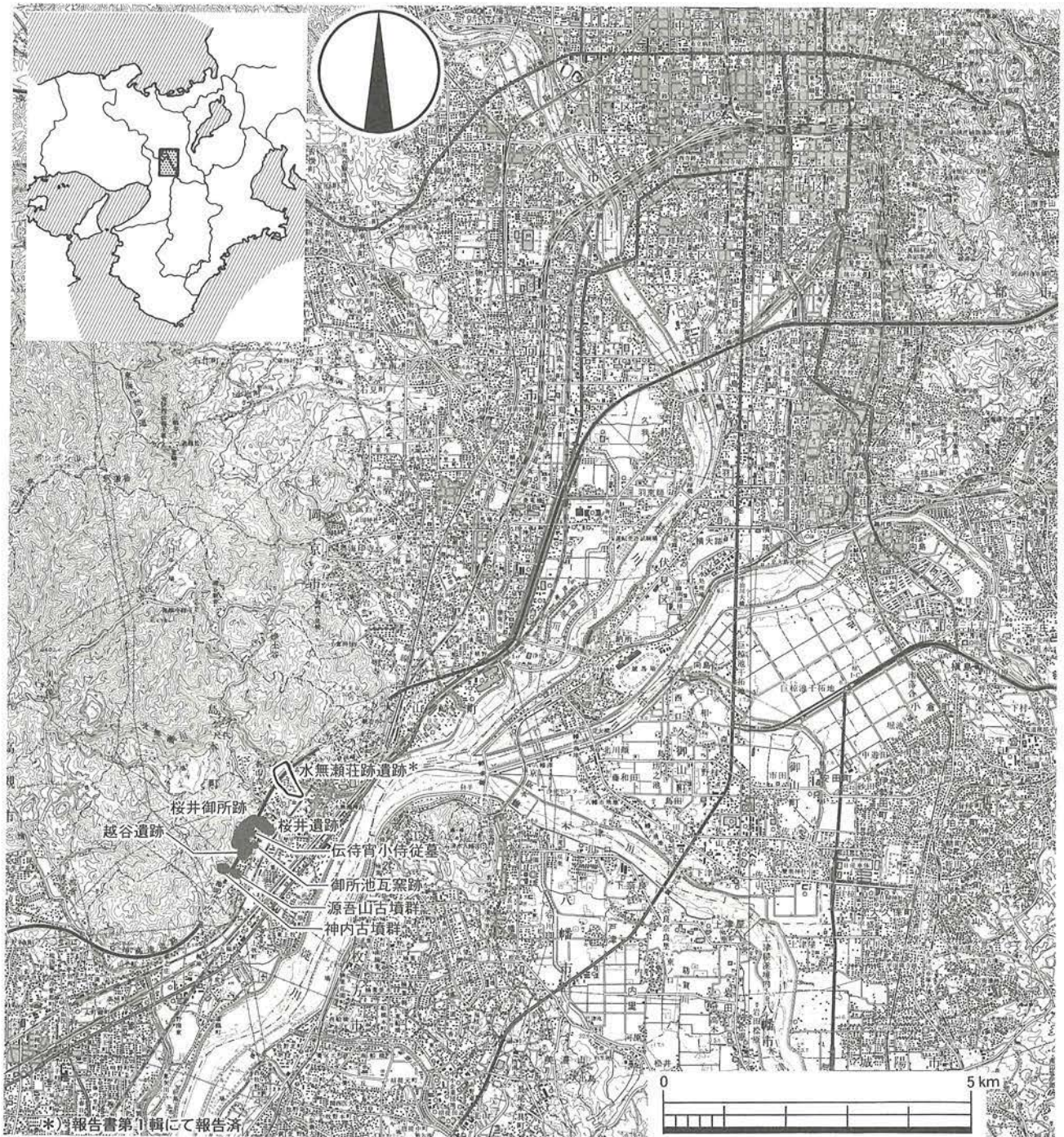


図1 調査対象遺跡の位置 1 : 100,000

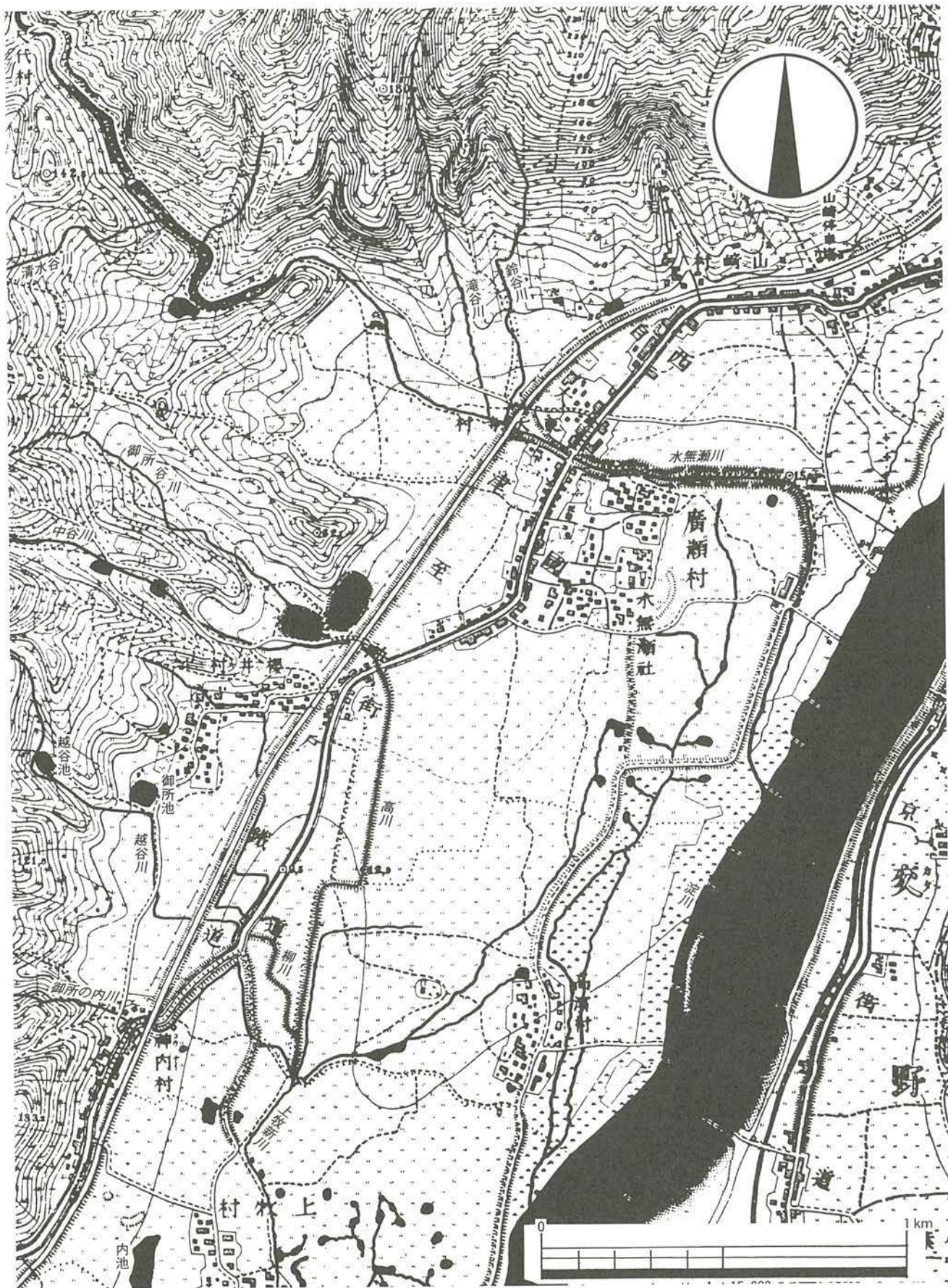


図2 調査地周辺の地勢と水系 1 : 15,000

川のみであり、その他は淀川に合流する小河川とその支流であり、これらの支流河川は島本町の平野部内においては、そのほとんどが南寄りから南東方向に流路を取っている。それぞれの詳細を北から順にみると次のようになる。

水無瀬川の水系について、水無瀬川とその支流である川久保川、尺代川、滝谷川、鈴谷川等の水系は、その源を釈迦岳南方に発する水無瀬川を本流にもち、平野部においてエンマ川が合流する以外は、山地部ないしは丘陵端部まででほとんどの支流が合流する。しかも丘陵部分から下流域で合流する支流河川は川の左岸側からの合流のみとなっている。

高川の水系について、島本町域内の桜井丘陵部の北側斜面と現在は造成されて消滅している百山の南斜面に挟まれる谷筋を流れる御所谷川、中谷川を集め島本町の水無瀬付近で高川となって後述の柳川と合流する。

柳川の水系は、桜井丘陵部の南側斜面と名神高速道路梶原トンネルを有する妙見山北側斜面に挟まれる谷筋の水系である柳川に越谷川、御所の内川、八幡川が合流し島本町の青葉で高川が合流し隣接の高槻市へと流れ、上牧新川となって淀川へ通じている。越谷川と御所の内川の間には、これも造成工事により既に半分が消滅し旧来の状況は判然としづらい、丸岡山がせりだして越谷筋と源吾山のある谷筋とに分断する。

島本町の平地部分に流れる水系が造り出す扇状地性地形は、最初にあげた水無瀬川の形成する部分とそれ以外の水系が形成する部分に分けてとらえることが可能で、これらの河川により造り出された平地部には現在の島本町の住民の生活の基盤がある。

以上、おおまかにとらえすぎたきらいもあるが、調査地周辺の地勢と水系（図2）に示したように、地形的な特徴でみる島本町の地理的な環境としておきたい。

続いて、この報告書で取り上げる遺跡の地理的環境について見ると、島本町桜井の周辺一帯には閑静な住宅街と豊穡な水田が広がっている。島本町桜井近辺の水田畦畔はおおむね正南北方向に仕切られていて、その一部の畦畔の方向性は乱れてはいるものの正南北方向を意識したものであり、それらの乱れようについては地形的な制約と用水路によるものであると解釈することができる。住宅地や農耕地の間を通っている西国街道をはじめとする一般道路は、北東方向から南西方向の往来である。やはりこれも何らかの形で地形的な制約を受けているのであろうか。それらの道路は近くにある大阪府立島本高校や、島本町立第3小学校の登下校路となっていて登下校時以外は交通量も少なく、ごくありふれた一般生活道路となる。

発掘調査対象地は、桜井丘陵の中にある越谷の谷筋の南斜面側部分と源吾山の北側の斜面中腹付近にある。越谷の谷筋内の桜井丘陵南斜面側には越谷池と御所池の2つの溜め池がある。越谷池は越谷谷筋の一番奥まったところに位置している。これは現状の地理的な位置に、いいかえれば名神高速道路の上り線側にある池である。さらに約250m南東寄りの位置に御所池が

ある。これも現状に照らしていえば、名神高速道路の下り線側にある池である。これらの池は溜め池であり、貯水の主な供給源は越谷川となっている。発掘調査対象遺跡はこの御所池を中心として、池の北西側に伝待宵小侍従墓と御所池瓦窯跡があり、池の南東側に桜井御所跡、桜井、越谷の各遺跡がある。

発掘調査対象地は、これらに加えて源吾山中腹の源吾山古墳群と神内古墳群のある源吾山地区の3地区であり、各遺跡に設定した発掘調査トレンチの設定状況を図に示せば、試掘トレンチ位置（図6）の様になっている。

第2節 調査地周辺の歴史的環境

次に調査地周辺の歴史的な環境を見れば、島本町桜井の周辺に限れば歴史上にその姿を時には伝説の形を借りて、また民間信仰のなかに根付く形を取り、今日にまで伝え残されてきた部分と、埋蔵文化財としてあまり人目に触れることなく大地の中で眠りについてきた部分に分けるであろう。このうち埋蔵文化財の多くは、『島本町史』作成時に行なわれた、現地踏査による遺跡分布状況調査の結果で確認された遺跡である。ここでは、これらを紹介することで島本町桜井に残されている、歴史的な環境について見ることとしたい。

現代における島本町桜井は『太平記』に語られている楠公父子桜井の別れの舞台として有名であるということができよう。すでに江戸時代より「楠氏父子訣別」の図や賛がつくられるなどして有名な地であった。この伝説をふまえて、特に戦前から第2次大戦が終わるまでの間には忠孝精神涵養の地として広く国民に知られることとなり、桜井駅跡が「訣別の地」としてもはやされ、当時の桜井は人の訪れが絶えることがなかったと伝えられている。現在は「桜井駅跡」（楠木正成伝説地）として国の史跡指定を受けている。

このほか、桜井周辺には桜井遺跡・桜井御所跡遺跡・伝待宵小侍従墓・御所池瓦窯跡・桜井駅跡・越谷遺跡・源吾山古墳群・神内古墳群などがある。これらの遺跡は名神高速道路内遺跡調査会が調査する以前には発掘例がまったく無く、詳細については知り得る資料も少ない。この数少ない資料等をもとにして桜井周辺の遺跡を概観したい。

まず島本町の桜井周辺において表面採集された遺物には、現行の名神高速道路建設工事時に表面採集された遺物がある。それは越谷・源吾山で表面採集された古墳時代後半頃の遺物である。それらの遺物については、古墳の副葬品である可能性が高いと考えられることから、表面採集地点の越谷と源吾山の2か所に古墳が存在している可能性が示唆されるとともに、それらの遺物が表面採集された周辺を古墳群の存在する場所として位置付けられ、越谷・源吾山古墳群として分布図上に古墳が複数基印象された。さらに、御所池池底中央付近にある巨石も石室の一部としてとらえられており古墳の一基に数えられている。

また、源吾山よりさらに尾根筋を上った場所にも、地面が墳丘状に盛り上がっている部分が数か所ありこれらも古墳群としてとらえている。源吾山古墳群とは別の古墳群として扱われ神内古墳群として分布図上に示されている。

ただし、これらの古墳群を現在の目で見れば、墳丘や主体部といった部分についての調査や検討が一切無く、古墳群の存在そのものについてもやや疑わしい状況を持ち合わせていることは否めない。

『島本町史』作成時に行なわれた現地踏査による遺跡分布状況調査において、桜井で弥生時代後期の遺物が表面採集され、桜井遺跡が確認された。

当調査会の理事である免山篤氏は、昭和48年頃に御所池の北東側堤防の周辺で、13世紀頃の土師器片を表面採集している。この遺物は御所池瓦窯跡に関係する遺物ではなく、瓦窯跡以外に周辺に中世の集落などが広がっている可能性を考えさせる資料である。

表面採集資料から知り得る埋蔵文化財の状況は以上の様に見ることができ、弥生時代の後期

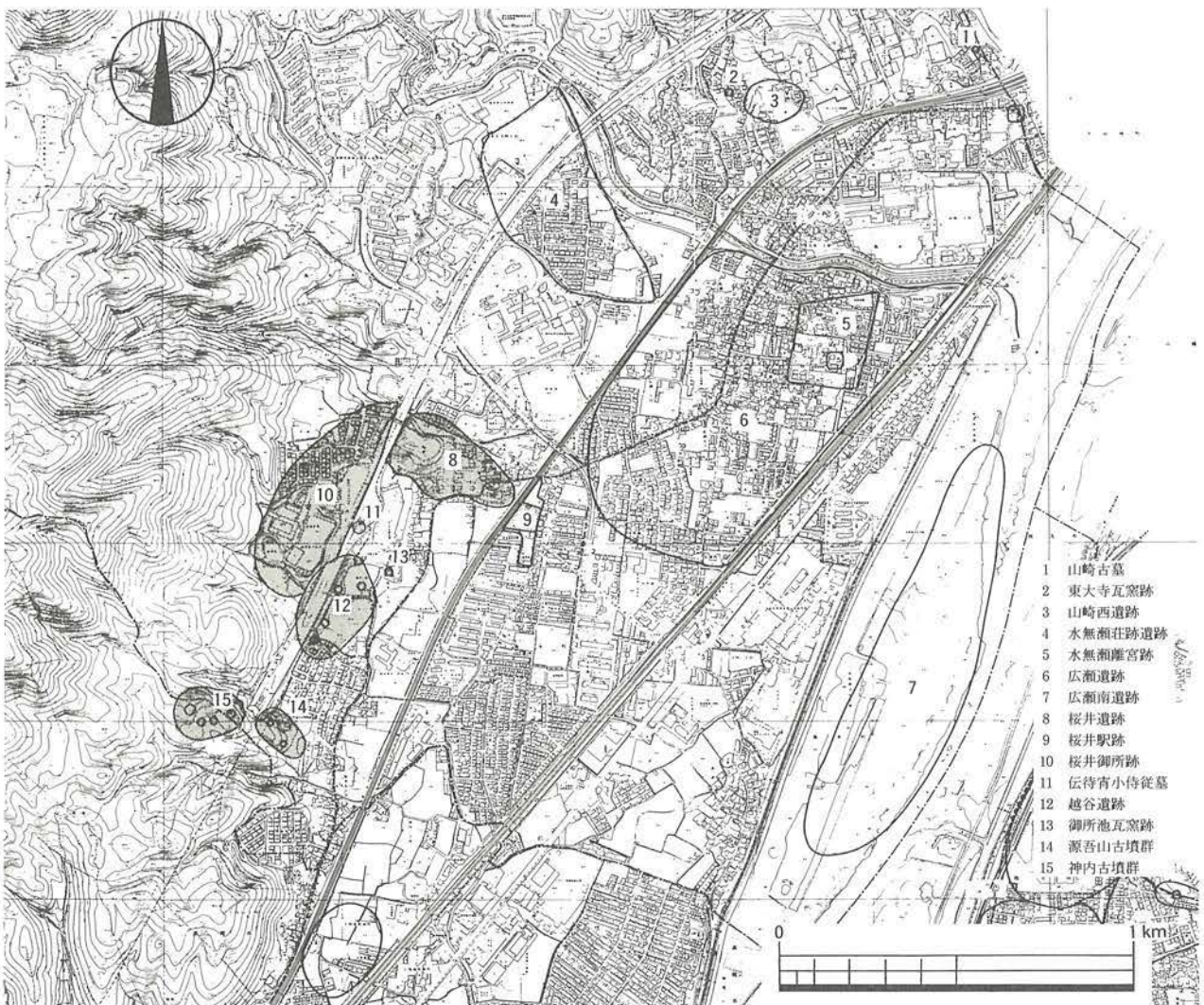


図3 三島郡島本町遺跡分布 1 : 20,000 (『大阪府文化財分布図』1991年) を元に一部改変

から、古墳時代の後期、奈良時代前期、鎌倉時代中期といった時代をそれぞれにあてることが可能である。これらをもとにして、さらに想像を加えることが許されるのであれば、桜井周辺の歴史的な環境として考えることができるのは概ね以下のような時間的推移を経ていると推定できるであろう。

最も古い段階の弥生時代の後期には、桜井丘陵部分に集落が展開していたということであろう。続く古墳時代の後期には、丘陵地から平地部にかかる部分に群集墳が存在している可能性があるため、それらに伴う集落の展開も桜井の平地部分に容易に想像できよう。ただし、同時代の前期、中期については表面採集された遺物資料が無いためにここでは言及できないが、少なくとも弥生時代の後期頃には桜井の周辺に集落ができ、人々の暮らしが営まれていたと想定できるので、それらが古墳時代の中期まで続いていたのであれば、後期に入って桜井近郊の集落を治める地方豪族が桜井に本拠をもち、古墳群を築いていったととらえるのが自然であろうか。

奈良時代以降の桜井周辺については、和銅4年(704年)都亭の駅として各地に置かれることになった駅のひとつである大原の駅が桜井周辺に置かれたと考えられており、交通の要衝の地としての重要性をもつ土地として律令国家の中で取り扱われていたと考えることができる。

続く平安時代に入ると考古学的な資料に欠るが「桜井の御所」が置かれた土地として、御所

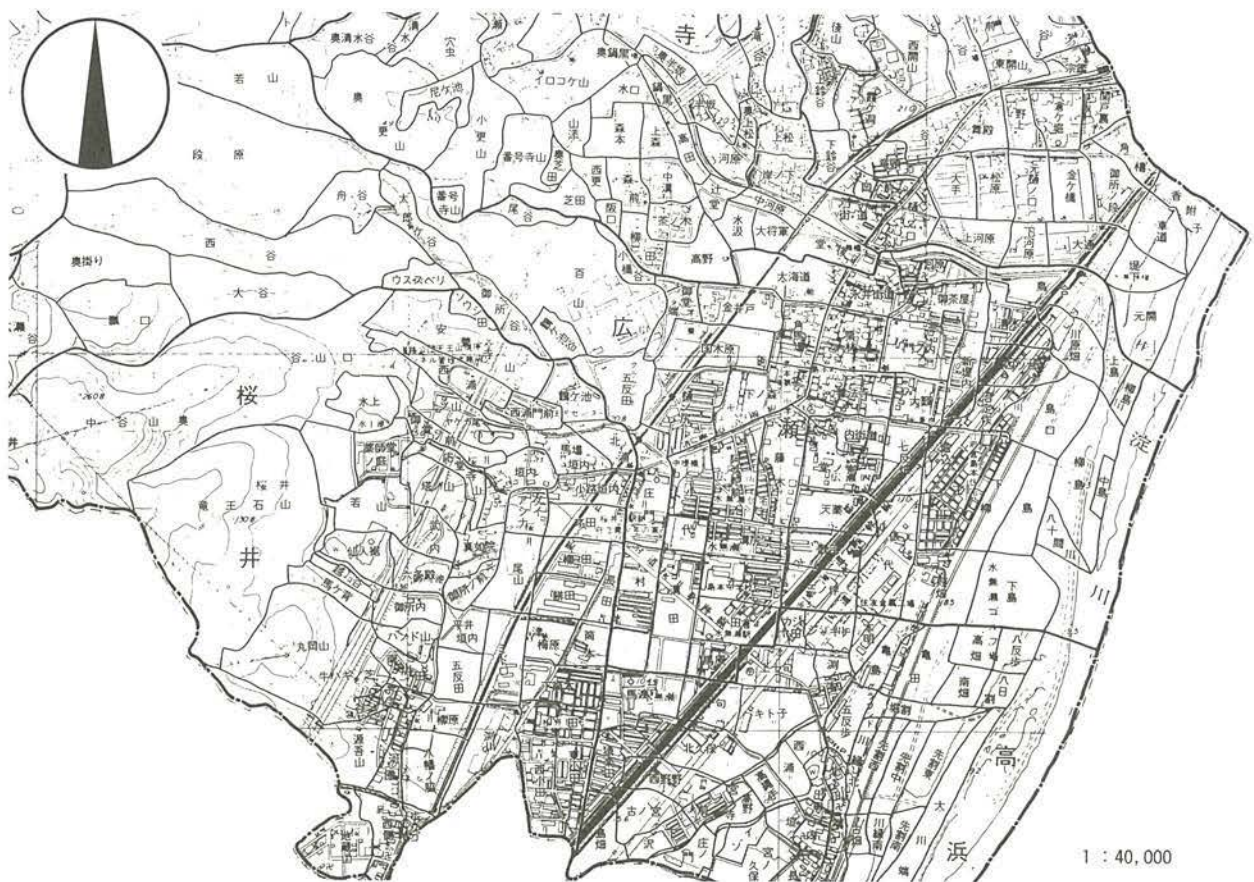


図4 調査地周辺の大字・小字（『島本町史』資料篇付図1976年）

池の周辺が比定されていることもあり、平安時代の王朝貴族が好む土地として俄に桜井周辺は、その存在感をつよく印象付けるのである。

また、同時代には島本町桜井に縁の深い歌人である待宵小侍従がその晩年を同地で過ごしたとされており、平安時代から一流の文化人にも愛された風光明媚な土地でもあったといえるのではないだろうか。

これらを含めて島本町内には現在15か所の埋蔵文化財包蔵地としての遺跡があるが、次に桜井周辺の遺跡のみを抽出し、状況を述べておくことにしたい。各遺跡どうしの位置関係については、三島郡島本町遺跡分布（図3）を参照されたい。

桜井遺跡（図3-8）

桜井遺跡が分布する範囲は東西約350m、南北約260mあり、標高約44mから約12mまでの丘陵からなだらかな緩斜面地に展開している。平成3年度に丘陵部分において島本町教育委員会の手による試掘調査が実施されているが、調査の状況は現況の地表面のすぐ下には地山層が堆積しており、遺構や遺物は検出されていない。

桜井御所跡（図3-10）

この遺跡が分布する範囲は東西約240m、南北約620mあり、標高約40mから約50m付近の桜井丘陵上の一帯に展開している。現有の名神高速道路建設工事時に奈良国立文化財研究所によって行なわれた実測調査では、平安時代初期の宮苑遺跡である旧嵯峨院園池（大沢池）との類似点が多いことに加えて、字名や地形等を総合的に解釈して桜井の御所跡に比定する調査結果が導きだされている。

伝待宵小侍従墓（図3-11）

待宵小侍従は平安時代の歌人であり、石清水八幡宮の別当大僧都光清の娘で、太政大臣藤原伊通の子の伊実に嫁ぎ寡婦となって後に、二条天皇に仕え天皇崩御の後には大皇太后藤原多子に仕える。大皇太后小侍従として歌壇にも度々出席し、歌人としての才能を身につけたとされている。「待つ宵に ふけ行く鐘の こゑきけば あかぬ別れの 鳥は物かは」の一首が『新古今和歌集』に収録されており、この歌が待宵小侍従の名の由来となっている。

この小侍従墓は、名神高速道路の梶原トンネル東側出入り口付近の桜井パーキングエリア敷地内の一角にとり残されたようになった、顕彰碑と五輪塔の一部（水輪）をもって墓にあてている。拡幅工事に先立つ発掘調査の終了後に、これらの顕彰碑と五輪塔を高速道路の外側法面にポケットパークとして整備された敷地内に移築された。

越谷遺跡（図3-12）

この遺跡はかつて越谷古墳群とされてきた遺跡であったが、平成3年3月発行の『大阪府文化財分布図』からは越谷遺跡とされている。同分布図では越谷古墳群も越谷遺跡も同一場所を

指し示している。古墳群以外の性格ももつ遺跡として修正登録されたのであろうが、本書の成果から照らし合わせてもこの評価が正しいといえる。

この遺跡は桜井丘陵の南西側にある越谷筋の標高約30m付近に展開している、現名神高速道路建設時に6世紀中頃の須恵器や土師器が出土し、それらの出土場所や遺物の損壊程度の少なさなどから総じて、周辺が古墳群としてとらえられるようになった。なお、遺跡は名神高速道路内遺跡調査会により行なわれた平成3・4年度の発掘調査の開始まで、詳細な調査の機会に恵まれず、開発行為もなかったため、地下の保存状況は極めて良好な状態にあると考えられる地域であった。

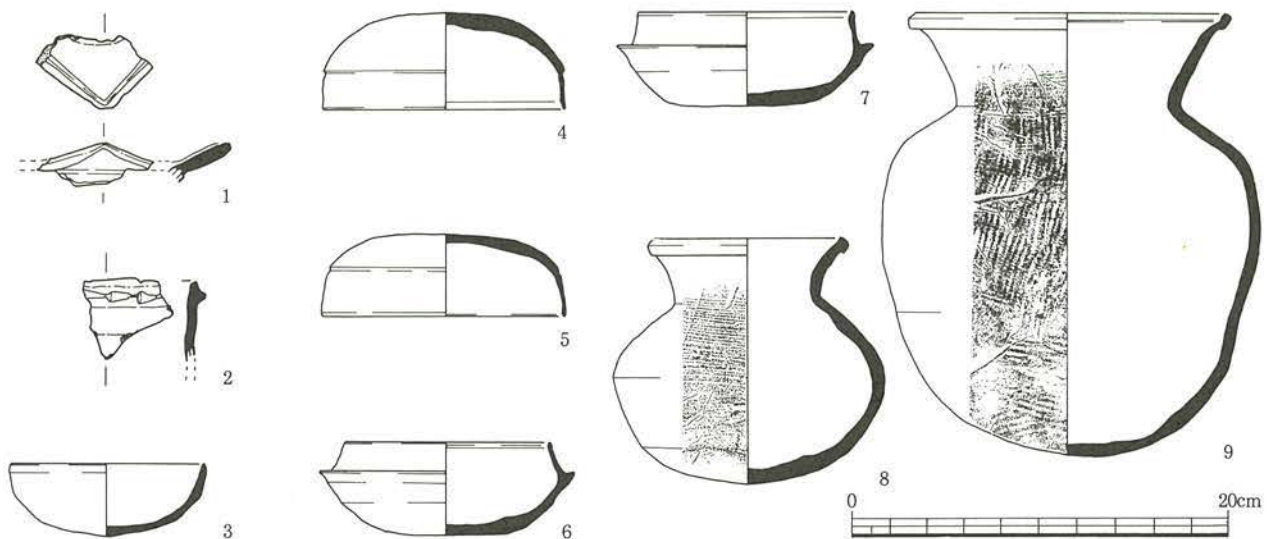


図5 越谷遺跡（3～9）・水無瀬荘跡遺跡（1・2）の採集遺物

御所池瓦窯跡（図3-13）

御所池の北東側堤防部分に瓦窯跡と見られる灰層の露呈部分があったとされるが現況では確認できない。周辺で表面採集された遺物については先に触れたとおりである。なお、『大阪府文化財地名表』には同瓦窯跡は、出土遺物として布目瓦と窯壁片を記録し奈良時代の時期を当てはめているが、それらの遺物ならびに壁体を見ることはできなかった。

源吾山古墳群、神内古墳群（図3-14・15）

両古墳群は桜井丘陵の越谷の谷筋ではなく、谷筋の南側の丸岡山をはさんでさらに南西側に位置する、御所の内川が形成する谷筋の右岸の丘陵部分の中腹にあたる場所であり、標高にして約60～120mの一角を占地している。（標高約60～100mの位置に源吾山古墳群が所在しており、標高約100～120mの位置に神内古墳群が所在している。）このうち、源吾山古墳群の標高約60m付近から源吾山裾部分にかけての周辺から採集されている遺物が、6世紀中頃の副葬品と推定される須恵器である。よって、この時期に相当すると考えられている古墳群である。

第II章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

名神高速道路とは、愛知県小牧市から兵庫県西宮市までの間に建設された全長約190kmにおよぶ、わが国最初的高速自動車専用道路であり、昭和38年に供用開始された中央自動車道西宮線のことである。開通当初は、高速自動車専用道路としての機能を如何なく発揮してきたのであるが、近年の著しい交通量の増加により発生する交通渋滞により、高速道路本来の機能を失いつつあるというのが現状であった。この現状を解決するとともに、高速自動車専用道路の本来の機能である高速走行や区間移動の定時性を保ち、今後も容易に想像される車両の大型化等に十分に対応するために、京都南インターチェンジから吹田インターチェンジまでの区間と、栗東から瀬田東の両インターチェンジ間を3車線化する拡幅事業が実施されることになった。

これらの拡幅事業対象地内には、現用の名神高速道路建設工事が行なわれた時から、すでに多くの埋蔵文化財の存在が知られていた。昭和57年の拡幅事業計画決定を受け、名神高速道路拡幅事業地内の文化財の取り扱いの協議がなされた結果、文化庁・関係府県教育委員会・日本道路公団との間で、文化財の保存にたいしては、十分に配慮する必要があると合意されるに至った。この経緯をふまえて大阪府域（天王山トンネルから吹田インターチェンジまでの約19.6kmの区間）では、大阪府教育委員会・当該市町教育委員会と日本道路公団大阪建設局の間で、遺跡の取り扱いについての協議が重ねられ、文献資料による予備調査や、現地の踏査等を経て約40か所の埋蔵文化財包蔵地を確認するとともに、これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、高速道路の拡幅事業に先立って発掘調査を実施することで合意に至った。

先に確認した約40か所に及ぶ遺跡の発掘調査実施を計画するにあたり、これらの遺跡が大阪府下の2市1町にわたって存在しているため、調査規模が大きく調査期間も多大なものとなることが予想されることとなり、また、発掘調査の実施にあたっては、調査方法や調査費用の算出、保存協議等に統一的な対応が必要となった。

このため、拡幅事業に先立つ調査は、茨木市・高槻市・島本町の教育委員会社会教育課と大阪府教育委員会文化財保護課で共同調査を行なうことが基本方針とされ、それぞれの市と町から専門職員を派遣する調査会を設立して、発掘調査を実施することとして合意に至った。

以上のような経過により、平成2年11月16日、名神高速道路拡幅事業地内の埋蔵文化財の調査を行なうことを目的とした「名神高速道路内遺跡調査会」が発足した。

第2節 調査の経過

大阪府下の名神高速道路拡幅工事は、天王山トンネルから吹田インターチェンジまでの約19.6kmが対象となったが、渋滞が慢性的に発生する場所である、天王山・梶原の両トンネルから、高槻バス停までの部分の拡幅がまず着手されることとなったことから、拡幅事業地内の発掘調査もこの部分から実施することとなった。

このため、名神高速道路内遺跡調査会の発掘調査計画は、拡幅工事予定地の用地買収等の進捗と拡幅工事計画に密接に連動している。

個別の具体的な各遺跡の発掘調査の計画は毎年度末に開かれる、名神高速道路内遺跡調査会内に組織された指導委員会により計画され、理事会の承認を受けて、翌年度の名神高速道路内遺跡調査会の事業計画として実施してきたところである。本報告書に述べる各年度ごとの調査遺跡と担当者、調査面積等については別表に示したとおりであるが、本報告書以外の拡幅用地内の遺跡発掘調査との重複についてふれておく。

平成2年度に計画され発掘調査にとりかかったのは、大阪府三島郡島本町東大寺3・4丁目に所在の、水無瀬荘跡遺跡である。すでに報告書を刊行している。

翌平成3年度の調査計画は、水無瀬荘跡遺跡、梶原古墳群やこの報告書に扱う越谷遺跡の発掘調査であり、梶原古墳群の調査を通年計画とし、その他の遺跡については用地買収等の進捗をにらんだうえで、水無瀬荘跡遺跡は秋頃に、越谷遺跡は新年以降として計画され、計画に基づいて調査を実施した。この結果、大阪府高槻市梶原と大阪府三島郡島本町東大寺ならびに桜井の3か所で調査を実施することとなった。年度当初は調査担当者2名の体制で出発したが、年度途中の10月には調査担当者1名の増員を得て、複数か所に重複する調査区のすべてに担当者が常駐するという形をとることができ、ひとつの調査現場には1名の調査担当者が常駐するという形が確立された。

平成4年度の調査計画には、この報告書に扱う源吾山古墳群と伝待宵小侍従墓、御所池瓦窯跡、梶原瓦窯跡の発掘調査が新たに加えられ、今回の報告書の主要な調査区の発掘が含まれる年度となった。

通年の調査として計画したのは、越谷遺跡、梶原古墳群、梶原瓦窯跡である。その他の遺跡についてはこれらの遺跡と重複するために、越谷遺跡に配置した担当者2名がそれぞれ順に、他の遺跡を調査する間の一定期間だけ、かけもち調査を行なわざるを得なかったため、平成4年度の途中から調査担当者を2名増員し、対応することになった。しかしながら、事業地が増加した結果、調査以外のさまざまな業務も増加することとなり、この問題を解決するために平成5年度からは、大阪府教育委員会から調整指導の役に専従の技術職員を派遣していただくこととなった。

平成5年度の調査計画は、通年計画には水無瀬荘跡遺跡と新たに真上遺跡を加えた。その他の遺跡としては、伝待宵小侍従墓の2次調査を秋頃に、また名神高速高槻バス停より西宮側の調査区も加えられることとなり、土室遺跡と鶏鬮野古墳群の試掘調査も計画に加えられた。この報告書に扱う遺跡の発掘調査はこの年度内ですべて終了することができた。

名神高速道路内遺跡調査会では、平成3・4年度に市民を対象として発掘調査現場説明会（見学会）を実施しているが、これとは別に本報告書におさめた越谷遺跡では、遺跡の近隣の小学校の教員と児童の希望が端緒となり、小学生を対象とした見学会を開くこととした。このときには島本町教育委員会社会教育課の協力を得て島本町にあるすべての小学校の6年生の児童を対象として、平成5年1月29日に発掘調査現場説明会（見学会）を行なう事ができた。

また、はしがきでもふれている通り、島本町教育委員会社会教育課の要望を受け、平成6年度に行なわれた島本町文化祭において、越谷遺跡の出土遺物を中心とした展示と展示物解説を行なうとともに当調査会が実施した島本町内の名神高速道路拡幅工事関連の発掘調査の成果の発表を行なった。

年 度 調査地区 (m ²)	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度
桜井遺跡 第1トレンチ (250m ²)			10月試掘	
伝待宵小侍従墓 第2トレンチ (108m ²)				4月試掘 10月から全面調査
御所池瓦窯跡 第3トレンチ (100m ²)			11月試掘	
越谷遺跡 第4トレンチ (48m ²)	2月試掘			
越谷遺跡 第5トレンチ (511m ²)		1月試掘 1月から3月に 全面調査		
越谷遺跡 第6トレンチ (3710m ²)			5月試掘 5月から3月に 全面調査	
越谷遺跡 第7トレンチ (262m ²)			9月試掘	
桜井御所跡 第8トレンチ (650m ²)			7月試掘	
源吾山古墳群 第9トレンチ (810m ²)			6月試掘	

表1 各地区ごとの調査期間

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 試掘調査（図6）

調査は遺構・遺物の残存状況と埋没深度を把握することを目的として、トレンチによる試掘調査から実施した。

試掘調査トレンチの設定は指導委員会の指導を受けて図6に示したように配置した。各トレンチの調査方法は、盛土および現代耕作土層までを重建設機械（バックホー）によって掘削を行い、それより下の遺物包含層については、作業員の手作業による掘り下げによって進めた。この結果試掘トレンチの総延長は約1,025mに及んだ。

試掘調査によって遺物包含層や遺構面を検出したのは、第2・5・6の各トレンチである。第2トレンチは伝待宵小侍従墓に、第5・6トレンチは越谷遺跡に該当する。

この結果をふまえて、第2・5・6トレンチの周辺部分を全面調査、その他の部分は工事掘削の立会調査とすることが、指導委員会で決定された。



写真 伝待宵小侍従墓頭彰碑（東から・昭和40年頃撮影）

（名神開通前）

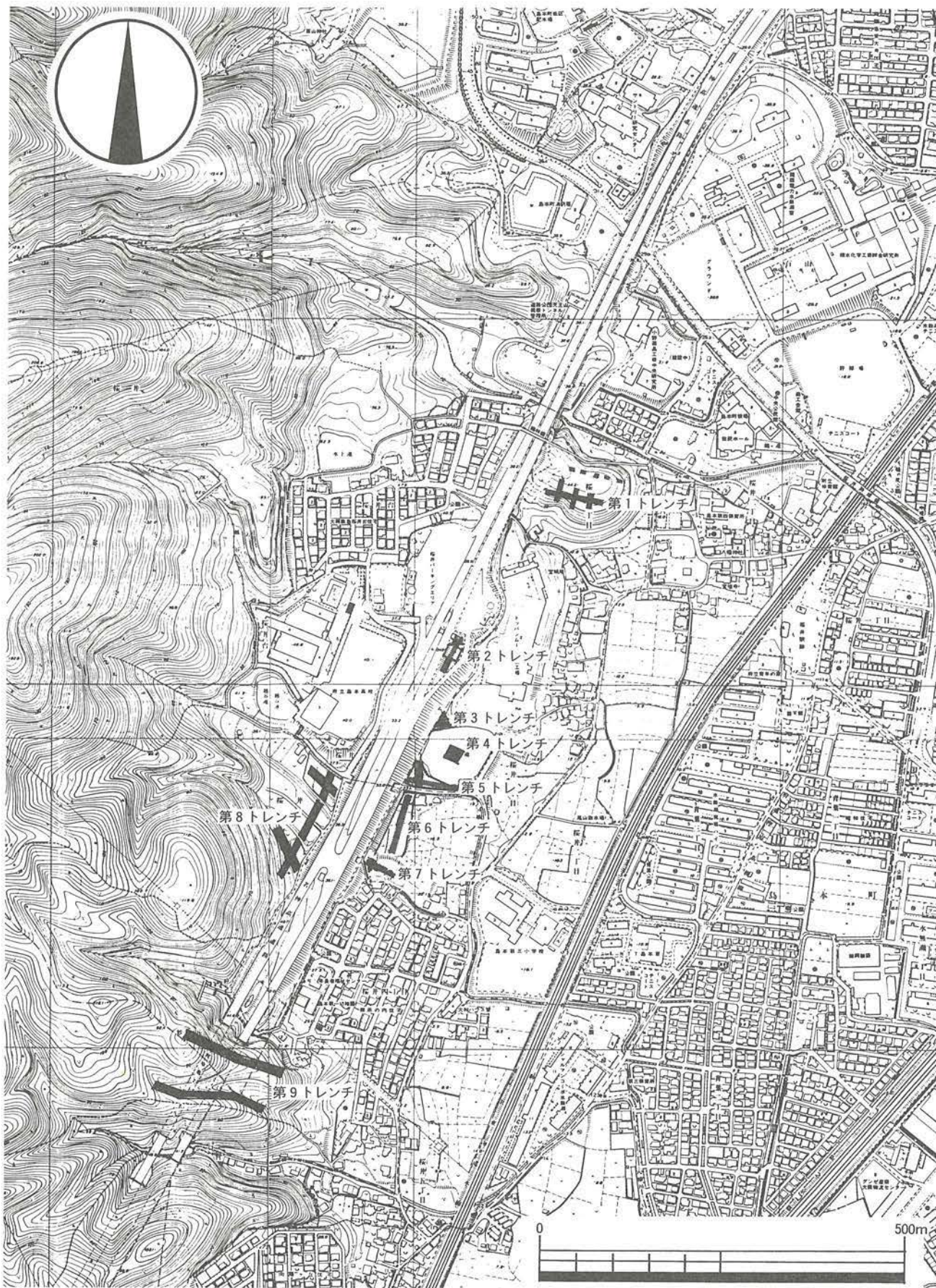


図6 試掘トレンチ位置

第2節 伝待宵小侍従墓の調査（図7・8・9）

1 調査区の位置（図6 第2トレンチ）

調査区は名神高速道路の敷地内にある桜井サービスエリアの空地に位置する。現用の名神高速道路建設により削平を受け、今や山と呼べるような姿はなくなってしまっているが、地元では苔山と呼称されている地域でもある。

試掘調査トレンチの成果を受けて全面調査用に設定したトレンチは、この苔山の北西側斜面の中腹の標高約32mの地点であり、待宵小侍従の顕彰碑が建つ場所を中心として一辺約6mの正方形に調査区を設定した。

ここは、待宵小侍従の墓と伝えられる五輪塔の水輪部分が残っていた場所であり、慶安三年（1650年）高槻城主であった日向守永井直清が建てた碑（碑銘は林羅山によるものである）が現在も残っている。

ただし、この顕彰碑も移築されてきたものであるのか、基礎の部分と碑銘文の面の下部の一部分に、セメントによる補強が施されていて、現状では文章が続かず文意も伝わらないような状況となっている。

2 基本層序（図7）

土層の堆積状況は地山層が調査対象地の中央付近で谷状に落ち込んでいた。この部分には整地土層や遺物包含層が堆積していたが、その他の部分は地表土層のすぐ下に地山層となっている。調査対象地のほとんどが後者のような部分で占められていた。

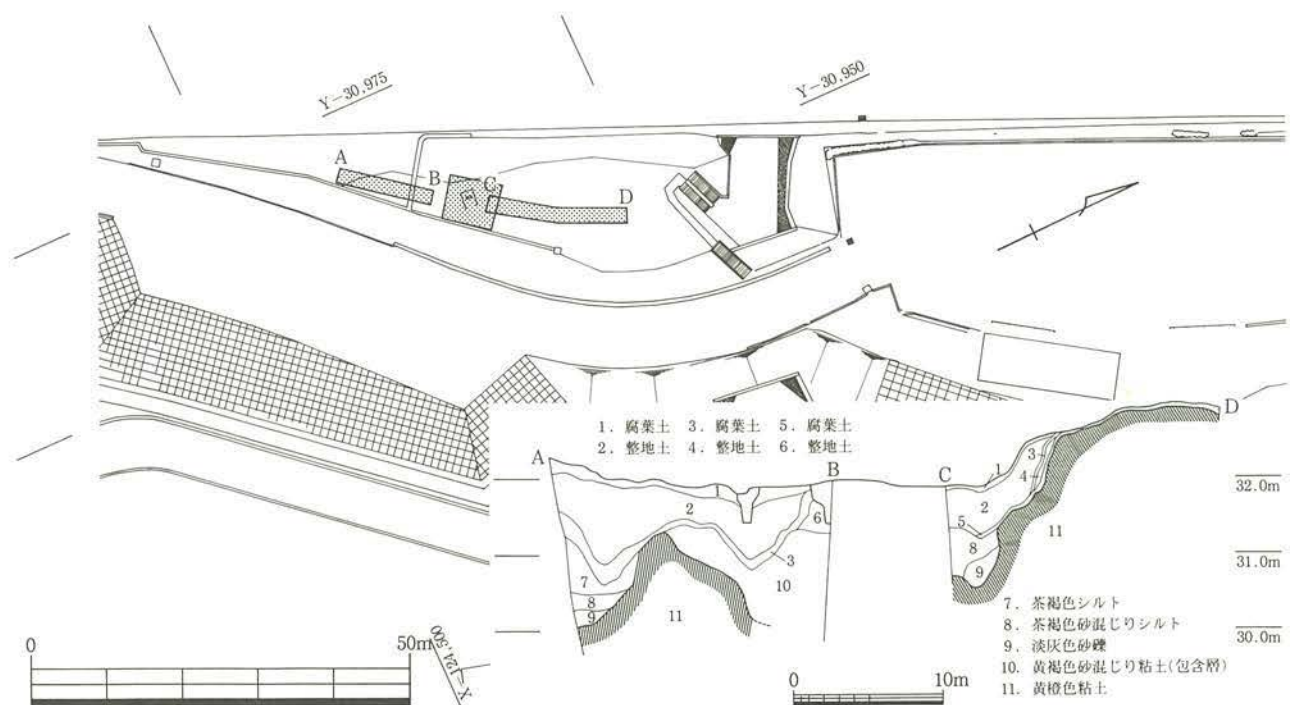


図7 伝待宵小侍従墓の調査トレンチ位置・土層断面図のデフォルメーション

調査区内の層序は伝待宵小侍従墓の調査トレンチ位置・土層断面図のデフォルメーション（図7）に示したとおりである。堆積の順序でいうと上から順に地表土（腐葉土）層、整地土層、遺物包含層（黄褐色砂混じり粘土）、地山層（黄橙色系の粘土あるいは、黄褐色系の砂混じりシルト）となる。この調査区内の遺物包含層より出土する遺物は、弥生時代の後期の遺物のみであり（図9-1～6）出土した遺物のすべてが、表面から欠け口にいたるまでかなり磨耗した状態である。したがって検出した遺物包含層は、プライマリーな状態にあったとは考えにくい。

また、包含層より上の部分に堆積する整地土層より、土師器・瓦器・須恵器（図9-7～9）が出土している。

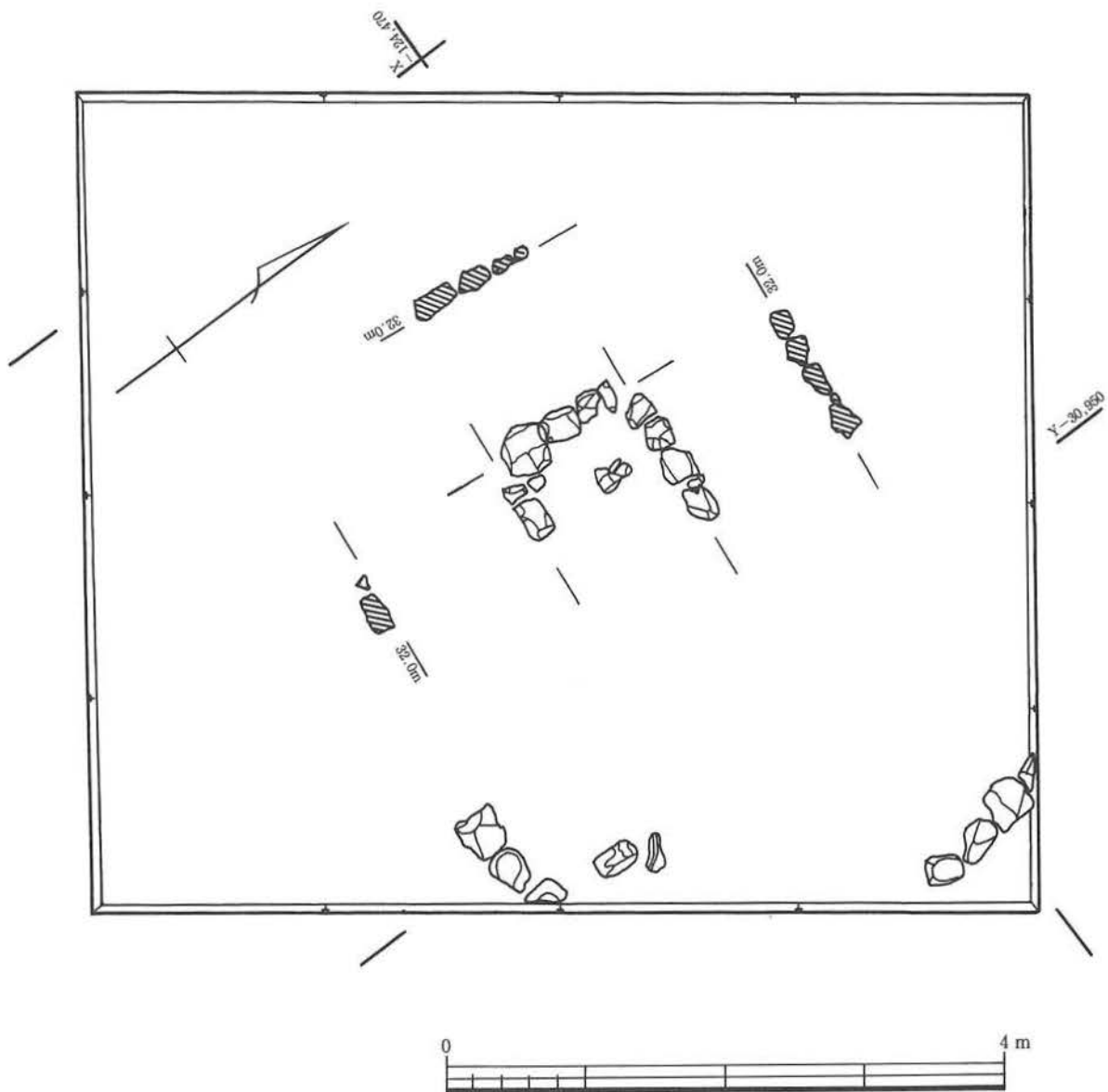


図8 伝待宵小侍従墓石組遺構の平面図・断面図

3 検出遺構

石組遺構（図8）

調査区のはぼ中央と東側の隅付近で石組遺構を検出した。検出面は調査区内の地表土層のすぐ下の地山層の上面である。

中央の石組は約0.30mの大きさに、角の丸くなりかけた石を10個用いてコの字形に配列させたように組み合わせている。コの字形のはぼ中心に1個だけ石があったが、検出状況が地山層よりやや浮いた状態であり、この石が何らかの特別な意味をもつものではないと考えられる。

東側の隅付近の石組も同様の大きさの角の丸くなりかけた石を用いている。一部分は調査区外となるが、L字形に6個配列させたように組み合わせている。コの字形の場合に見られるような、地山層よりやや浮いた状態の石も検出している。

この遺構には伴う遺物が出土していないので、明確な時期を決めることはできなかった。ただし表土直下の削平された地山層の上面で検出していることから、基本層序による堆積順などを考慮してあえて時期をあてはめるなら、近世以降の時期ではないかと推定される。

4 出土遺物（図9）

図9-1は弥生時代後期の甕で口縁部は短く外反して立ち上がり端部は丸く納める。調整は土器表面の磨耗が著しく不明、小片であるため口径は復元できなかった。

図9-2～6も弥生時代後期の甕または壺の底部である。図9-2・3・4の外面上には叩きの痕跡が認められる。

図9-7は土師器の皿で、底部を平らにつくり口縁部はゆるやかに内湾気味に立ち上がり端部を丸く納める。図9-8は瓦器碗で、磨耗が著しいために調整や時期等不明である。図9-9は口縁部を欠損する須恵器の壺で底部に回転糸切りの痕跡が認められる。図9-7・9は平安時代前期頃のものであろうか。

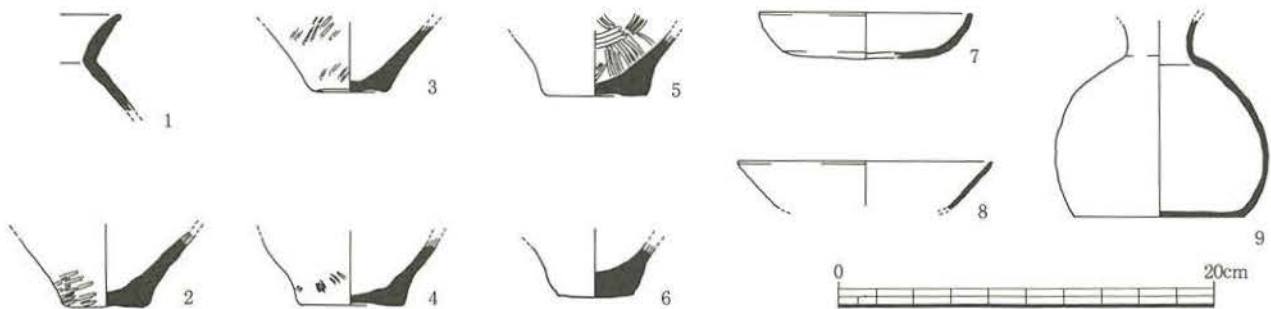


図9 伝待宵小侍従墓の出土遺物

5 小結

上記した調査の成果から判断して、調査対象地にあった五輪塔の水輪部を待宵小侍従の墓であるとするような成果は得られなかった。同様に顕彰碑は慶安三年（1650年）に日向守永井直

清が建立した本来の場所であると確認できるような成果も得られていない。

待宵小侍従の墓所がどこであったのかについては、考古学的な手法のみでは検証することなどできないが、今回の調査対象地とした場所には、トレンチ調査の成果からみて平安時代の古墓等が存在していた可能性は非常に少ないといえるだろう。

出土遺物の中には時期的に一致する遺物があるが、2次的な堆積層である谷地形を埋める整地土層より出土したものであり、調査トレンチ内やそのまわりには、それらの遺物が示すような年代の遺構が存在しているとは考えにくい。

調査区内で検出している弥生時代の遺物包含層も、谷底部分だけに堆積していることから、2次的な堆積層である可能性を考えておきたい。このことは周辺に弥生時代後期の遺跡が存在していることを示唆するものではないだろうか。

なお、調査地に残存した顕彰碑と五輪塔の水輪部は、平成7年度に桜井サービスエリアの空地から南東方向に約120m離れた所の名神高速道路盛土の法面に移築されて、広場として整備されている。

第3節 越谷遺跡の調査（図6 第5・6トレンチ）

越谷遺跡内には、3本の試掘トレンチを設定した。先にも述べたようにこれらのうち第5・6トレンチからは遺構・遺物が検出されたため、発掘調査を行なうこととなった。この第5・6トレンチの間には、生活道路が走ることから便宜上北側を第1地区（第5トレンチ）南側を

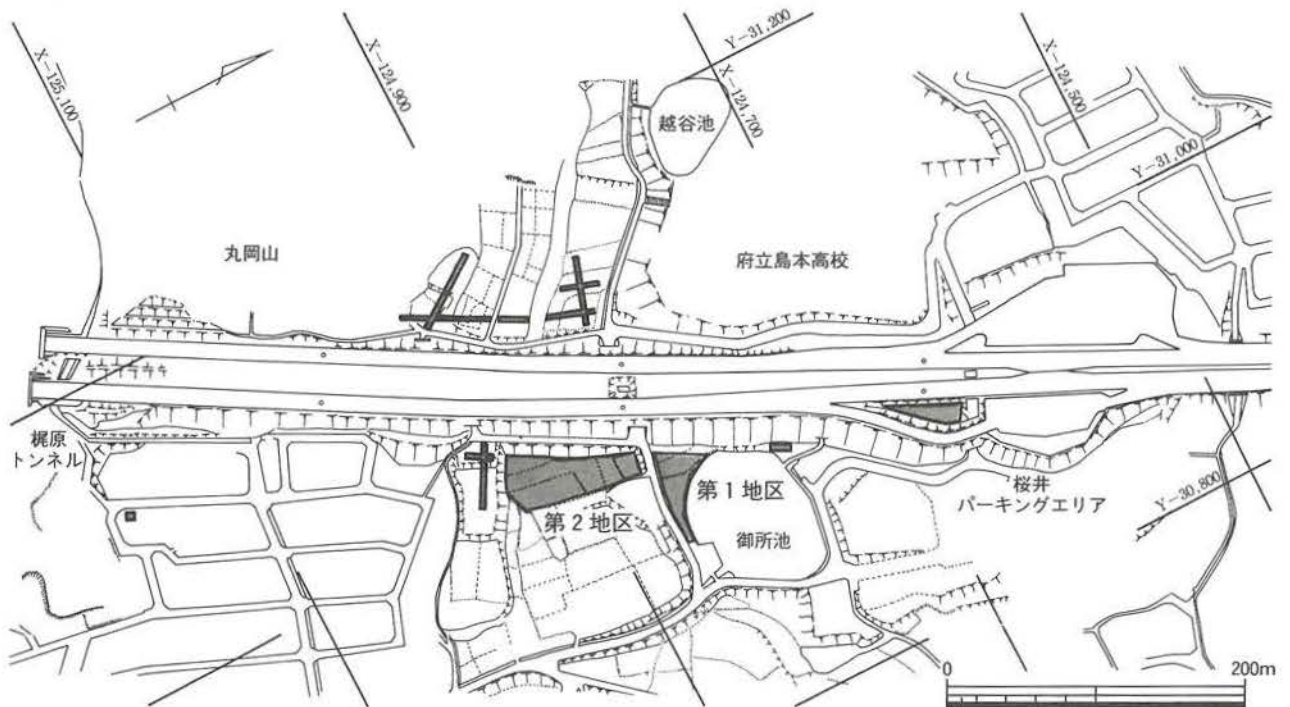


図10 越谷遺跡第1地区・第2地区位置

第2地区（第6トレンチ）と呼ぶことにした。

第1項 第1地区の調査（図10～15）

1 第1地区の位置（図10）

名神高速道路の下り車線側で御所池の堤防部分に位置する。拡幅工事ならびに御所池の水を抜く時期との兼ね合いから、平成3年度と4年度の2期に分けて発掘調査を行なった。

2 基本層序（図11・12）

調査区の基本層序と御所池堤防盛土の状況は図11・12に示したとおりである。御所池堤防断面図の北側（池側）は堤防部分を約3m残しているために、図12では堤防の池側の端まで図化できていないが、周辺の土層も参考にすると図12中の第15層より下の層序が水平に約3m続いて、水の侵食により段がついてとぎれている。それより上は築堤のために盛土されたままの部分と、崩落した状態の部分を観察することができた。第15層より上面は築堤のための盛土である。第15層は築堤前の旧耕土の床土であり、これ以下地山層までが遺物包含層である。なお、図化した場所より東側には、図中の第18

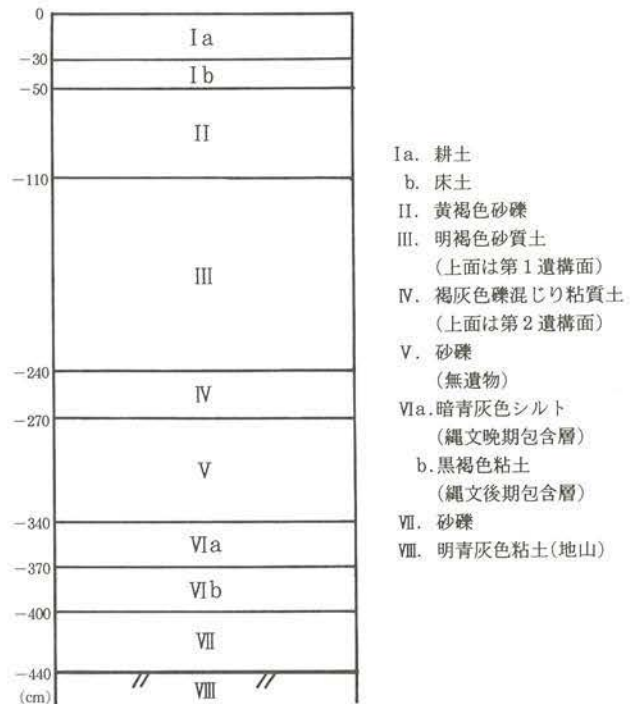


図11 越谷遺跡の層序の概念図

層と第19層の間に褐色系の砂礫混じり粘土層が約0.40mの厚さで堆積している。この調査区で検出した遺構面は、図中の第15・16層を除去した上面（第1遺構面）と第19層の地山層の上面（第2遺構面）である。

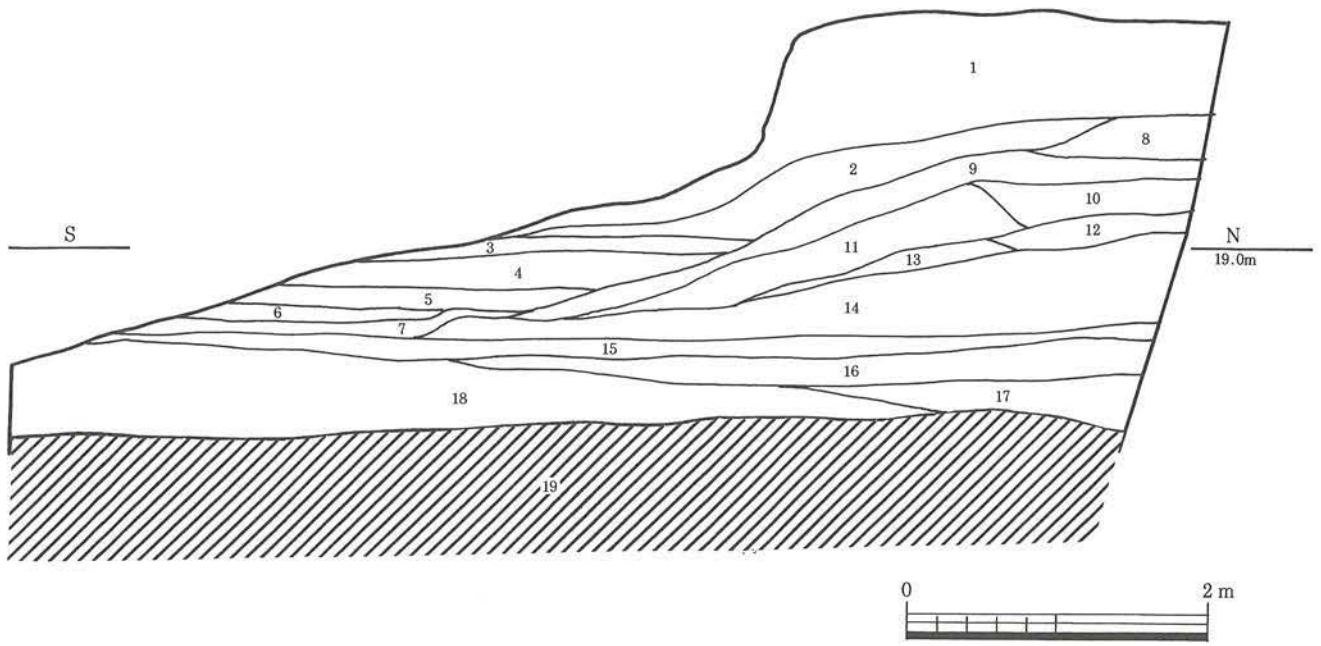
3 検出遺構（図13・14）

検出した遺構には土坑、溝、柱穴、落ち込みなどがあり、第1・2遺構面に分かれている。第1遺構面では土坑、溝を検出し、第2遺構面では柱穴、溝、土坑、落ち込みを検出した。

第1遺構面（図13）

土坑

この面で検出した土坑は、調査区の南西隅付近でまとまっており、全部で12基検出した。平面形はすべて方形を基本にしているようであるが、隅が丸くなりかけたような方形から、楕円形に近いものまでさまざまであった。規模は最も大きいもので長径約1.40m、最も小さいもの



- | | | |
|------------------|-------------------|------------------------|
| 1. 盛土 | 7. 黄灰色砂(小礫混じり) | 13. にぶい黄褐色砂 |
| 2. 黄褐色粘質土(小礫混じり) | 8. 明黄褐色粘土 | 14. にぶい黄褐色粘土 |
| 3. 黄褐色砂礫 | 9. 灰黄褐色粘質土(中礫混じり) | 15. 橙色粘質土(旧床土) |
| 4. 明褐色砂礫 | 10. 明黄褐色粘質土 | 16. にぶい黄褐色粘質土(中世遺物包含層) |
| 5. 明褐色砂 | 11. 褐灰色砂礫 | 17. 褐灰色粘質土 |
| 6. 暗灰黄色砂 | 12. 褐色粘質土 | 18. 褐色礫混じり粘質土 |
| | | 19. 橙色粘土(地山) |

図12 御所池堤防断面図

で長径約0.60mを測る。埋土はすべて茶褐色系の砂礫混じりシルト層である。このうち土坑1から図15-5 須恵器の甕が出土している。その他にも遺物が出土している土坑もあるが、いずれも土師器や瓦器などの小破片である。

溝

第1 遺構面で検出した溝は、調査区内の東側で15条を検出した。ほぼ東西方向のもの6条と、ほぼ南北方向のもの9条に別れる。すべての溝は調査区内で両端を検出している。これらの規模は、長さが約7m～約10mで、横幅は約0.20m、深さは約0.10mを測る。断面形はすべてU字型を呈している。埋土は茶褐色系の砂礫混じりシルト層で土坑のものと非常によく似ている。遺物が出土した溝もあるが土師器の細片であり、遺構の時期を決める資料とはできなかった。

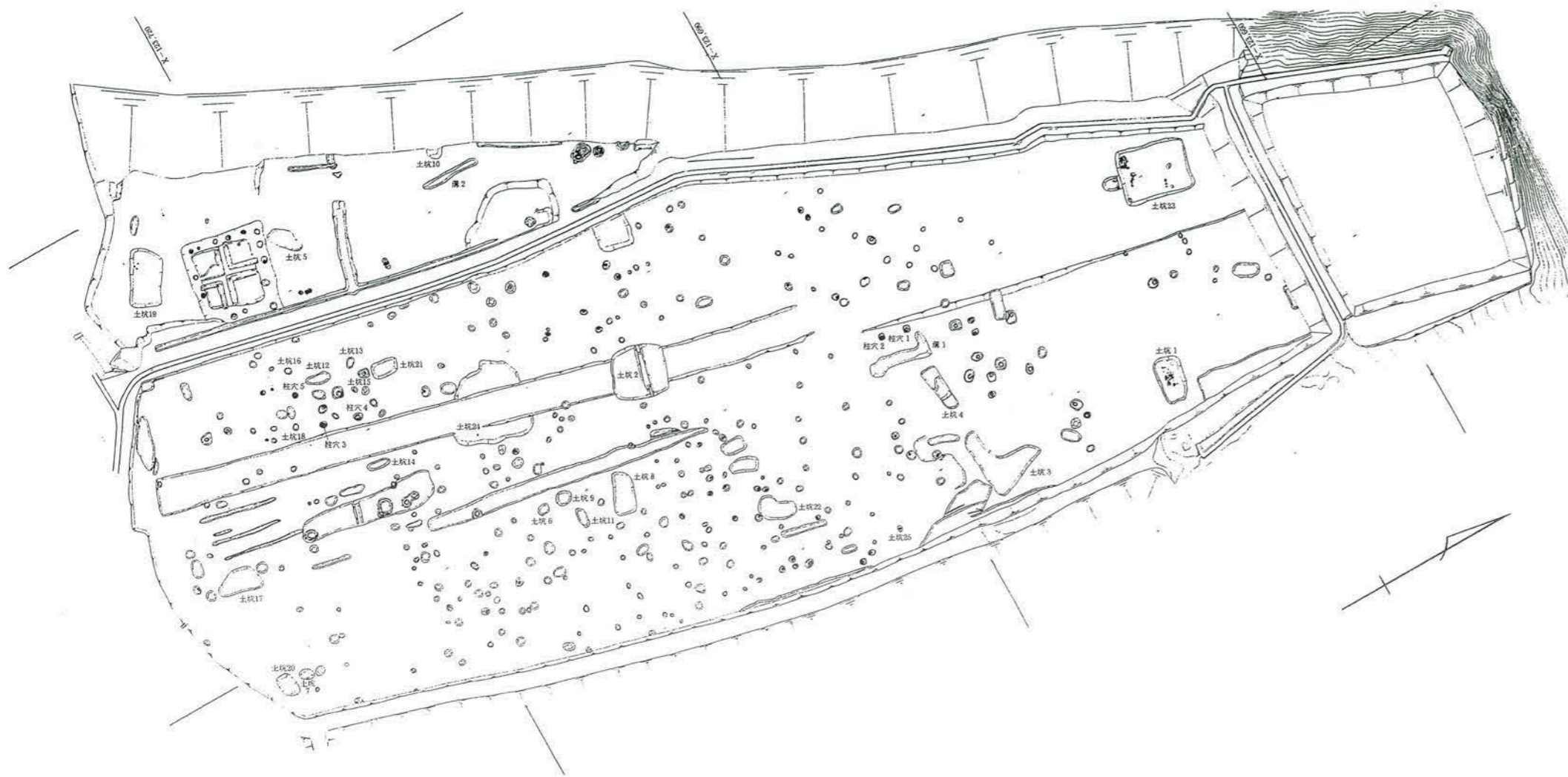
第2 遺構面 (図14)

柱穴

調査区の南西隅付近で柱穴を2基検出した。平面形は直径約0.60mの円形で、断面形はU字型の筒状を呈し深さ約0.40mを測る。埋土は褐色の砂礫混じり粘土であった。柱穴は検出できなかったが、掘り方のほぼ中央の底面には約0.30mの大きさの平らな石を敷いている。遺物は出土しなかった。

溝

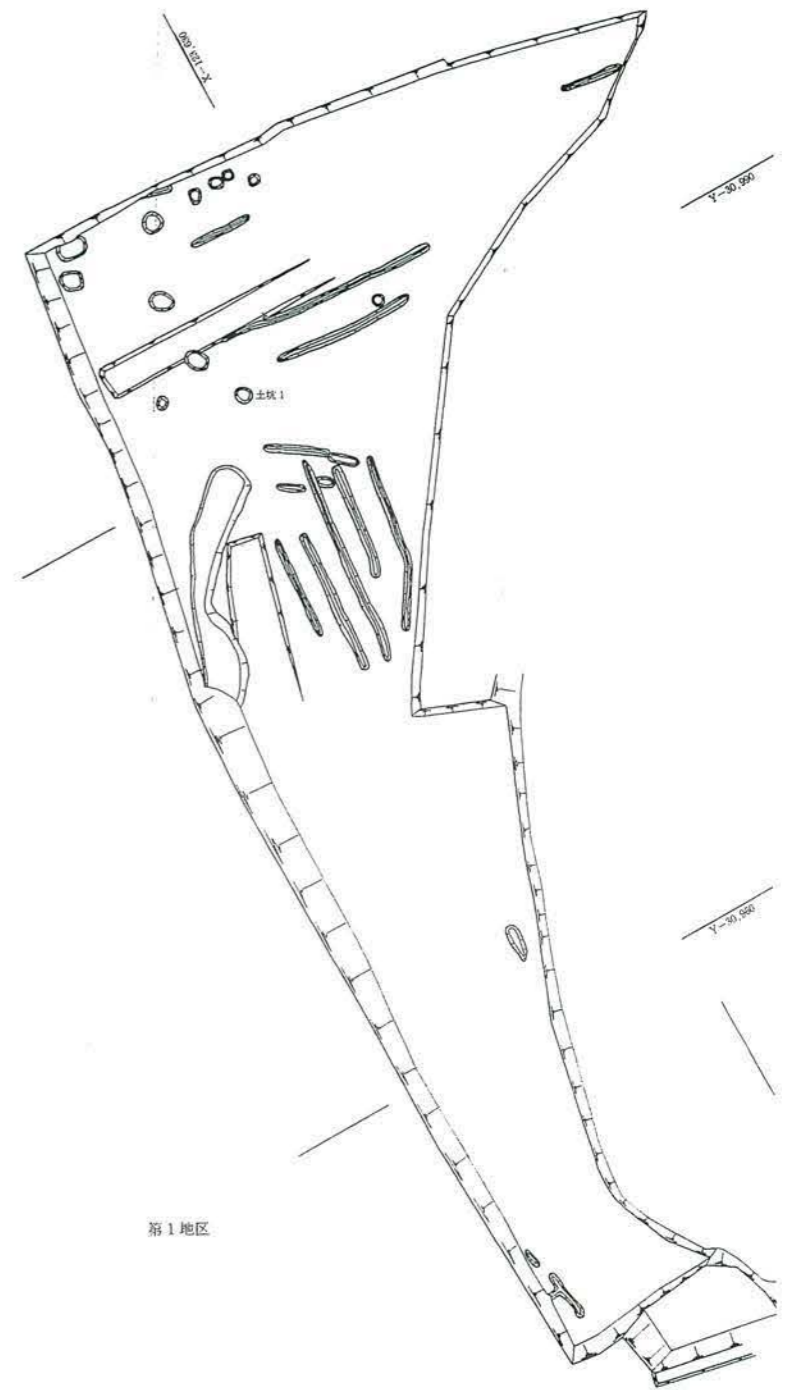
溝は、調査区の南西隅付近(溝1)と東端付近(溝2)の2か所で、それぞれ1条ずつ検出



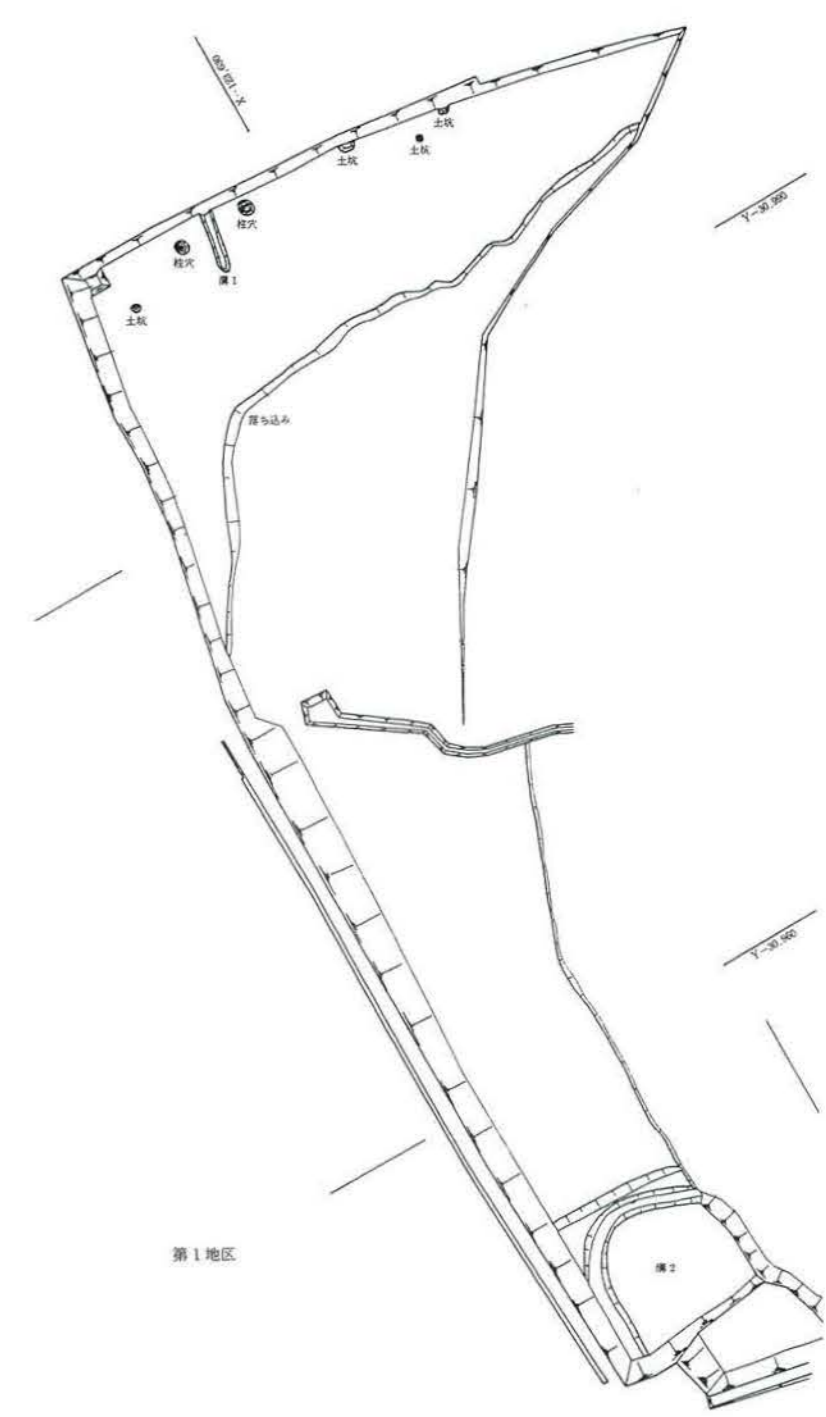
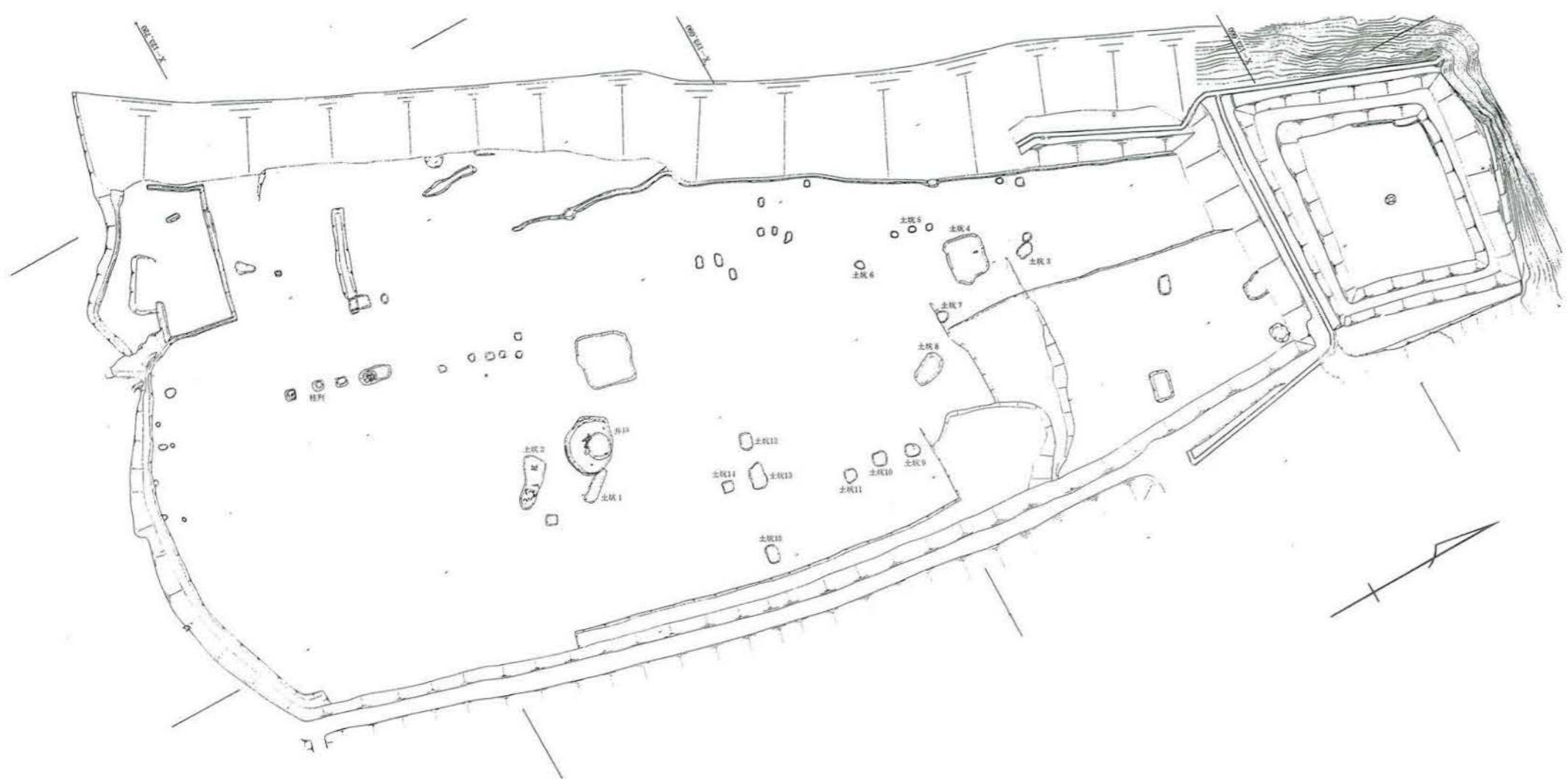
第2地区



图13 越谷遗址第1·2地区第1号结构面



第1地区



第2地区

第1地区



图14 越谷遗址第1·2地区第2道横面

した。

溝1はほぼ東西方向に走るもので、一端は調査区内で丸く納まるが、もう一端は調査区外へ続いている。検出した部分の長さは約3m、横幅は約0.50m、深さ約0.20mを測る。埋土は茶褐色系の粘質土層である。遺物は出土しなかった。

溝2の平面形は隅の丸い円弧状を呈しており、一端は調査区外へ続いている。もう一端は池の水により侵食されて消滅している。検出した部分の長さは総延長で約10m、横幅は約0.80m、深さ約0.20mを測る。埋土は褐色系の砂混じりシルトで、埋土の上部から図15-2・3・4の埴輪が出土している。

土坑

4基の土坑は調査区の西壁沿いで検出した。うち2基は調査区の壁にかかり、残りの2基は直径約0.20mの円形の平面形をもつ、深さ約0.40mの杭跡のような土坑である。調査区の壁にかかる2基は約0.60m～約0.40mの方形状の平面形をもつものと推定することができる。深さは約0.30mを測り、埋土は溝1のものと同一である。これらの土坑から遺物は出土しなかった。

落ち込み

第2遺構面は調査区の西側で一段落ち込みをもっている。御所池の汀線が造り出した落ち込みである可能性が高い。

4 出土遺物（図15）

出土遺物は図15に示した。図15-1は第18層から出土した布留式土器の小型の甕である。底部の外面が窪みをもち、体部は外上方に立ち上がった後丸味を持って張り出し、肩部は内斜め上方にのび、口縁部はゆるやかに外反して斜め上方に立ち上がりさらに内湾させて上方向に真っすぐのび、端部をつまんで仕上げている。調整は不明である。

図15-2～4は溝2から出土した埴輪で2・3は円筒埴輪のタガを含む部分で外面にかすかに斜めハケが残る、4は朝顔型円筒埴輪であろうか、調整は不明である。

図15-5は土坑1から出土した須恵器の甕で、短く屈曲して立ち上がる口縁部をもち端部に面を造り出している。口縁端部の内側に一条の沈線をめぐらせている。肩部の外面に粗い平行のタタキ目が残っている。

図15-6は第17層から出土の土師器甕で、丸味をもつ体部から肩部をもち、口縁部は斜めに外反気味に立ち上がり、端部を内湾させてから端を丸く納める。体部の外面にはやや粗いハケ目が残る。

図15-7は第16層から出土した把手付きの土師器甕で体部の把手部分より上側が内傾して真っすぐに立ち上がり、肩部を作らずに外斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部を付ける、口縁端部は面をもつ。

図15-8~10は第15層からの出土である。8・9は土師器皿で平らな底部に外斜め方向に立ち上がる口縁部を付ける。口縁端部はつまんで仕上げる。9の口縁立ち上がり部分にはやや丸味が見られる。10は瓦質土器羽釜である。水平に短い鰐を付け、口縁部は内傾させて立ち上げる。口縁端部は平らな面をもち、口縁外面に段を付ける。

図15-11は出土層位がはっきりしないが包含層から出土したものである。紡錘車であろう。図化し得なかったが、これら以外にも土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・瓦等の小片が出土している。

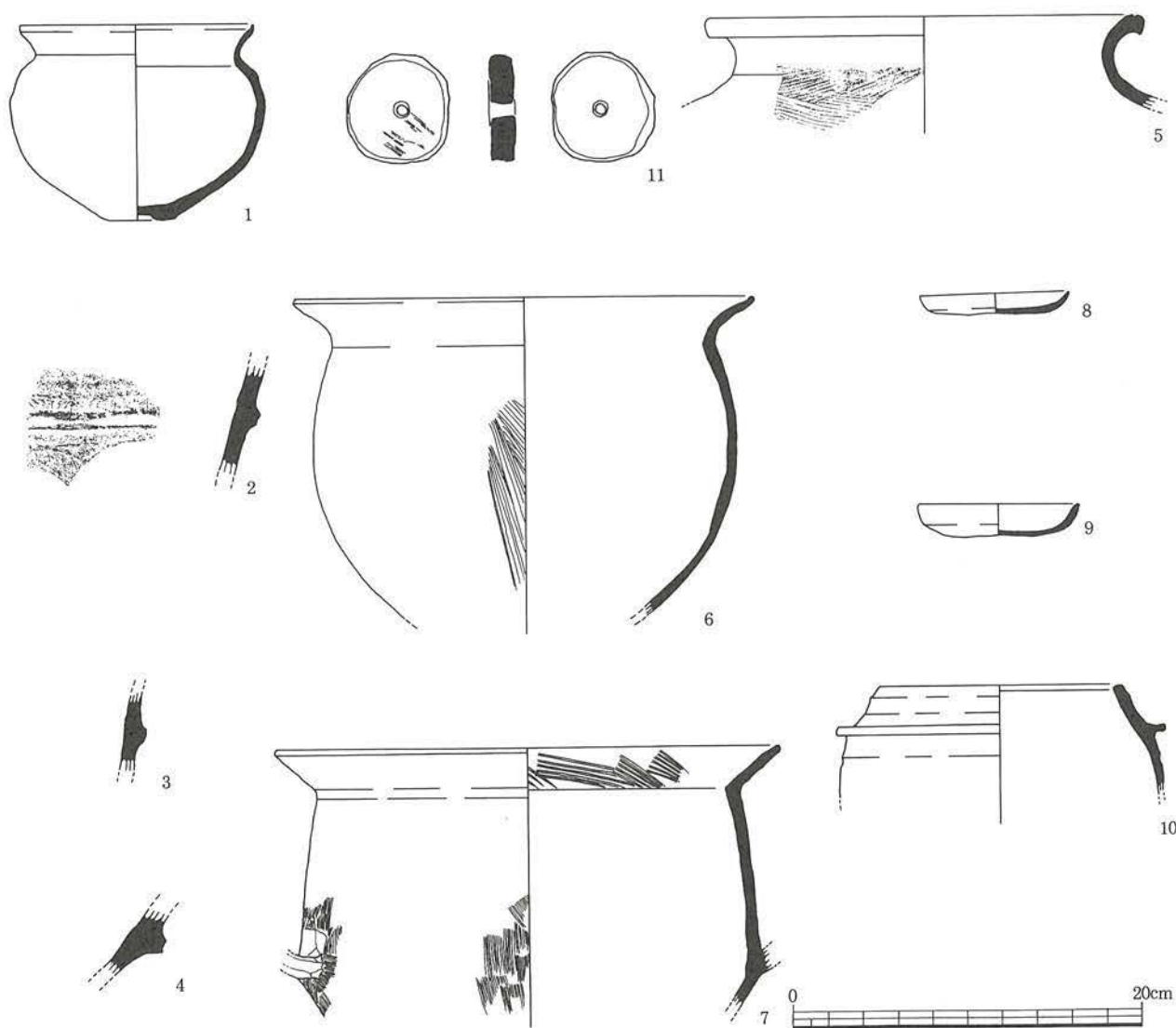


図15 越谷遺跡第1地区の出土遺物

5 小結

今回の発掘調査成果には御所池の堤防下部分の、第2遺構面の溝2の埋土から円筒埴輪の小片が3点出土したことが重要視されよう。この溝2は円弧状の平面形を呈しており、円とすれば直径は約10mと推定することが可能である。これらのことを根拠として、ただちにこれを小

円墳として復元することはできないが、消滅した古墳の周溝の一部である可能性が十分にある遺構として考えておきたい。

仮に、これが古墳の周溝の一部であるとするならば、越谷遺跡内で古墳の存在を示す唯一の遺構となるものである。

また、御所池の堤防が、中世の遺物包含層の上に築堤されていたことから考えると、この池が現在の規模となったのは中世以降のことで、それ以前には、現在のような堤防が築かれていなかったか、もしくは小規模であった可能性が高いと推定することができる。御所池は従前から桜井御所跡の園池と推定する考えもあるが、今回の調査成果からは、このことを裏付けられる資料を得ることはできなかった。

第2項 第2地区の調査

1 第2地区の位置 (図10)

第1地区とは生活道路を隔てて南側の調査区である。調査年度は平成4年度である。

2 堆積層序と包含層から出土した遺物

堆積層序 (図16・17・18)

第2地区の土層の堆積状況を図17・18に示した。調査区の南側壁が図18の断面図1で、東側の壁が断面図2～4である。これらの断面図の位置は図16に示したとおりである。

越谷遺跡の第1・2地区の層序(第I層から第VIII層まで)を越谷遺跡堆積状況図のデフォルメーション(図17)に示した。これらは図16に示したA B間が切断面となる。この図には第1・2・3遺構面をそれぞれ矢印で示した。

ここでは、層序の第I層から第VIII層に、第2地区の堆積層をあてはめることにより、調査区の堆積層序として報告したい。

第I層

図18に示した断面図1～4すべての、現代耕土(第1層)・床土層(第2層)がこれにあたる。なお、現代の水田畦畔や農業用水路その他の盛土も含む。

第II層

この層には近世以降の遺物を包含している。断面図1では第3～5層(灰色から茶色までの範囲で変色し、主に褐色系の色調を呈しているシルト層で、部分的には砂粒分が多く含まれているところも見受けられる。)が、断面図2では第3～5層の褐灰色系砂質土層(最下部層は暗い色調を呈している。)が、断面図3では第4層の褐色砂礫層と第5層の褐色粘質土層が、断面図4では第2層の灰褐色砂礫層等がそれぞれ該当する層位である。

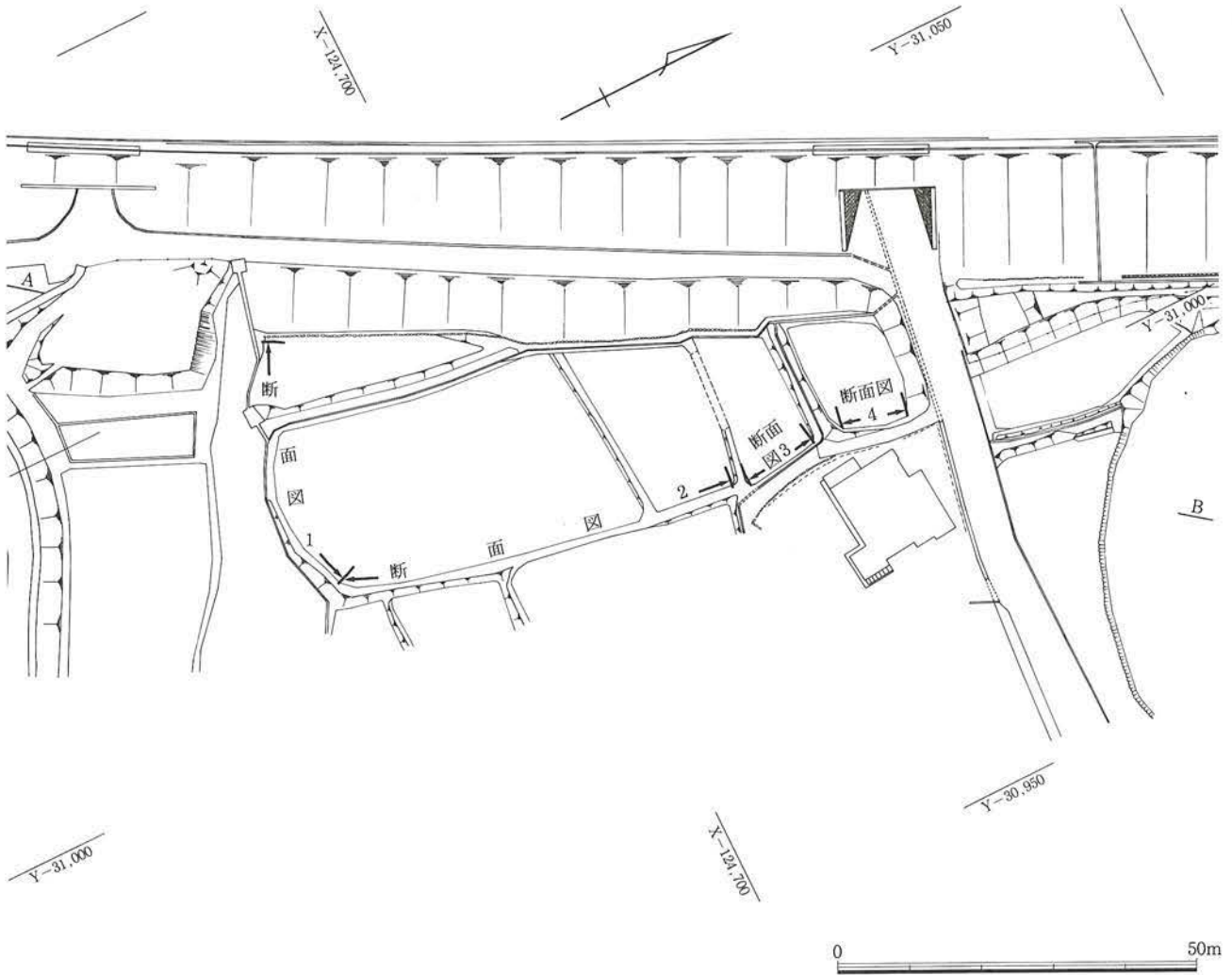


図16 越谷遺跡第2地区断面図の位置

第Ⅲ層

上面を第1遺構面としており、この遺構面には中世後半頃の年代をあてている。また、この層が包含する遺物は中世中頃の遺物である。

断面図1では第6層の暗赤褐色砂礫混じり粘土が、断面図2では第6層の暗褐色砂質土が、断面図3では第6～8層のにぶい発色を呈している黄褐色系粘質土層（北端の一部では、にぶい発色の砂礫層が上に堆積し、南側の半分では下位に位置する黄褐色粘質土になる。）が、断面図4では第3～5層（上から順に、黄褐色砂混じり粘質土層・黄灰色砂礫層・明褐色砂礫層）が相当する。

第Ⅳ層

上面の第2遺構面は、古代末頃に相当する遺構面である。この層からは土師器・須恵器が出土している。断面図1では第7～10層（上から順に明茶褐色砂混じりシルト・暗黄灰色砂礫・明褐色砂混じりシルト・黄茶褐色シルト）、断面図2の第7～11層（上から順に褐灰色礫混じり粘質土・黄灰色礫混じり粘質土・灰黄色礫混じり粘質土・にぶい褐色砂礫混じり粘質土）、

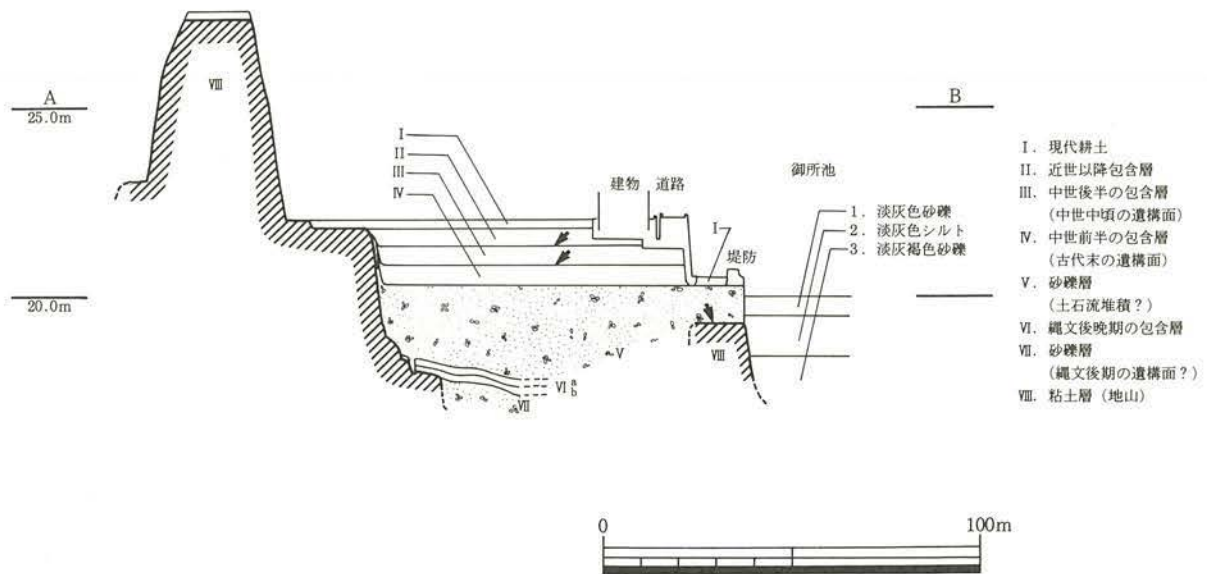


図17 越谷遺跡堆積状況図のデフォルメーション

断面図3における第9層の褐色粘質土層と、第10層の褐色砂礫層と灰色砂礫層からなるラミナ一層、断面図4の第6～10層（上から順に褐灰色砂礫・灰黄褐色砂礫・黄褐色砂質土・灰黄褐色砂礫混じり粘質土・にぶい褐色砂礫）の各層である。

第V層

この層は黄灰色から褐色系の発色を示す砂礫層である。遺物は包含していない層であり、層厚は約2mを測る。

第2地区の調査を行なうまでは、この層をもって周辺の遺跡にもよく見られる、黄褐色系の色調を呈する地山粘土層である洪積層の上面と同じ時期の堆積層（地山層の一部）であろうと判断していた。

第VI層

この層は縄文時代の後期の遺物を包含する。上下2層に分割することが可能であり、上部には暗青灰色シルト層が堆積し、下部には黒褐色粘土層が堆積している。遺物はどちらの層からも出土しているが、下部に堆積している粘土層から出土したものが圧倒的に多い。

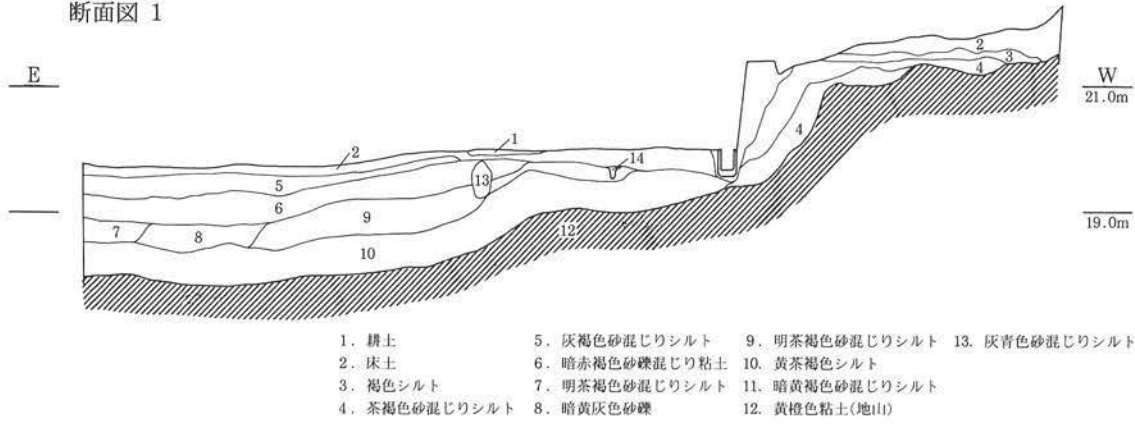
越谷遺跡ではこれまで第1地区の調査結果をもとにして、第2遺構面検出以降の第IV層除去後に現われる砂礫層を以て地山層としてとらえていた。

第2地区の調査において、第2遺構面検出の井戸を裁ち割って調査することとなり、そのために設定したトレンチの壁面に、それら上下2層の包含層が露呈した。

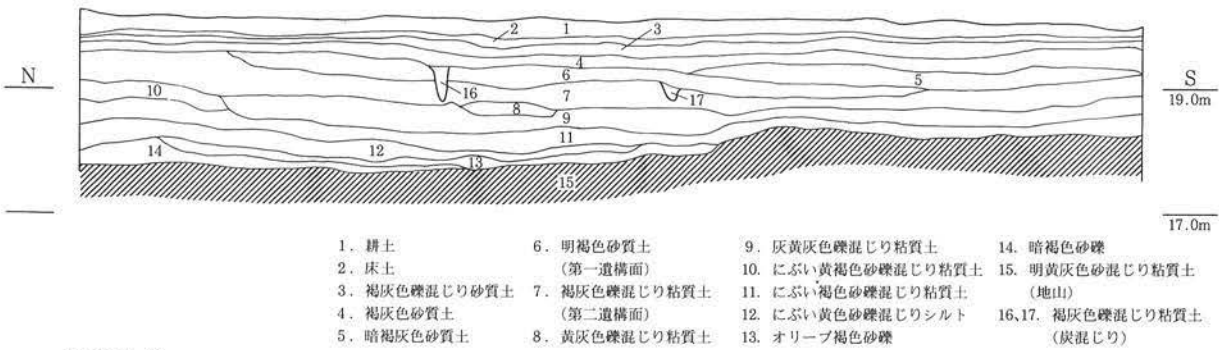
このことにより、これまで地山層として考えてきた砂礫層は、地山層までの中間層として存在する無遺物層であることが判明した。

ただし、これらの縄文時代の遺物を包含する層は、第1地区ならびに名神高速道路上り線側

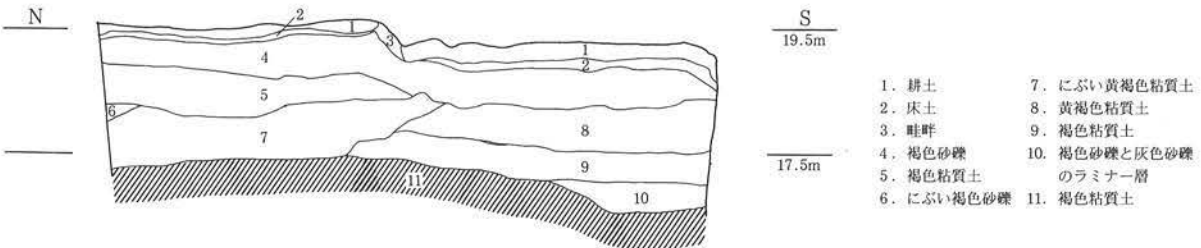
断面図 1



断面図 2



断面図 3



断面図 4

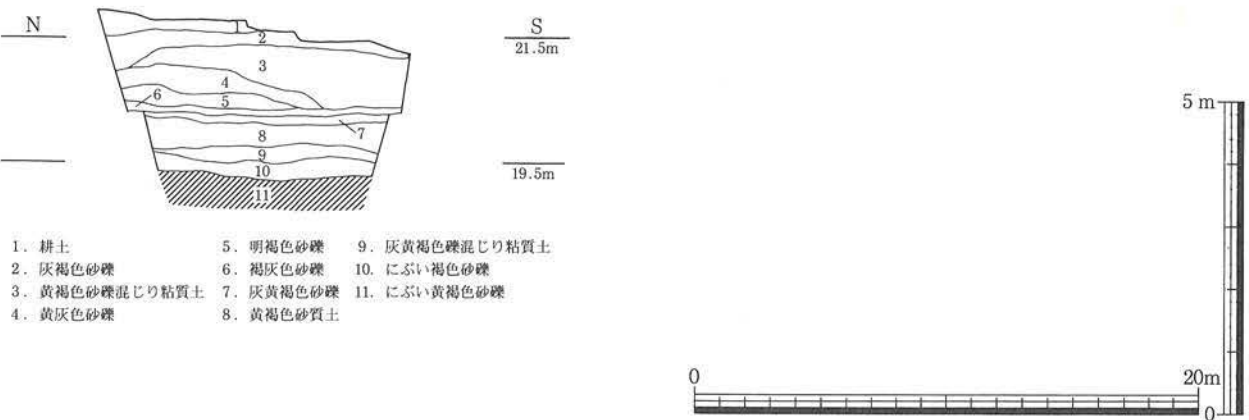


図18 越谷遺跡第2地区断面図のデフォルメーション

の試掘調査区では、黄褐色系の色調を呈する地山粘土層の堆積がそれぞれで確認されており、この第Ⅵ層にあてはまる堆積層は存在していない。

したがって、この層は主に第2地区の下部に堆積しているものと推定し、試掘トレンチによる確認調査を行なうこととした。

この確認調査時には4本のトレンチ設定による(図41)試掘調査を行っている。なお、その結果から判明していることを要約すると以下のとおりである。

1、縄文時代の遺物を包含する堆積層は調査区より外側となる東側の水田部分に拡がること等が判明した。

2、縄文時代の遺物包含層である黒褐色粘土層の下に堆積している、暗茶褐色砂礫層は鉄分等による影響を受けて錆付いたような状態に半固結化しており、この上面が遺構面であることを確認した。

3、調査区の南東部分では、黄橙色粘土層(洪積層上面の地山層)が、第Ⅵ層の下位層として堆積していた。また、この地山粘土層は、調査区の南西側にある丸岡山の南東側斜面に続くものであると考えられる。

今回の調査では、これらの試掘トレンチ調査による縄文時代の遺物包含層の分布範囲の確認を行うことを主体としているので、確認した縄文時代の遺構面については全面的な精査を行っていない。

第Ⅶ層

この層は、第2地区の南東部分を除く全域で確認された、暗青緑灰色系の発色を呈する砂礫(現段階においては無遺物)層である。

先に述べてきたような経緯を経て確認された、第Ⅵ層の拡がりを確認するために試掘トレンチを設定し、縄文時代の遺物を包含する堆積層の広がる範囲等について調査した。

この時の調査では第Ⅵ層の下位層として、遺物を包含しない砂礫層を確認した。同層は試掘トレンチの調査で確認した黄橙色粘土層(洪積層上面の地山層)よりも上位であったので、これを第Ⅶ層とし、越谷遺跡の層序に加えることとした。

第Ⅷ層

この層は、黄橙色粘土層(洪積層上面の地山層)で、無遺物層である。調査区内の南西部分にあたる高まり部分では第Ⅱ層除去後に、また、調査区の南端部分では、第Ⅳ層除去後にこの層が露呈していた。

以上が越谷遺跡の基本的な層序である。ただし、第Ⅶ層が堆積しているところでは湧水が著しく激しかったために、この第Ⅷ層の堆積を確認することはできなかった。したがって、今回の調査成果に報告する越谷遺跡の層序では、縄文時代の遺物包含層確認トレンチの調査による

成果から、第Ⅶ層以下が地山層と判断せざるを得なかった。

今後は、今回の調査区周辺地において発掘調査が行なわれることによって、この第Ⅶ層以下第Ⅷ層までの間に、さらに別の遺物包含層の堆積が確認される可能性もあるとおきたい。

3 検出した遺構と出土した遺物（図13・14・19～42）

この地区で検出した遺構には土坑、柱穴、溝（第1遺構面）、柱列、井戸（第2遺構面）等が多数あり、それぞれ第1・第2・第3の各遺構面にわかれている。以下に各遺構面ごとに検出した遺構と、その出土遺物をまとめて記述していく。なお、出土した遺物の詳細については遺物観察表に示す。

（1）第1遺構面で検出した遺構（図13・19～28）

この遺構面では地区の全面にわたり遺構を検出しているが、とりわけ調査区の南側半分において密度が高かったといえる。

また、この面には後世の耕作に伴う鋤溝と考えられる溝が、調査区の中央部分の南側にほぼ南北の方向に7条ある。これらは、横幅約0.20m前後で、長さ約5m前後のもの、横幅約1.20m前後で、長さ約8m～約18m前後のものに分かれる。幅の広いものが畑や水田の境となっていた溝であると考えられる。

これらの鋤溝から出土した遺物には、第1遺構面から混入したと見られる土師器・瓦器と陶器・磁器等があるが、ほとんどが細片であった。

第1遺構面では土坑、柱穴、溝を多数検出した。ここでは主に遺物が出土したものを中心に報告することにする。

土坑 土坑と考えられる遺構は全部で330基検出された。さまざまな形状のものがあるがこの内、土坑1・2からは多量の土器が出土している。

土坑1（図19）

土坑1は第1面の北東端付近で検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約2.80m、短軸方向約1.70m、深さは約0.50mを測る。遺構の底部は平らで、埋土は上から灰褐色礫混じり粘質土、褐色砂礫である。これら2層から遺物が出土しているが、褐色砂礫層から多くの遺物が出土している。遺物には土師器の皿が多数と瓦器、瓦質土器があるが、これらはいずれも床面から集中して出土している。

土坑2（図20）

土坑2は調査区の中央付近よりやや南東側の所で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺が約2.70m、深さは約0.30mを測る。遺構底部は平らで、埋土は上から明灰褐色砂礫混じりシルト、褐色砂礫混じり粘質土である。

これら2層からほぼ同量の遺物が集中して出土し、そのほとんどが土師器の皿であった。そ

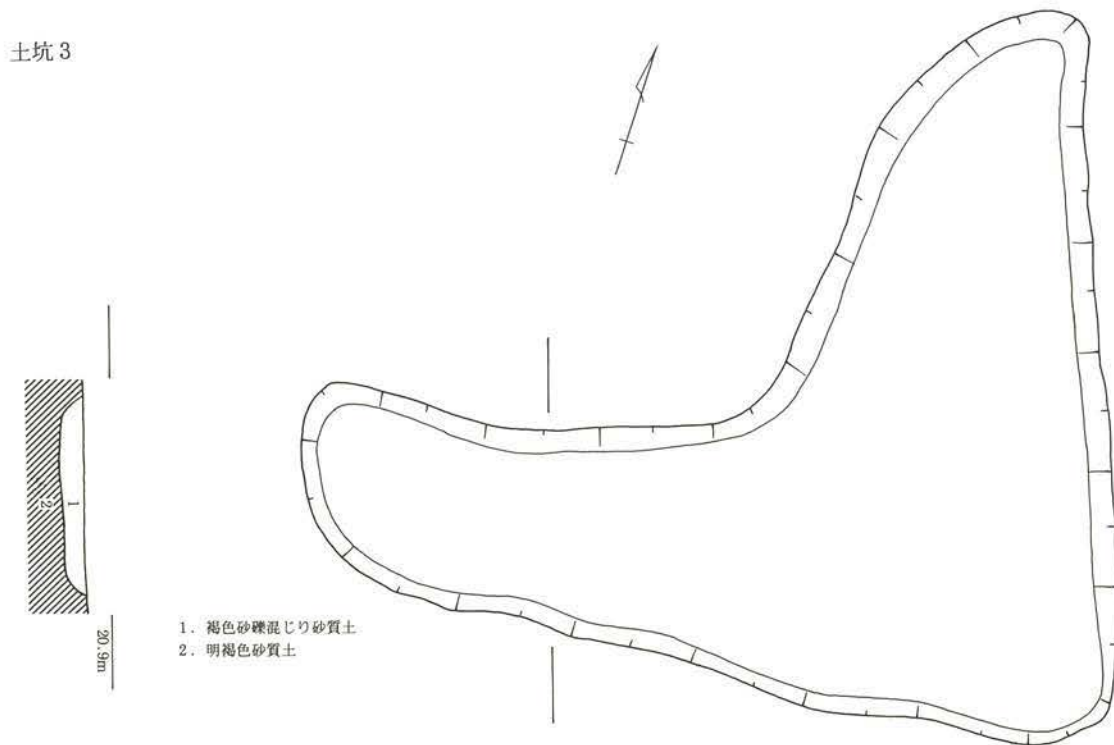
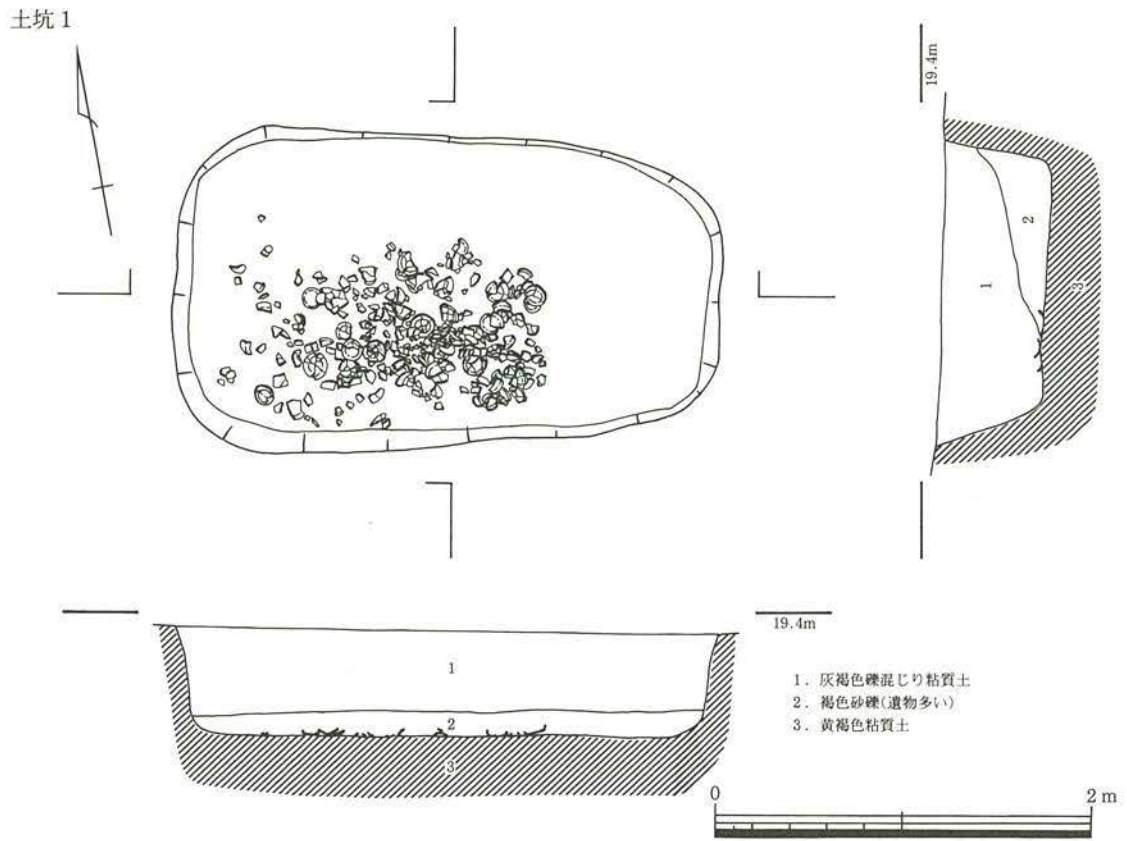


図19 第1遺構面の土坑1・3の平面図・断面図



図20 第1遺構面の土坑2の平面図

これらの出土状態は、遺構の側壁から約0.40m程度の部分を環状に残すようにして、ほとんどの皿が上向きにされて幾重にも重ねられ、整然と並べたような状況であった。土坑2の出土遺物には、土師器皿、瓦器、瓦質土器、瓦等がある。

土坑3 (図19)

土坑3は中央より北東側の調査区端付近で検出した。平面形は隅丸のL字型を呈しており、規模は全体にわたって横幅約1.20mを保ち長軸方向に約4.40m、短軸方向に約3.80mを測る。深さは約0.15mを測る。底部は平坦であり、埋土は褐色砂礫混じり砂質土で、土師器細片が出土した。

土坑4 (図21)

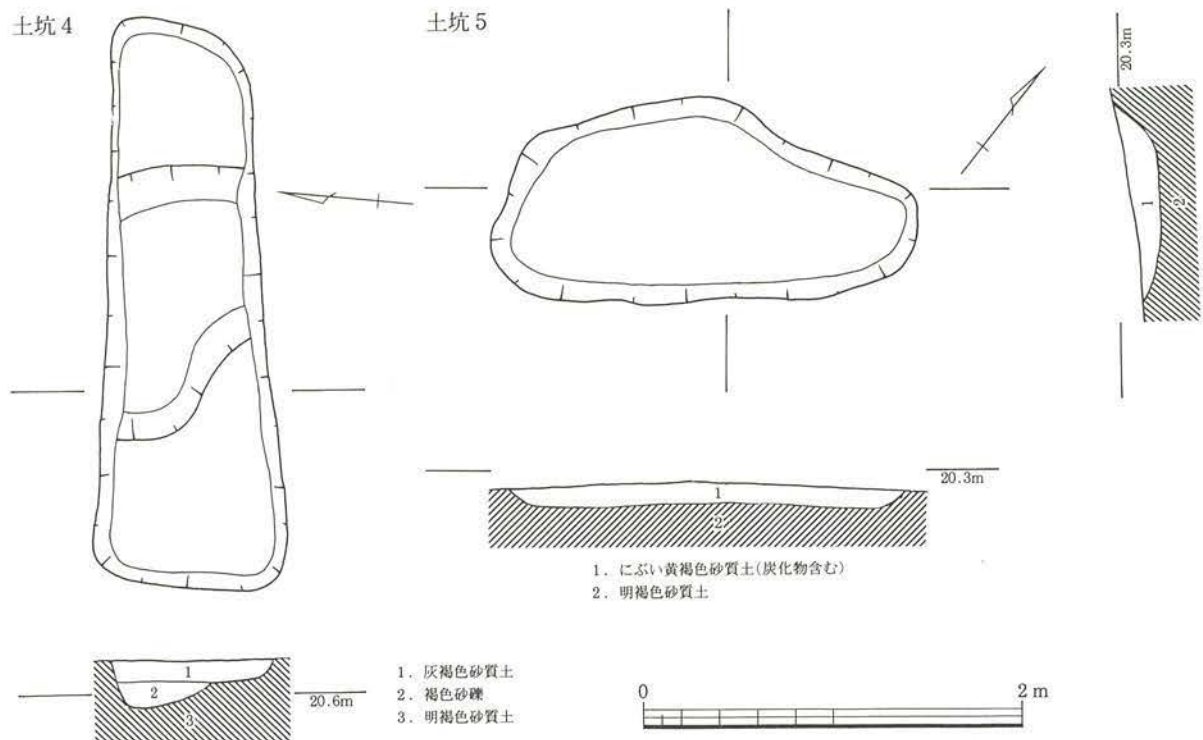


図21 第1遺構面の土坑4・5の平面図・断面図

土坑4は土坑3の東側で約3m離れて検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約1.50m、短軸方向が約1mを測る。底面は一段窪みをもち、このため断面形も底部が一段突出した形状となる。深さは突出した部分を含めて約0.25mを測る。埋土は上に灰褐色砂質土層、底部が一段突出した部分に褐色砂礫層が堆積している。遺物は出土していない。

土坑5 (図21)

土坑5は調査区の南西の隅付近で検出した。平面形はややいびつな楕円形を呈し、規模は長軸方向約2.30m、短軸方向約1.10m、深さ約0.10mを測る。底部は平坦で、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。土師器細片が出土した。

土坑6 (図22)

土坑6は調査区の中央やや南側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸方向が約0.80m、短軸方向約0.60m、深さ約0.10mを測る。底部は平らで、埋土は灰色砂質土である。

土坑7 (図22)

土坑7は調査区南東の隅付近で検出した。平面形は長楕円形である。規模は長軸方向が約0.90m、短軸方向が約0.60m、深さ約0.20mを測る。遺構の底部は平らで、埋土は褐灰色砂質土である。

土坑8 (図22)

土坑8は調査区の中央部分で検出した。平面形は不規則な円形で、規模は一辺約1m、深さ

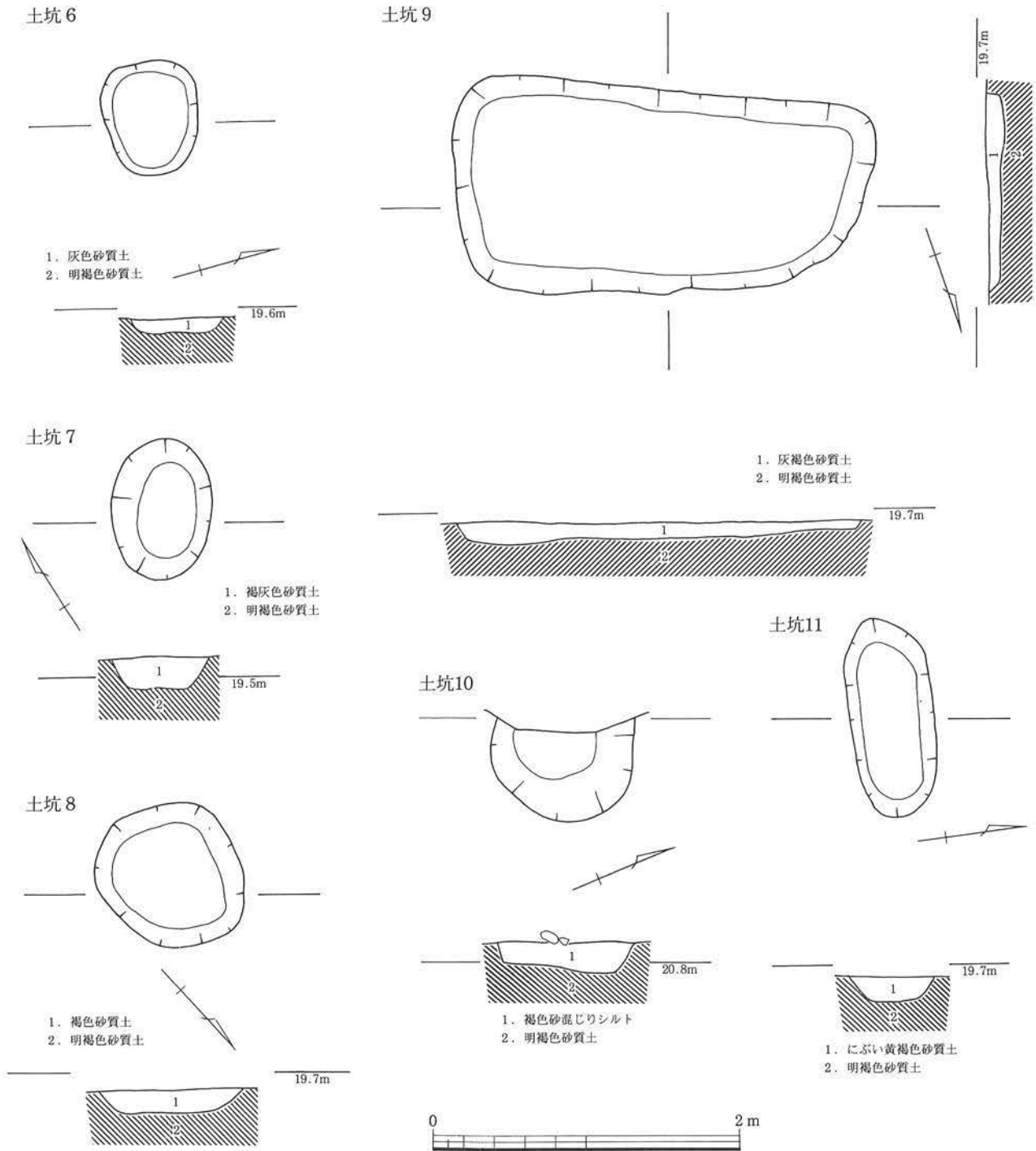


図22 第1遺構面の土坑6・7・8・9・10・11の平面図・断面図

約0.20mを測る。底部は平らで、埋土は灰褐色砂質土である。土師器細片が出土した。

土坑9 (図22)

土坑9は土坑6の北側にあり、調査区の中央やや南側で検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約2.80m、短軸方向が約1.40m、深さ約0.10mを測る。底部は平らで東に向かって緩やかな傾斜をもつ。埋土は褐色砂質土である。

土坑10 (図22)

土坑10は調査区外へ続く遺構である。東壁の中央よりやや南側付近で検出した。平面形は検出した部分から推定すれば、長楕円形である。検出した部分の規模は東西方向に約0.60m、南北方向に約0.90m、深さ約0.20mを測る。底部が平らで北向きにやや傾斜をもつ、埋土は褐灰色砂混じりシルトである。

土坑11 (図22)

土坑11は土坑9の西側にあり、調査区の中央やや南側で検出した。平面形は長楕円形で、規模は長軸方向が約1.40m、短軸方向が約0.60m、深さ約0.20mを測る。平らな底部で東に向かって緩く傾斜しており、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。土師器細片が出土した。

土坑12 (図23)

土坑12は調査区の南西隅付近で検出した。平面形はいびつな楕円形を呈し、規模は長軸方向が約1.60m、短軸方向が約0.70m、深さ約0.20mを測る。平らな底部は北向きにやや傾斜し、埋土は灰褐色粘質土である。

土坑13 (図23)

土坑13は調査区の南西隅付近の土坑12の北側で検出した。平面形は長楕円形で、規模は長軸方向が約0.70m、短軸方向が約0.50m、深さ約0.20mを測る。底部が平らで、埋土は極暗赤褐色砂質土である。

土坑14 (図23)

土坑14は調査区の中央部より約30m南側で検出した。平面形は長楕円形で、規模は長軸方向が約1.30m、短軸方向が約0.50m、深さ約0.15mを測る。平らな底部が南向きに下がる。埋土は黄褐色粘質土である。

土坑15 (図23)

土坑15は調査区南側の西隅付近で検出した。平面形は楕円形で、規模は一辺約0.40m、深さ約0.10mを測る。底部は平坦で、約0.15m大の礫が入っていた。埋土は灰色砂礫である。

土坑16 (図23)

土坑16は土坑12の南側で、調査区の南東隅付近で検出した。平面形はいびつな円形で、規模は直径約0.40m、深さ約0.10mを測る。遺構の底部は南に傾く、埋土は灰色砂礫である。須恵器小片が出土した。

土坑17 (図23)

土坑17は調査区の南端付近で検出した。平面形は隅丸の台形状であり、遺構の規模は長辺部分が約2.80m、短辺部分が約1m、両辺の幅が約1.45m、深さは約0.10mを測る。平らな底部で、埋土は灰色砂質土である。

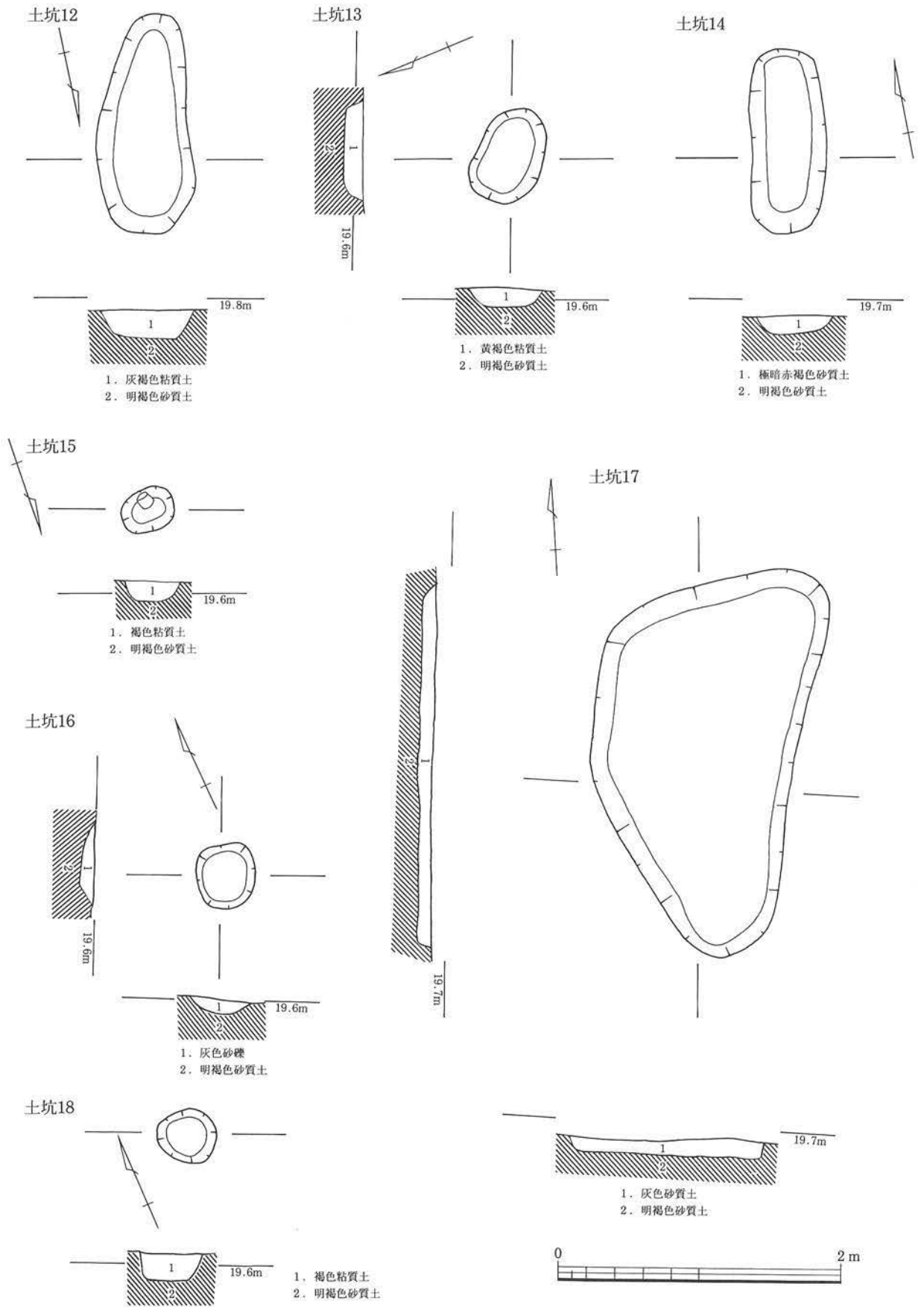
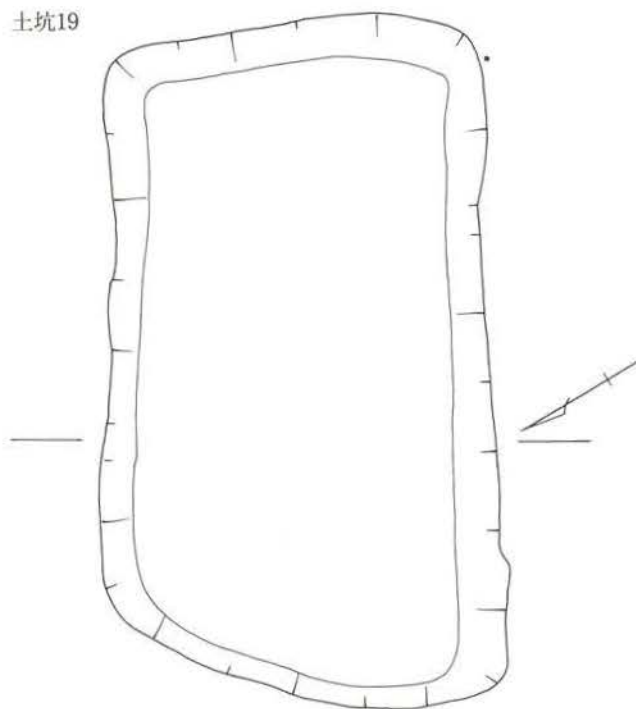
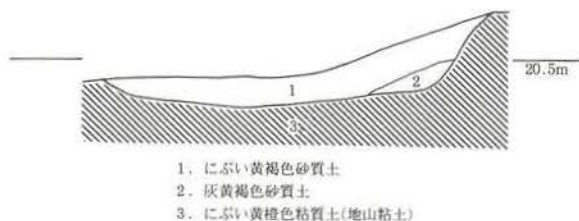
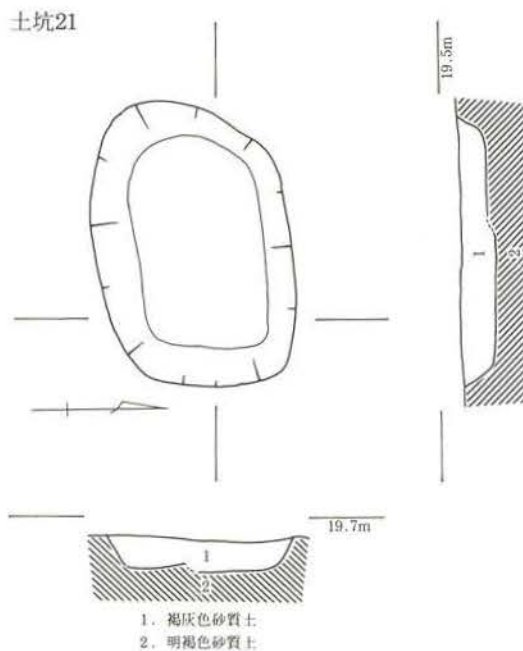


図23 第1遺構面の土坑12・13・14・15・16・17・18の平面図・断面図

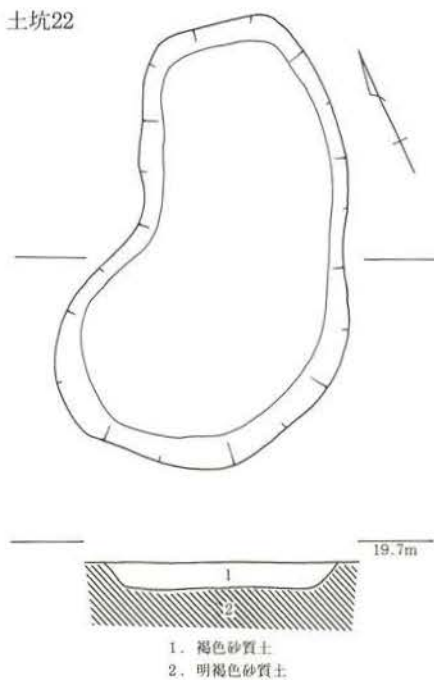
土坑19



土坑21



土坑22



土坑20

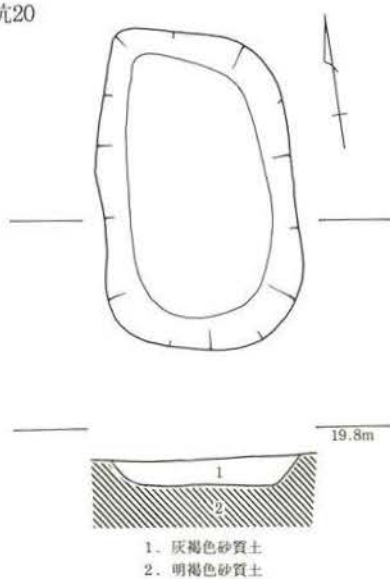


図24 第1遺構面の土坑19・20・21・22の平面図・断面図

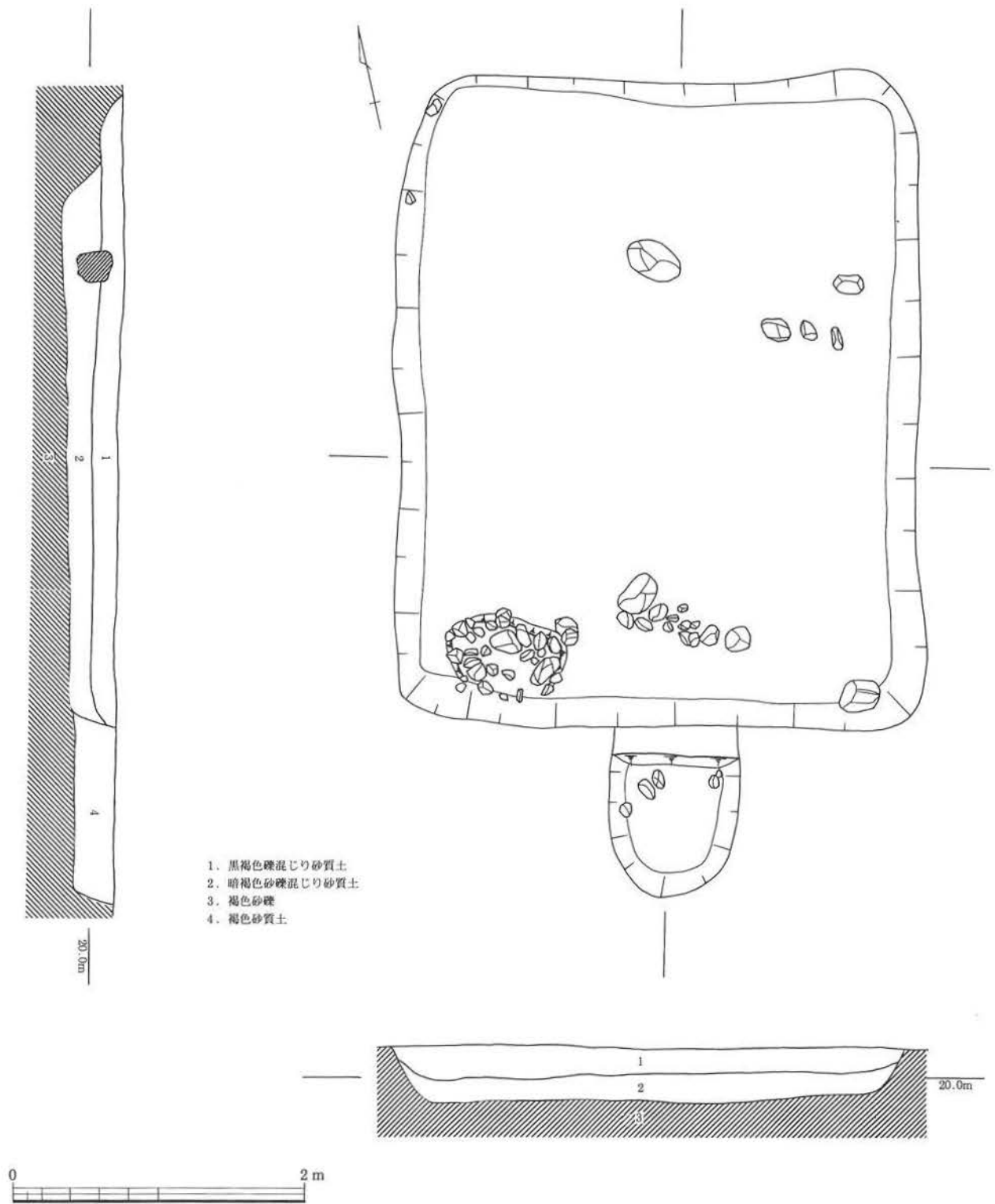


図25 第1遺構面の土坑23の平面図・断面図

土坑18 (図23)

土坑18は調査区の南東隅付近で検出した。平面形はやや楕円形に近い円形を呈している。規模は直径約0.40m、深さは約0.20mを測る。埋土は褐色粘質土である。

土坑19 (図24)

土坑19は調査区の南西隅付近で検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約3.70m、短軸方向が約2.10m、深さ約0.30mを測る。埋土は上からにぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土である。遺物は灰黄褐色砂質土層から出土した。

土坑20 (図24)

土坑20は調査区の南東隅付近で検出した。これは土坑7のすぐ南側である。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約1.70m、短軸方向が約1m、深さ約0.20mを測る。埋土は褐色灰色砂質土である。遺物は須恵器、瓦器の小片が出土した。

土坑21 (図24)

土坑21は調査区の南西付近で検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約1.50m、短軸方向が約1m、深さ約0.20mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

土坑22 (図24)

土坑22は調査区の西側中央付近で検出した。平面形は不定型であり、くの字型に曲がるいびつな形で、規模は長軸方向が約2.40m、短軸方向が約1.40m、深さ約0.15mを測る。埋土は褐色砂質土である。

土坑23 (図25)

土坑23は北西隅付近で検出した。平面形は隅の丸い長方形で、規模は長軸方向が約4.40m、短軸方向が約3.50m、深さ約0.40mを測る。埋土は上から黒褐色砂礫混じり砂質土、暗褐色砂礫混じり砂質土である。なお、ほとんどの遺物が、下層から出土した。

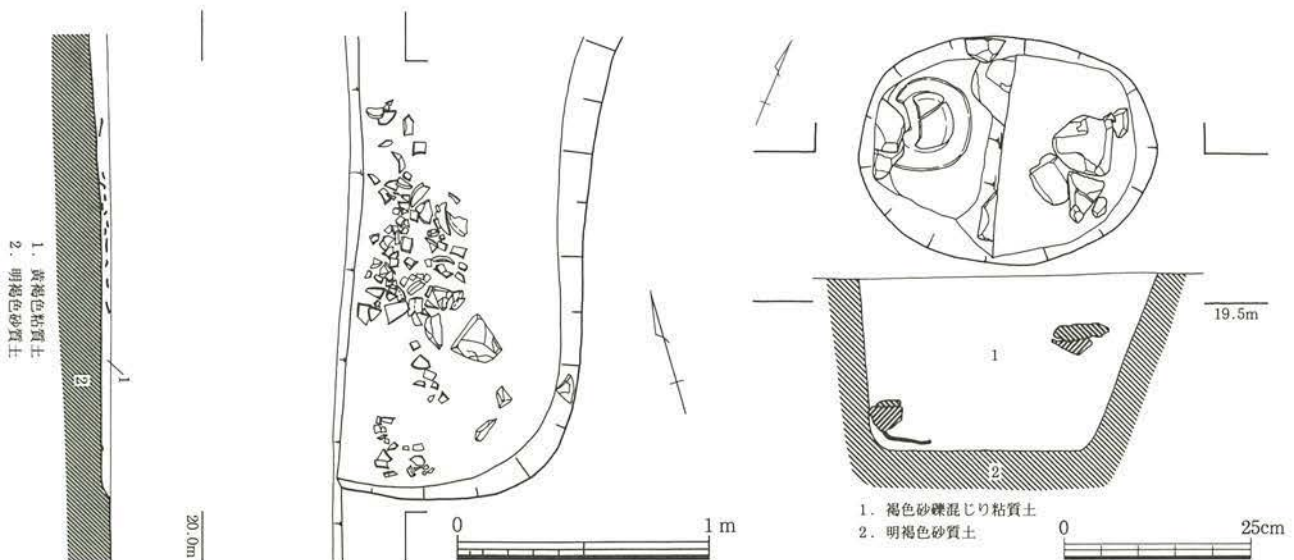


図26 第1遺構面の土坑24の平面図・断面図(南東部分) 図27 第1遺構面の土坑25の平面図・断面図
土坑24 (図26)

土坑24は調査区の中央付近のやや南側部分で検出した。土坑2と同様の遺構であったと推定でき、復元され得る規模は一辺約5mを測る。やや崩れた形ではあるが本来の掘方は方形を呈

しているものであろう。土坑1・2に比較して見れば遺物の出土量は少ないといえるが、第1遺構面のその他の遺構よりは数倍多いといえる。遺構底部は平坦で、埋土は上層が明灰褐色砂礫混じりシルト、下層が褐色砂礫混じり粘質土である。遺物は主に下層からの出土である。

土坑25 (図27)

土坑25は調査区の東壁沿いの中央付近よりやや北側部分で検出した。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸方向が約0.40m、短軸方向が約0.30m、深さ約0.25mを測る。埋土は褐色砂礫混じり粘質土である。底部の西端の隅で土師器の皿2枚(大・小)が、上向きに重ねられたままの状態出土した。また、埋土中には握り拳大以上の大きさの礫が多く含まれていた。これらの礫は埋土や周辺の土に含まれるものとは大きさが異なっていて、比較的大きなものばかりが選ばれていたようであり、遺物と一緒に遺構内へ埋めたものと考えられる。

柱穴 柱痕を検出されたものを柱穴として報告する。まとまりをもつものはなく、いずれの柱穴も抜き取り等の痕跡はみられない。

柱穴1 (図28)

柱穴1を検出した場所は、調査区北東の隅部分である。平面形は隅の丸い方形である。規模は掘方の直径約0.45m、深さは約0.45m、柱痕部分は掘方のほぼ中央に位置し、円形で直径約0.20m、深さは約0.45mである。掘方の底部は平らであり、埋土は掘方部分に褐色砂質土、柱痕部分に黄褐色砂礫が堆積する。遺物は出土しなかった。

柱穴2 (図28)

調査区北東の隅部分で検出された。柱穴1との距離は柱痕跡の中心間で約1.60mを測る。平面形は隅の丸い方形で、規模は掘方の一辺約0.45m、深さは約0.25m、底は平坦である。柱痕部分は掘方のほぼ中央に位置し、円形で直径約0.20m、深さは約0.25mである。埋土は掘方部分に褐色砂質土、柱痕部分に暗黄褐色砂礫が堆積する。遺物は出土しなかった。

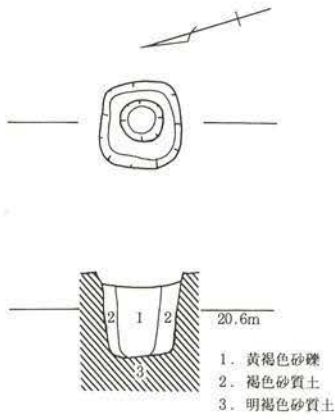
柱穴3 (図28)

調査区の東側中央付近で検出した。平面形は楕円形である。規模は掘方の長径約0.50m、短径約0.40m、深さは約0.30m、柱痕部分は掘方のほぼ中央に位置し、円形で直径約0.20m、深さは約0.30mである。埋土は掘方部分に灰褐色粘質土、柱痕部分に褐灰色砂混じりシルトが堆積する。

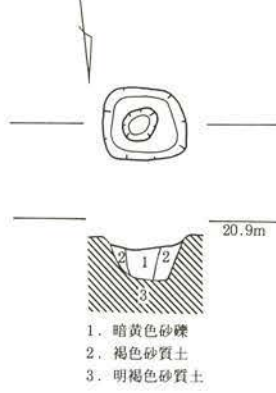
柱穴4 (図28)

柱穴4は、調査区の中央よりやや南西に寄った付近にある。平面形は楕円形である。規模は掘方の長径約0.60m、短径約0.50m、深さ約0.20m、柱痕部分は掘方のほぼ中央に位置し、円形で直径約0.30m、深さは約0.20mである。埋土は掘方部分に灰褐色砂礫、柱痕部分に褐灰色砂混じりシルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

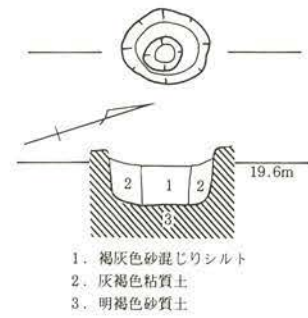
柱穴 1



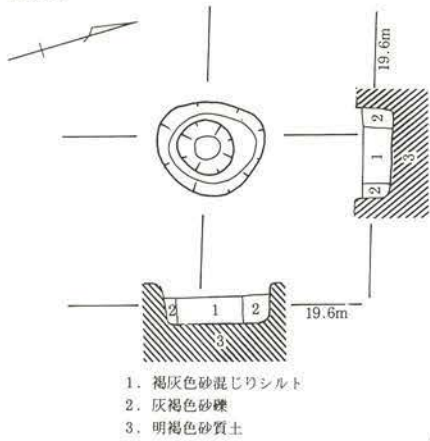
柱穴 2



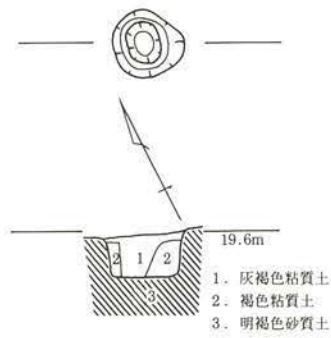
柱穴 3



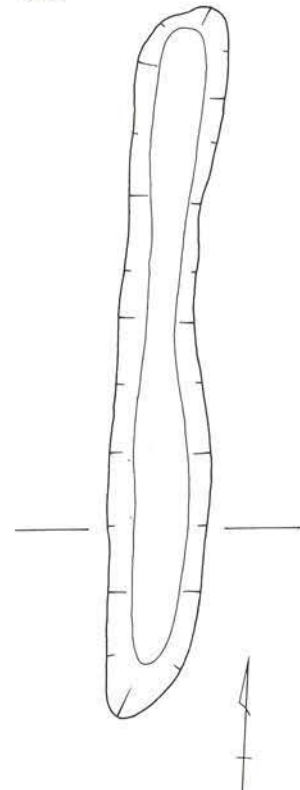
柱穴 4



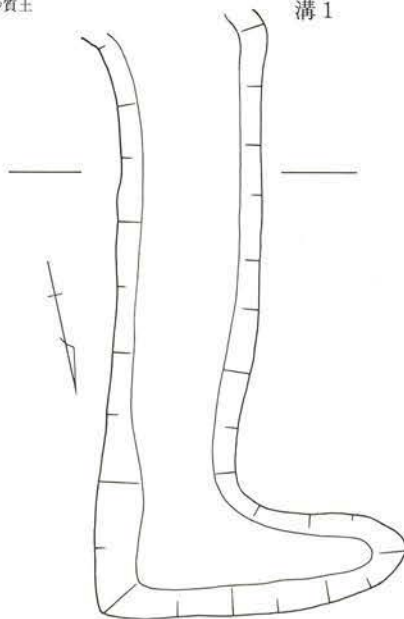
柱穴 5



溝 2



溝 1



1. 褐色砂質土
2. 黄褐色砂礫混じり砂質土
3. 明褐色砂質土

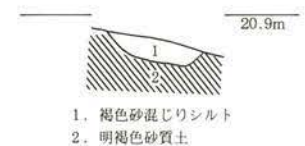
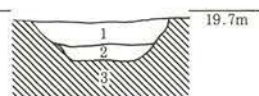


図28 第1遺構面の柱穴1・2・3・4・5と溝1・2の平面図・断面図

柱穴 5 (図28)

検出場所は、調査区の中央よりやや南西に寄った付近である。平面形は楕円形である。規模は掘方の長径約0.40m、短径約0.35m、深さは約0.25m、柱痕部分は掘方の中央に位置し、円形に近い楕円形で長径約0.25m、短径約0.20m、深さは約0.25mである。埋土は掘方部分に褐色粘質土、柱痕部分に灰褐色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

溝 溝は上面からの掘込みと考えられる近世の鋤溝以外のものについて報告する。

溝 1 (図28)

溝 1 を検出した場所は、調査区の北東部分である。平面形は鉤型を呈している。規模は検出部分の全長約6.50mで、北側の一端は直角に西の方向へ曲がっている。全体を通して横幅は均一であり、約0.80mを測る。断面形はU字状を呈しており、深さは約0.20mを測る。底部は緩やかに北向きに傾斜していた。埋土は上から褐色砂質土、黄褐色砂混じり砂質土である。遺物は出土していない。

溝 2 (図28)

溝 2 を検出した場所は、調査区の西壁沿い中央よりやや南側である。平面形は細身の長楕円形である。規模は全長約3.80mを測り、両端部は調査区内で丸く納まる。横幅は均一であり、約0.50mを測る。断面形はU字状を呈しており、埋土は褐色砂混じりシルトである。平均的な深さは約0.10mを測る。底部は南に向かって傾斜している。遺物は出土していない。

遺物包含層ならびに第 1 遺構面検出の遺構から出土した遺物 (図29～34)

(2) 包含層から出土した遺物 (図29)

図29-1・2は第II層から、図29-3以下は第III層からの出土である。このうち1～16と19～50は土師器の皿である。

図29-17は吉備系土師器の碗であり、平坦な底部から内湾して立ち上がる体部に外反させた口縁部を付け、端部はつまんで丸く納める。やや低い高台部分は、底部の中央付近に貼り付けられている。調整は口縁部分を強くヨコナデして仕上げている。なお、焼成不良のため全体的に灰白色を呈し、口縁部を上にして重ね焼きした為にできたと考えられる黒斑が、見込みの中央部分にある。図29-18は庄内式土器の小型の壺である。

図29-51は中国製の施釉陶器で、いわゆる袋物として分類される四耳壺の口縁部分である。11世紀後半頃から、12世紀の前半頃にかけてのものである。

包含層出土の土師器の皿は、大まかに分けると、白色土器が大皿 (口径約12.0cm前後)・小皿 (口径約8.0cm前後)・極小皿 (口径約5.0cm前後) の3種類、それ以外の皿は大皿 (口径約12.0cm前後)・小皿 (口径約8.0cm前後) の2種類に分類できる。

白色土器を含めた土師器の皿 (大皿・小皿) には、平らな底部に、短く斜め外方向に直線的



図29 越谷遺跡第2地区の包含層出土遺物

に立ち上がる口縁部を付け、端部を丸く納めているもの（図29-1～10・16・19～29・41～44）と、緩やかに外反させるように立ち上げさせた口縁部を付け、端部を丸く納めているもの（図29-30～41・45～50）がある。これらの土師器の皿の調整手法は底部が未調整のまま、口縁部を強くヨコナデしているだけの、調整方法により仕上げられている。

極小皿（図29-11～15）は、平らな底部の端の一部分を全周にわたり、直角に上へ折り返して、端を丸く納めて口縁部分を造り出す。調整は口縁部のみヨコナデしているだけである。

（3）第1遺構面から出土した遺物

土坑1から出土した遺物（図30）

土坑1からは土師器皿・瓦器・瓦質土器等が出土している。ここでは完形に近いものを主として取り上げている。

図30-1～59はすべて土師器の皿であり、なかでも1～3、22～25が白色土器である。これらすべての調整方法は、口縁部分のみヨコナデ、底部は未調整のまま仕上げられている。

土坑2から出土した遺物（図31・32・33）

出土した遺物のほとんどが土師器の皿であり、その他には瓦器、瓦質土器、瓦等がある。ここでは、完形に近いものや時期が比定しやすいもの等を主に取り上げ、それらを白色土器を図31に、土師器皿（大皿）を図32に、土師器皿（中皿・小皿）とその他の土器類を図33に分けて報告する。

図31-1～63・図32-65～図33-191は、すべて土師器の皿である。口縁部ヨコナデ、底部未調整の仕上げを施している。なかでも図31-1～63は白色土器である。図31-64は吉備系土師器の椀であり、口縁部分のみヨコナデを施し底部は未調整で、高台を貼り付けている。包含層から出土した椀（図29-17）と非常によく似ており、同一の規格で製作されたものと考えられる。

図33-192～194は楠葉型の瓦器椀で、192・193は底部の中央付近に粘土紐を貼り付けて逆三角形状の高台を造り出す。

図33-193は見込みの部分に同心円状にヘラミガキがみられる。194は外面に5か所のタテベラをもつ輪花椀で、内面には横方向のヘラミガキが施されている。図33-192は12世紀後半頃に、同193は13世紀初頭頃に、同194は13世紀中頃にそれぞれあてはめることができる。

図33-195は東播磨産の須恵器の鉢である。口縁部分には片口を付けている。底部は平らで、外上方に直線的に立ち上がる体部をもち口縁部は外側に肥厚させ平坦な面を付けている。軟焼成で、にぶい黄橙色を呈しており、表面の磨耗が著しいために調整は不明である。13世紀頃のものである。

図33-196は丸瓦で、凸面には長軸方向にナデ調整で仕上げているが、縄叩き痕がかすかに

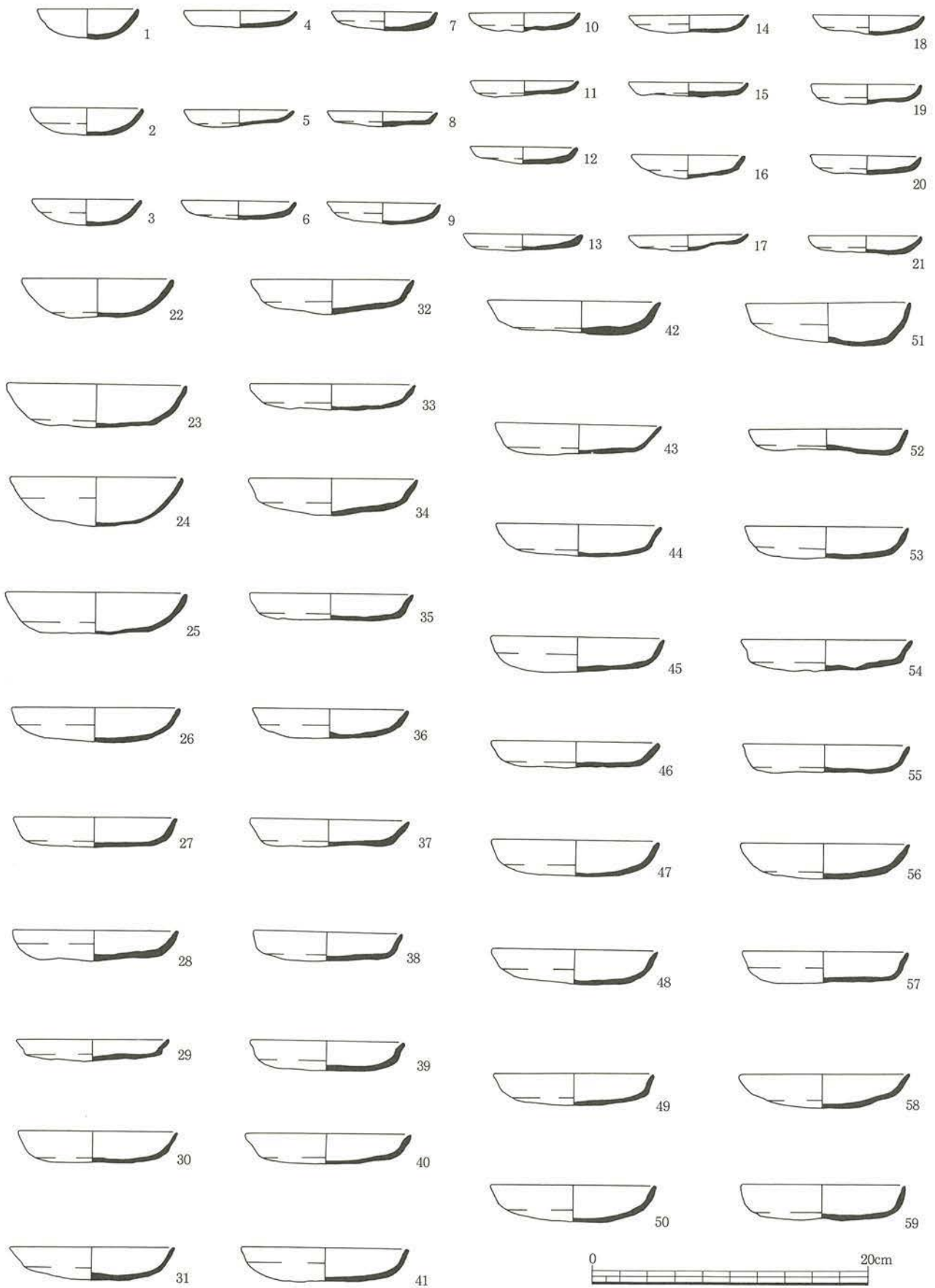


図30 越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物



図31 越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(1)



図32 越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(2)

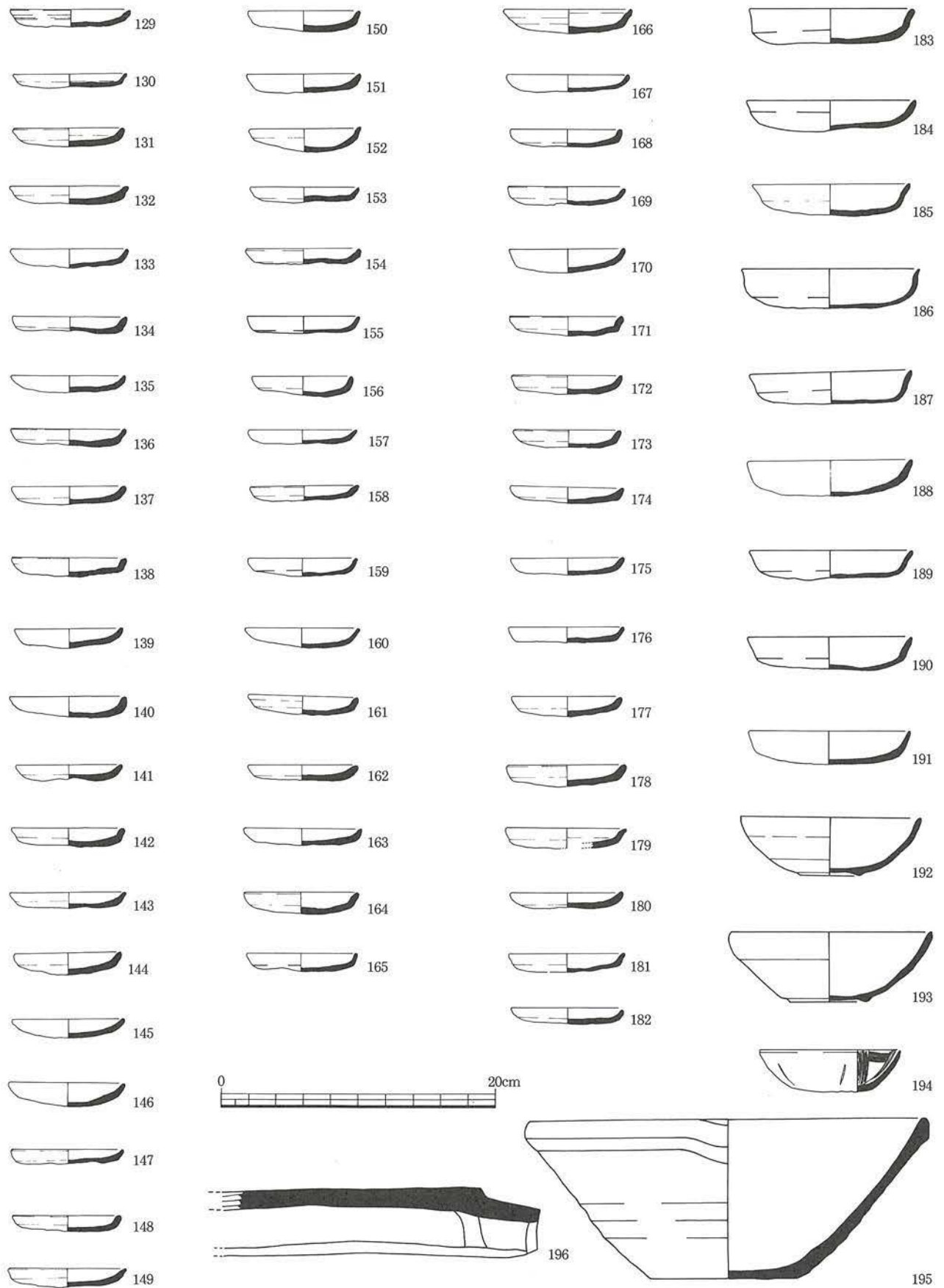


図33 越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物(3)

残っている。内面には細かい布目が残っている。

以上のように土坑2からの出土遺物は、13世紀後半頃の時期にあてはまる遺物を主としたものであり、土師器の皿が主体のほとんどであり、その他は極めて少量しか出土していない。

土坑19から出土した遺物（図34-1・2）

土坑19から出土した遺物は土師器・瓦である。図34-1・2は土師器の皿である。平らな底部に外上方に直線的に立ち上がる口縁部を付け、端部を丸く納めるものである。調整は口縁部のみヨコナデを施しており、底部は未調整である。なお、共に出土した瓦は丸瓦の小片であるが、表面は磨耗しており調整等については不明である。

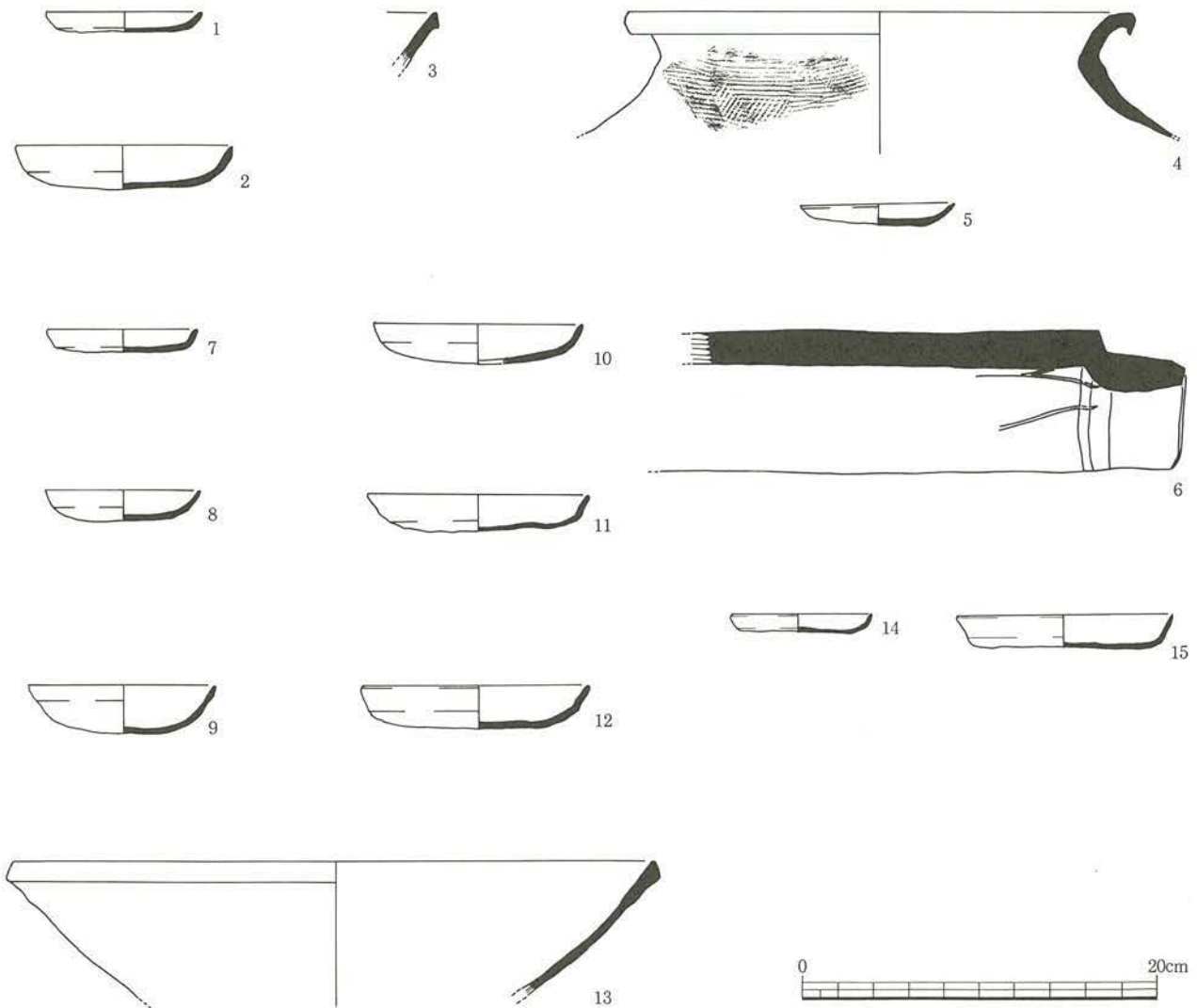


図34 越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑19・20・23・24・25の出土遺物

土坑20から出土した遺物（図34-3）

出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器であるが、いずれも細片であった。図34-3は東播磨産の須恵器の鉢である。これも口縁部分のみで、口径等は復元できなかった。

土坑23から出土した遺物（図34-4・5・6）

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦等の小片がある。図34-5は土師器の皿である。図34-4は東播磨産の須恵器の甕で、口縁部分を叩きだして整形した後に、口縁端部に垂直に近い平坦面を造り出している、N字状の口縁部をもつ。体部から口縁部までの外面にある叩き目のうち、口縁部の折り返し部分より上は、ヨコナデ調整により消滅している。12世紀後半頃のもので、図15-5と同一の形態である。図34-6丸瓦は内面に布目が残っている。

土坑24から出土した遺物（図34-7～13）

土坑24出土遺物には土師器・須恵器・瓦質土器がある、いずれも小片であった。図34-7～12は土師器の皿である。口縁部ヨコナデ、底部未調整で仕上げられている。図34-13は東播磨産の須恵器の鉢である。

土坑25から出土した遺物（図34-14・15）

土坑25から出土した遺物は、土師器の皿2枚のみである。図34-14・15共の土師器の皿である。これらも口縁部ヨコナデ、底部未調整で仕上げられている。

この他に、図化し得なかった遺物の大まかな内訳は、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦等があり、各遺構から出土している遺物は、概ね13世紀の後半から、14世紀前半頃までの時期のものが主体となっている。

（4）第2遺構面で検出した遺構

この遺構面では地区のほぼ全体にわたり遺構を検出した、遺構は総数53（土坑48・柱穴4・井戸1）である。これらのうちには弥生時代の遺構と平安時代の遺構が混在している。この第2遺構面には、先に述べてきた第1遺構面にみられるような遺構の密集度はみられない。ここでは主に遺物が出土した特徴的な遺構を選んで報告する。

土坑（図35・36）

弥生時代の遺構には土坑1・2がある。これらの土坑からは、多くの弥生時代後期に属する土器が出土している。また、平安時代の遺構には土坑3～15がある。これらの遺構から出土した遺物は少量であった。

土坑1・2（図35）

調査区の中央付近から南東の方向へ約25m離れた付近で検出した。これらは平行な位置関係にあり、約5m離れている。

土坑1は北側に位置しており、長軸方向に約2.30m、短軸方向には約0.70m、深さ約0.40mを測る。検出した平面形は長軸方向を北西から南東の方向にとる隅丸の長方形であった。遺構の底部は平坦であり、埋土は2層で上に浅黄色砂混じりシルト層、下に灰色砂礫層が堆積している。遺物は上下両層から出土したが、主に上層からの出土である。

土坑2は南側に位置しており、規模は長軸方向に約3.40mで、幅は約1.40mから約1m、深

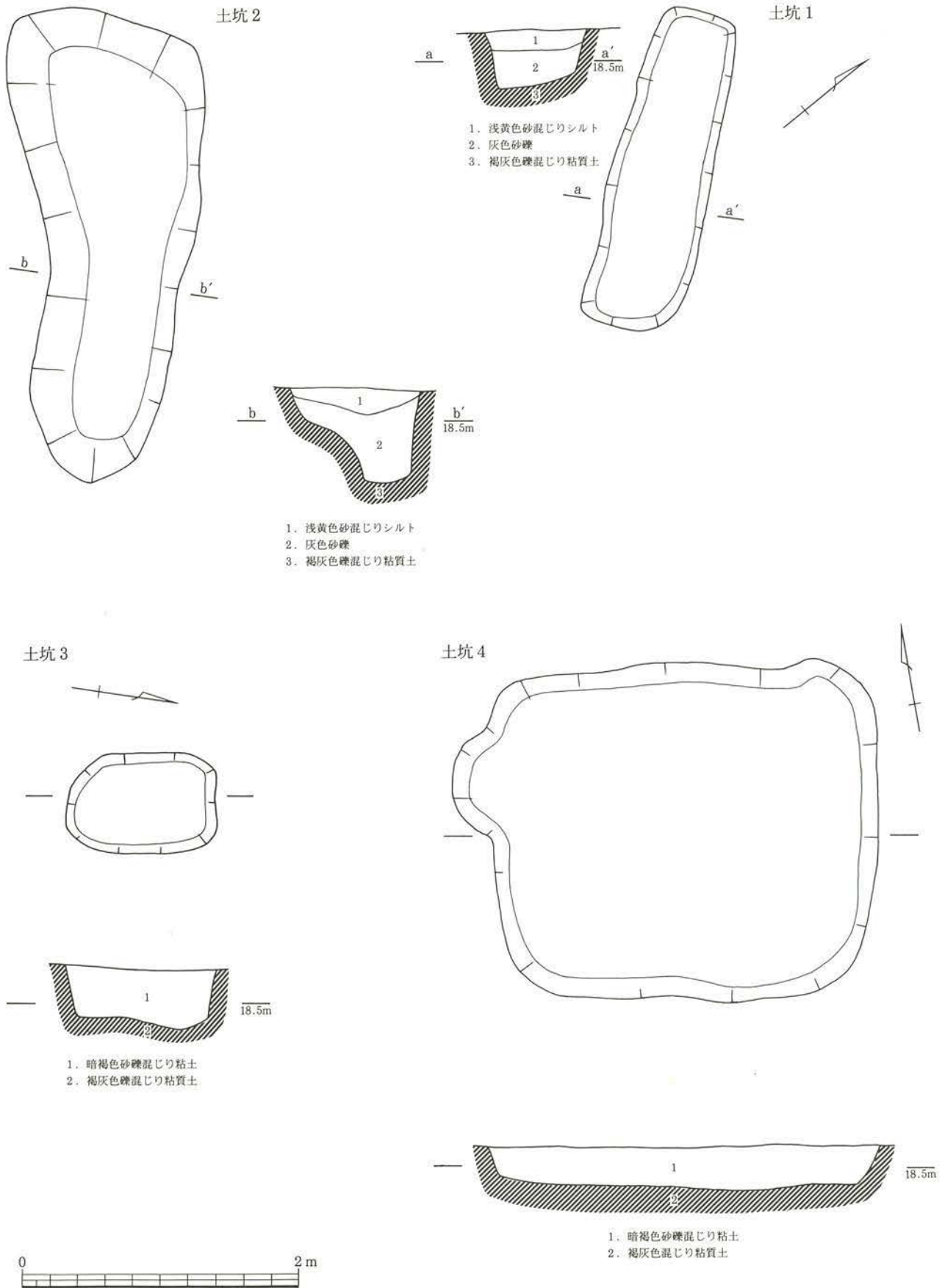


図35 越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑1・2・3・4の平面図・断面図

さ約0.80mを測る。平面形は、北西から南東の方向に長く北西部分が広がる形である。底部は平らで、埋土は上から浅黄色砂混じりシルト層、灰色砂礫層である。下層からは弥生土器(図39-5~21)が多数出土している。

土坑3~8(図35・36)

これらは調査区の中央から北へ約20m離れた付近で検出した。なかでも土坑5は同規模の遺構がほぼ南北の方向に、約1m間隔で3個並ぶものであった。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑3は、検出平面形が隅丸長方形である。規模は長軸方向が約1.10m、短軸方向が約0.70m、深さ約0.40mを測る。底部にはやや窪みがある。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土である。

土坑4の平面形は隅丸長方形である。規模は長軸方向が約3m、短軸方向が約2.40m、深さ約0.30mを測る。底部は平坦である。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土である。

土坑5は隅の丸い方形である。規模は一辺が約0.40m、深さ約0.30mを測る。底部は南東向きに緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土である。

土坑6はいびつな楕円形である。規模は長軸方向には約0.70m、短軸方向には約0.50m、深さ約0.20mを測る。底部は平らであり、埋土は暗褐色砂礫混じり粘土である。

土坑7はいびつな方形である。規模は一辺の平均が約0.70m、深さ約0.15mを測る。底部は平坦であり、埋土は暗褐色砂礫混じり粘土である。

土坑8は長楕円形である。規模は長軸方向に約2.20m、短軸方向に約1.30m、深さ約0.15mを測る。底部は平らで、埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑9~15(図36)

これらを検出した場所は調査区の中央付近東側である。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑9はややいびつに崩れているが円形である。規模は一辺の平均が約0.90m、深さ約0.10mを測る。遺構の底部は平らである。埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑10は隅丸方形である。規模は一辺の平均が約0.90m、深さ約0.15mを測る。底部は西側がやや窪むが、平らである。埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑11は変形しかけているが本来は隅の丸い方形であったと推定できる。規模は一辺の平均が約0.85m、深さ約0.20mを測る。底部は平らで、埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑12は東西方向に長い隅丸長方形である。規模は長軸方向が約1.10m、短軸方向が約0.80m、深さ約0.30mを測る。遺構底部は平らで、埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑13はややいびつな隅丸長方形であり、東西方向に長軸線をもつものである。規模は長軸方向が約1.60m、短軸方向が約1m、深さ約0.20mを測る。底部はほぼ平らであるが、東側の

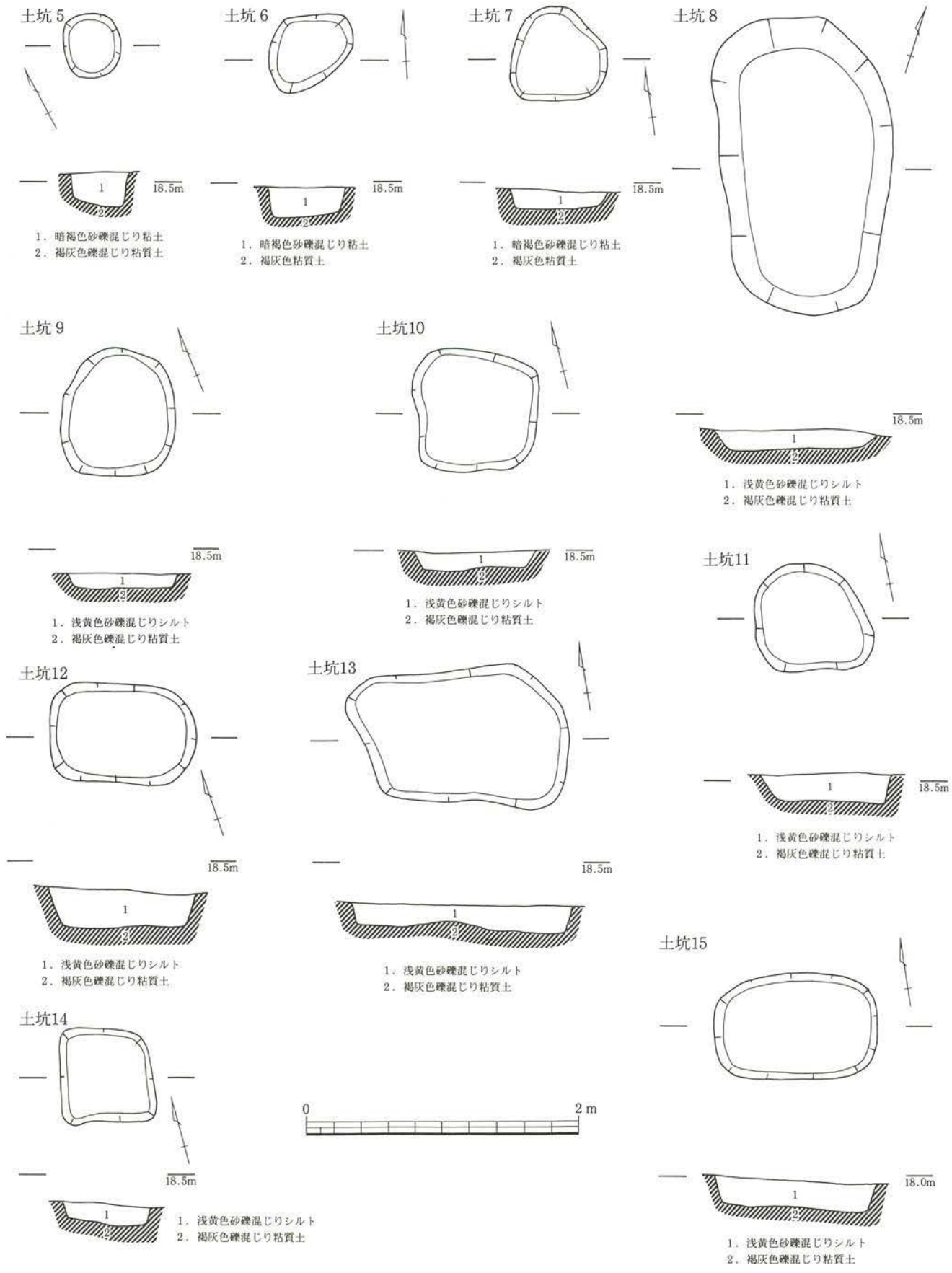


図36 越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑5～15の平面図・断面図

一部分にやや窪んでいるところがある。埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑14はいびつな隅丸の方形である。規模は一辺の平均が約0.70m、深さ約0.15mを測る。底部は平らであるが東向きに傾斜している。埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

土坑15は隅の丸い長方形で長軸方向は東西線にある。規模は長軸方向に約1.20m、短軸方向に約0.80m、深さ約0.20mを測る。遺構の底部は平らで東向きの傾斜がある。埋土は浅黄色砂礫混じりシルトである。

柱列 (図37)

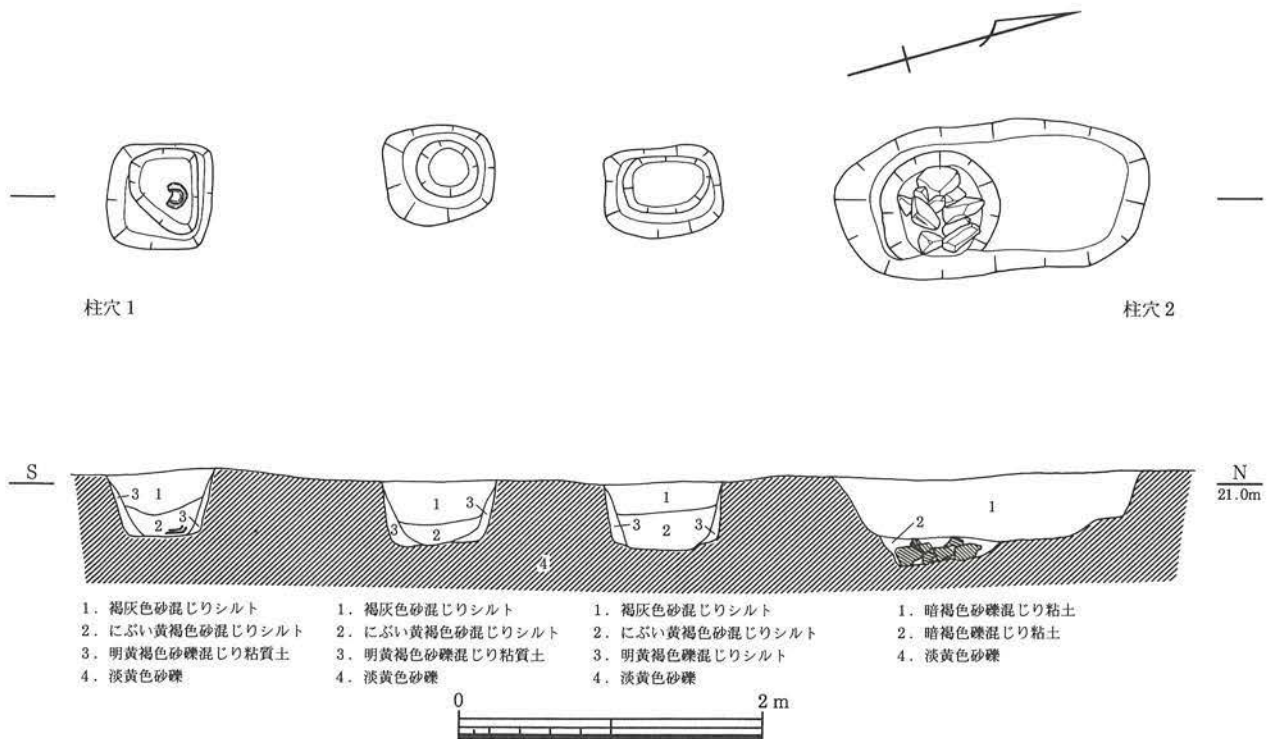


図37 越谷遺跡第2地区第2遺構面の柱列の平面図・断面図

調査区の中央から南西に約30m離れた地点で、柱穴4個からなる柱列を検出した。各々の柱穴は北東から南西の方向に、それぞれ約1.70m～約1.80mの等間隔で並んでいる。このうち柱穴1の底からは地鎮祭に用いたものと考えられる土師器の皿（大皿・小皿）2枚が、上向きに納められた状態で出土した。また、柱穴2には約0.15m～約0.30m大の礫が平らな面を上にして10個敷き詰められていた、礎石として利用したもの的一部分と推定している。

柱穴1の平面形は隅丸方形で、掘方部分の一辺の平均的な長さは約0.70mで、深さは約0.45mを測る。柱痕部分は、掘方のほぼ中央に位置し、やや楕円形で、長径約0.60m、短径約0.50m、深さは約0.40mを測る。埋土は上部に褐灰色砂混じりシルト、掘方部分に明黄褐色砂礫混じり粘質土、柱痕部分にはにぶい黄褐色砂混じりシルトが堆積する。抜き取り跡等の痕跡も検出していない。遺物は柱痕部分の埋土から、土師器の皿が2枚（図40-1・2）出土した。

柱穴2は長軸方向が約2m、短軸方向が約1m、深さ約0.60mを測る。遺構底部は全体的に

南に向かって緩やかに傾斜し、南側に直径約0.80mの円形状の窪みがある。その窪みの中には、約0.15m～約0.30m大の礫が10個、平らな面を上向きにして並べてあった。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土で、底部にあった円形の窪み部分の堆積もこの土と同様のものであるが、やや砂粒が少ないものであった。なお、この柱穴2については、北側から柱を抜き取った痕跡を持つものと推定できるが、調査においては解明できていない。したがって、現状では抜き取り痕跡の可能性がある柱穴としておきたい。

井戸 (図38)

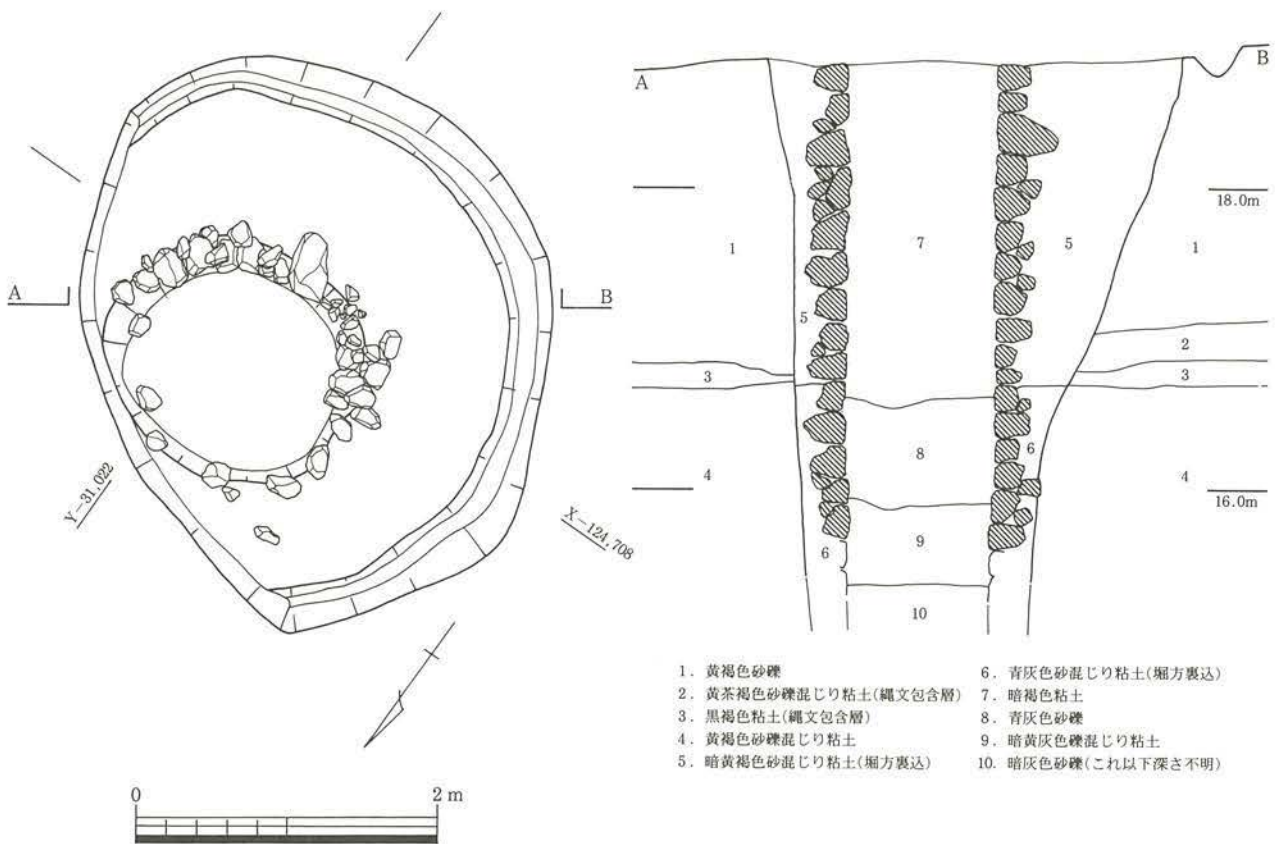


図38 越谷遺跡第2地区第2遺構面の井戸の平面図・断面図

井戸は調査区の中央付近やや北側の部分で検出した。平面形は、掘方がややいびつな楕円形で、中央の北東側に掘方に接するように円形の井戸が存在している。掘方の規模は長軸方向が約3.90m、短軸方向が約3.10mを測る。井戸の直径は約1.70mを測る。井戸の部分のまわりには約0.20～0.40m大の石を円形状に組み合わせて井筒としていた。深さは約3.50mまで掘り下げたが底まで到達しなかった。埋土は掘方の部分には上から暗黄褐色砂混じり粘土層が約2.20mあり、その下は青灰色砂混じり粘土に変わる。井筒部分の内側には上から暗灰色粘土(層厚約2.30m)、青灰色砂礫(層厚約0.70m)、暗黄灰色礫混じり粘土(層厚約0.50m)、暗灰色砂礫となっている。このうち青灰色砂礫層から土師器の皿・施釉陶器・土馬が出土した。

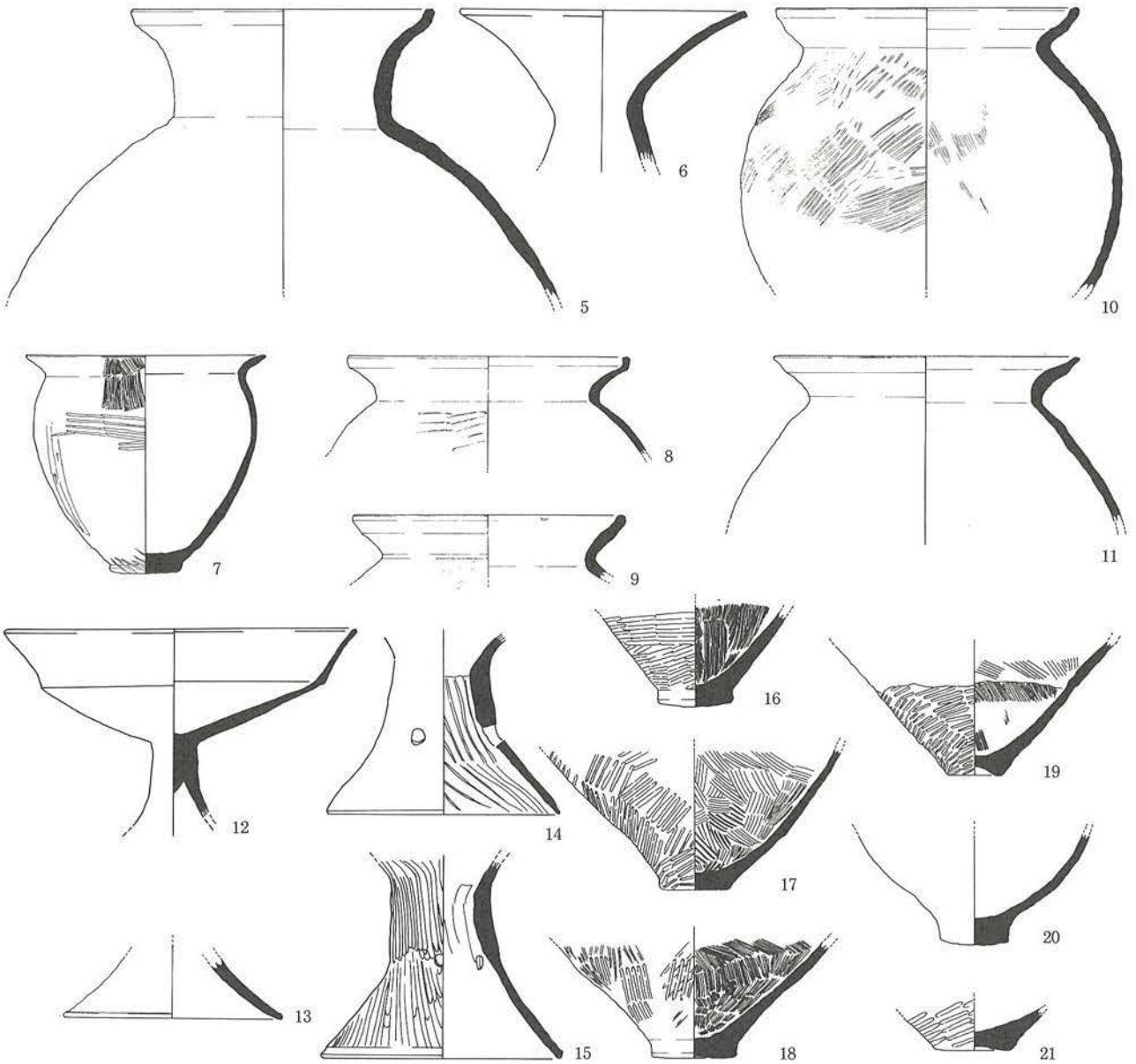
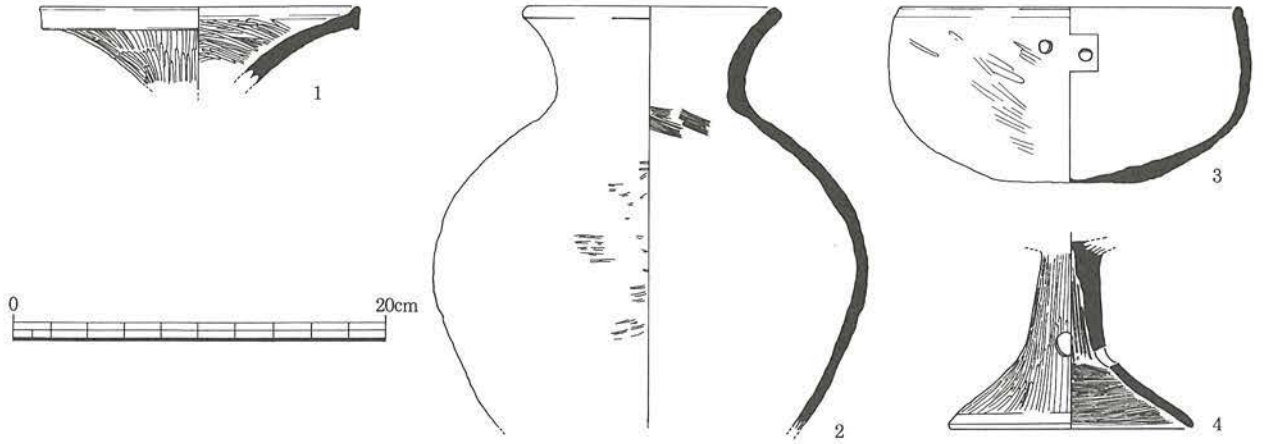


図39 越谷遺跡第2地区第2遺構面の土坑1（1～4）・土坑2（5～21）出土遺物（弥生土器）

(5) 第2遺構面から出土した遺物

土坑1から出土した遺物(図39-1~4)

図39-1~4はいずれも弥生土器である。図39-1・2は壺で、1は短く屈曲して外上方に外反しながらのびる口縁部分の上方に稜、下方に肥厚を有し外端面は平坦な面をなす。外面を縦方向に細かくヘラミガキ、内面に横方向の細かいハケ目を施す。2の口縁部は、上外方に外反しながらのびる口縁部に、内傾する平坦な面を有する端部をもち、体部は最大径を中位に求める長円形を呈する体部をもつ。土器表面は著しい磨耗を受けており、外面に叩き、内面に横方向のハケ目がかすかに残っている。3は鉢で、体部から口縁部にかけて上内方に内傾し、口縁部は肥厚し、端部は内傾する面を有する。底部は平らである。外面を斜め方向にヘラミガキした痕跡がかすかに残る。4は高杯で、脚部は垂直に下ったのち3分の1位で外下方へ下り、端部は丸く納める。脚部の屈曲部付近には円形のスカシ孔が3方向にあり、その外面には縦方向に細かいヘラミガキが施され、内面の外下方へ開く部分には横方向のハケ目があり、それより上には縦方向に絞り目がある。この他、弥生土器の細片が出土している。

土坑2から出土した遺物(図39-5~21)

図39-5~21は土坑2出土の弥生土器である。図39-5・6は壺で、5の口頸部は真っすぐに立ち上がり、端部付近で緩やかに外反する。端部は上方向に肥厚して、外端面は外傾する面を有し、体部は球形を呈する。6の口頸部は、内傾しながらのびた後に、緩やかに外反しながら外上方にのびる。端部は内傾する面をもつ。5・6とも磨耗により調整不明である。

図39-7・8・9・10・11は甕で、7の口頸部は屈曲して外反し外方に開く、その端部は丸く納める。体部はその最大径を5分の3上位に求め器高の低い長胴形を呈する。外面の調整は縦方向のヘラケズリの後、体部最大径付近まで叩きそれより上位には縦方向に細かいハケ目を施す。図39-8~11はいずれも長円球形の体部から屈曲して外方に開く口頸部をもち、8の口縁端部は、上方に稜状の突起を有し外端面は垂直な平坦面をなす、9・10は口縁端部付近から緩やかに内湾しており、端部を丸く納める。11の口頸部は、長円球形の体部から屈曲して外方に開き、口縁端部を上外方にやや高い稜状の突起を有して、外端面をやや外傾させている。調整はそれぞれ外面叩き、内面は磨耗により不鮮明であるが、ハケ目を施していることが伺える。

図39-16・17・18・19・20は甕で、16・17・18の体部は外上方へのびる、すべて底部は平らであり、とくに16は端部が外側に肥厚する。外面には叩き、内面にはハケ目が調整として施されている。19・20の体部は外上方へ真っすぐにのびる、19の底部外面は平らで中央に窪みがあり、20の底部外面は平らでやや窪みをもつ。外面には叩きを、内面にはハケ目を調整として施す。図39-21は甕か壺の底部である。体部は内湾して立ち上がるもので、底部は他に比較して分厚く平らである。調整は著しい磨耗のため不明である。

図39-12・13は高杯で、12の体部は外上方にのびたち、口縁部は外反して上外方にのびる。その端部は丸く納める。13の脚部は裾部が外方に開き、端部はやや肥厚し丸いものである。それぞれ表面の磨耗が著しいため調整等は不明である。

図39-14・15は器台で、それぞれ体部から口縁部にかけてはほぼ垂直にのびたち、外上方に開く口縁部をもつもので、裾部は外下方に開き、14の端部は稜状の突起を有し、外端面は外傾する凹面を呈する。15の端部は外面側が肥厚し、外端面は内傾する平面をなす。15の外面には縦方向の細かいヘラミガキが、それぞれの内面には絞り目がみられる。

図39-14・15とも裾部の付根付近には、3方向に円形のスカシ孔をもつ。

これらの土器は概ね弥生時代の後期の時期にあてはめることができる。

柱穴1から出土した遺物（図40-1・2）

図40-1・2は共に土師器皿である。表面の調整は口縁部のみにヨコナデを施して仕上げ、底部未調整のままである。

井戸から出土した遺物（図40-3～5）

図40-3は土師器の皿で、平らな底部に斜め外に真っすぐに立ち上がる口縁部をもち、端をつまんで丸く納めて仕上げている。口縁部のみヨコナデ、底部未調整である。

図40-4は青磁碗であり、中国製陶磁器の龍泉窯系の青磁碗と呼ばれるものである。13世紀の前半頃のものである。

図40-5は土馬の首の部分の破片である。表面の磨耗が著しいため調整等は不明である。

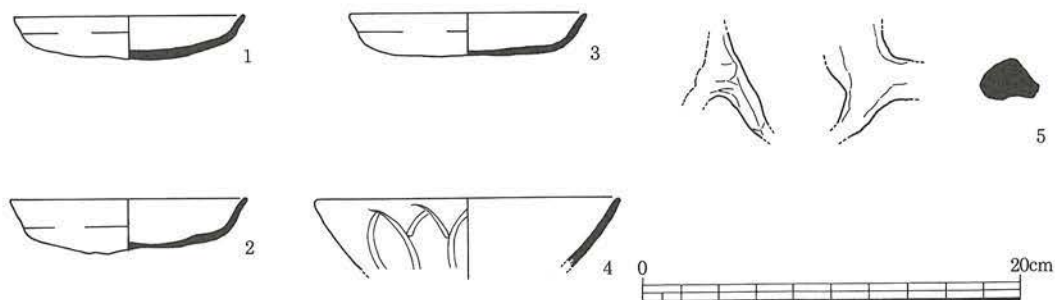


図40 越谷遺跡第2地区第2遺構面の柱穴1（1・2）と井戸の出土遺物（3～5）

（6）第3遺構面で検出した遺構（図41）

この調査区では、従来地山層ととらえてきた砂礫層の下位に、層厚約0.50mの縄文時代の遺物包含層が存在していることがわかった。

第2遺構面で検出した井戸の断ち割り調査の際に下層で、縄文土器を包含する層の存在を確認した。このため調査区にさらに4本のトレンチを設定して包含層の拡がり等を確認した。

この結果、すべてのトレンチに黒褐色粘土層を中心に縄文土器が包含していることがわかったとともに、D・Eの両トレンチにおいて一連のものと考えられる溝を検出した。それは、北西

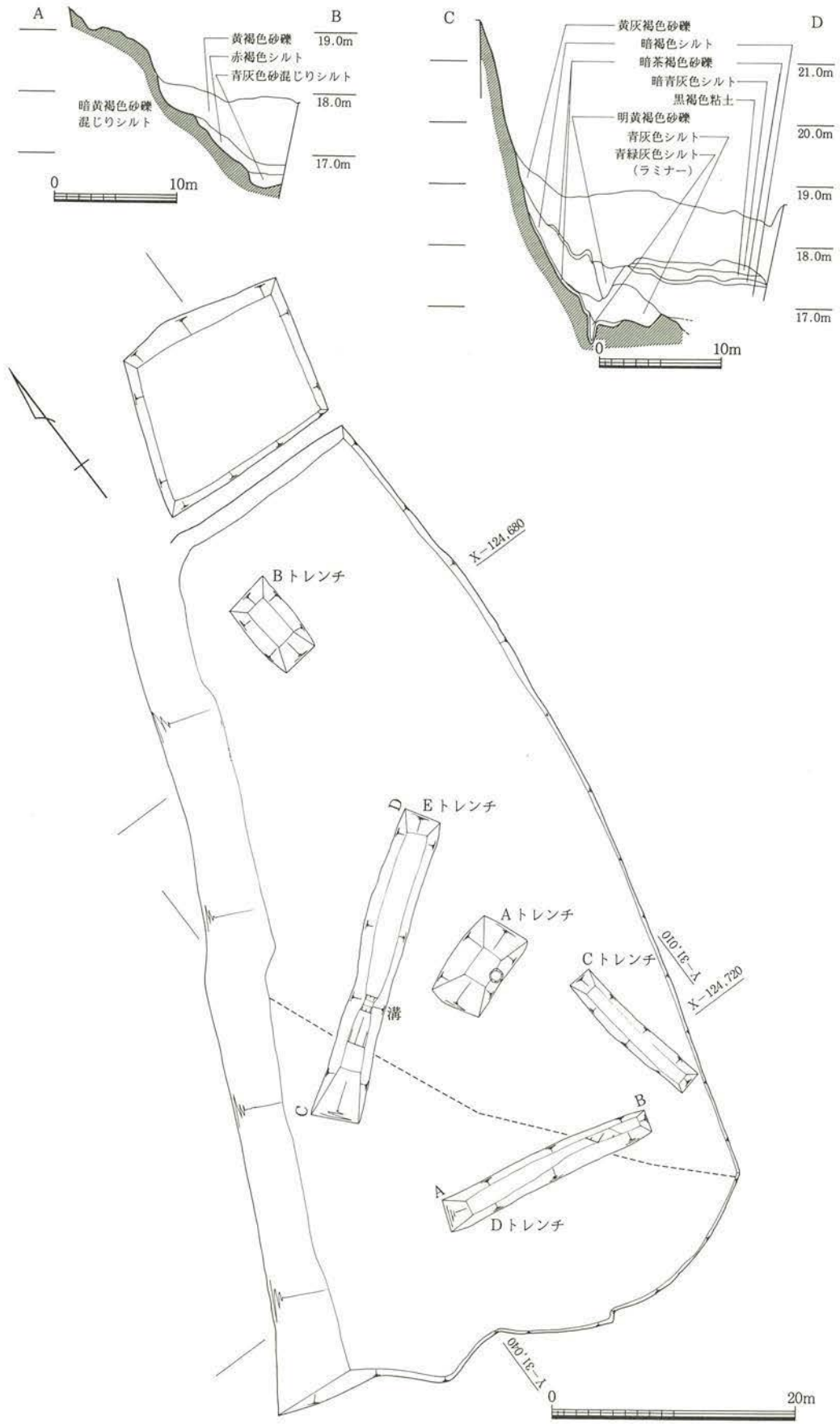


図41 越谷遺跡第2地区第3遺構面確認トレンチ配置図



図42 越谷遺跡第2地区の縄文時代包含層の出土遺物

から南西にのびるもので、横幅が約4 m、深さ約0.50mを測る溝であり、埋土は青緑灰色シルトであった。また、この包含層は今回の調査地から東の方に拡がるのがわかった。

縄文土器 (図42)

トレンチから出土した縄文土器のうち、Eトレンチからの遺物出土量が目立って多く、整理用コンテナに約15箱となった。図化し得るものを選んで、図42に示した。詳細は観察表に示す。

出土した土器は、器面の状態もよいが、完全に復元し得るものはない。出土土器のほとんどが口径などの法量を復元できない無文の粗製深鉢片で占められており、ここでは精製の有文土器を抽出して取り扱うこととする。

図42-1は壺、図42-2~4は鉢、図42-5~17は深鉢である。図42-1は肩部に横位沈線がめぐり、沈線と口縁部の間に、櫛状原体によって施された鋸歯状文がみられる。

図42-2・3は口縁部から体部にかけて数本の沈線が文様帯を区画し、LRの縄文が充填される。4は内側へ肥厚させた外反する口縁をもち、体部には横位の三本の沈線のほかに、垂下沈線文や蛇行沈線文・渦巻文を施す。

図42-5は外側に肥厚させた口縁部外面にLRの縄文を施す。体部には縦位の櫛描条線文を施す。6・7は外側に肥厚させた口縁部に斜め方向の櫛描条線文を施す。

図42-8~10は肥厚させた口縁部にLRの縄文を施したやや小型のものである。10の体部には沈線による文様の区画帯がみられ、区画内は無文である。11は口縁部に三本沈線がめぐり、体部には山形の沈線文がみられる。12は口縁部からやや下がったところに隆帯を貼り付け、刻み目を施す。隆帯の下に二本沈線がめぐり、文様帯を区画する。文様帯には縄文を充填する。

図42-13は外側に肥厚させた口縁部に比較的幅のある横位の沈線文を施す。渦巻文と推定される文様の一部もみられる。14は口縁部外面に横位の沈線文を施す。15は口縁部に近い体部片で、沈線で区画された文様帯には、LRの縄文が施される。16・17は口縁部を内側に肥厚させ文様を施したものである。16は波状を呈する口縁部に断面形状三角形の隆帯を貼り付け、稜線を境に二列に連続する刺突文を施す。17は沈線によって区画された文様帯に縄文を施す。波頂部の内面には不定型の刺突文がみられる。

これら包含層から出土している縄文土器は、北白川上層式の1期から2期に相当する。

5 小結

越谷遺跡第1・2調査区で検出した各遺構面についてまとめてみると以下のとおりである。

第1遺構面

第1遺構面では多数の柱穴を検出したにもかかわらず、掘立柱建物は復元できなかった。柱痕跡をもつ柱穴の比較的集まっている部分や、土坑1・2が示している方向性などをもとにして、第1遺構面上にあったであろう建物群やそれらの付随施設について推定してみたい。

第1遺構面上に残る近世の耕作痕跡が、東へ約8度という方向性をもつ、これは条里施行以降残るとされる地割りの方向性とほぼ一致しているとみてよいだろう。

調査で検出した第1遺構面はこれらの方向性とは違いがあり、土坑1・2が示している方向性は約18度東へ振るということである。このさらに東へ振る方向性は、周辺に施行されていたであろうはずの、条里地割りともずれるものである。

このことから推定されることは、単に当該地域が条里地割りから規制を受けなかった地区と見るよりは、条里地割り以外の何らかの別の規格による規制を受けているものであると推定することも可能ではないだろうか。

すなわち、第1遺構面検出の遺構が示している方向性は、条里地割り以外の何らかの別の意図を示していると考えられることができるのである。このことを傍証する事例として第1遺構面の土坑2から、吉備系土師器の椀（従来は早島式土器と称したもの）の出土をあげることができる。この土器は、これまで大阪府下では遺構から出土した類例がない。京都市内では平安京九条二坊の商業地内にまとまって出土した遺構があるが、これは物資の集約地点としての特殊性を考慮しなければならないものであり、これを除いてこれまでの出土例は、京阪神地区に限って見ても、すべて水上交通路上の中継地や、そこに至るまでの水路による通行路上にあたる場所からの出土である。この遺物が越谷遺跡の土坑より出土していることが示す意義は、越谷遺跡には、吉備系土師器の椀が流通商品としてではなく什器として持ち込まれてきたと解すべきであり、この地には物資が集約されるとともに、それらの管理者たるべき人物が存在していたことを示していると理解すべきではないだろうか。

第2遺構面

弥生時代の土坑1・2からは多くの弥生土器が出土している。両土坑は幅約5mで平行する位置関係にある。その他には弥生時代の目立った遺構がないことから、仮に、これらの土坑を一対としてとらえるのなら、方形周溝墓等の残穴としての可能性も考えられる。

柱列には第一遺構面に見られるような、条里割り付けのもつ方向性とは別の規格性を読み取ることができ、当該地域には古代末から中世初期の段階で、すでに条里地割りを無視するような特別な施設があり、それらの支配を受けた影響がこの柱列にもあらわれていると考える。

このように第1・2遺構面に共通して見られる別の規格性について推論を重ねることが許されるならば、今回の調査地周辺は桜井御所跡に推定されていることもあり、やはり桜井御所の占地がその周辺の土地に何らかの影響を与えたために、条里割り付けの方向性とは別の規格性が当該地域内には残ったのではないだろうかと考えておきたい。

第3遺構面

この調査区で検出した縄文時代の遺物包含層の下には、遺構面が広がっていることを確認し

たが、全面的な遺構精査を行えなかった。縄文時代の遺物包含層は、調査区周辺の標高が低い側にも広がっているとも考えられ、調査区の付近には縄文時代の集落が展開していたと思われる。なお、これらの土器の時期は、縄文時代後期に納まるものである。包含層は、調査区内にある地山層の崖面より下側に堆積している。また、この崖面より上側には縄文時代の遺物包含層は堆積していないし、縄文土器も著しく磨耗した状態の小片が数点しか出土していないことから、崖面より上側にかけて存在したであろう縄文時代の遺物包含層は、すでに削平されている可能性が高いと考える。今回実施したトレンチ調査の結果から判断すると、縄文時代の集落の中心部分は調査区よりも外側にあると考えられる。

第4節 源吾山古墳群

1 調査位置 (図43)

調査位置は、名神高速道路の梶原第2トンネル（大阪府高槻市と三島郡島本町にまたがる）北東側開口部のすぐ上の部分である。調査区付近の標高は約60m～約95mで、地元では源吾山と呼称されている山の北東側斜面中腹から裾部分にかけての範囲で、トレンチによる調査を実施した。トレンチは調査対象地内にある谷筋をはさんで、遺跡の分布範囲の中心部分をほぼ東西方向に横切るような形で南北両側にある尾根の上にそれぞれ1本ずつ合計2本設定した。

北側の尾根上にあるものを北トレンチ、南側の尾根上にあるものを南トレンチと呼ぶことにする。



図43 源吾山古墳群試掘調査トレンチ配置

北トレンチは幅約3m×長さ約130mの規模で、標高約95m～約58mにかけての尾根筋の頂部分を縦走するように設定した。南トレンチは幅約3m×約140mの規模で、標高約84m～約63mにかけてを北トレンチと同様に設定した。南北両トレンチあわせて810㎡が調査面積である。

2 層序 (図44)

調査地の現況は筍栽培を行なっている耕作地であり、両トレンチ共に、現況の地表面下には腐葉土層が約0.10m堆積している、その下位には筍栽培による土の盛り返し作業によってミキシングされた部分がある。

また、南トレンチには標高約73m～約69mの部分に平坦な面があり、それ以外は一定の傾斜を保っている。

これらの地形上に現れている傾斜変換点は、旧来の地形によるところもあると考えられるのだが、調査区内における著しい地山層の削平状況を考慮すれば、筍栽培の開墾によって造り出された方形の畠地とも見てとれる。旧来の地形が若干の平坦地を造り出していたところを利用して、開墾の手が加えられたものと判断される。

3 出土した遺物 (図44)

今回の試掘調査では、須恵器破片2点が出土した。

いずれも北トレンチの標高約90m付近の地点の攪乱土層中よりの出土である。

図44-1の須恵器・杯蓋は口縁部が外下方に下がり、端部は丸く内面の端付近にかえりを有する、かえりの端部は丸く接地する。陶邑編年Ⅲ型式2段階にあてはまるものである。図44-2の須恵器・平瓶は丸みをもつ天井部の端に、外上方にむかって直立する口頸部を付けるものである。Ⅱ型式4段階頃にあてはまるものか。

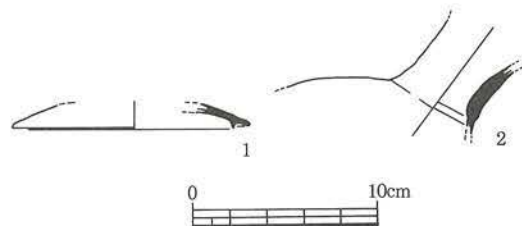


図44 源吾山古墳群出土遺物

4 小結

南・北の両トレンチ調査では、表土層である耕作土層（筍栽培地）より古墳時代の後期の須恵器が2点出土した以外、遺構および遺物包含層は検出しなかった。

表土層からではあるが遺物が出土したことと、今回の調査以外にも調査対象地の周辺部分において、古墳群の存在を示すような遺物が、北トレンチを設定した山の斜面の裾付近で、古墳時代の後期の遺物が過去にも表面採集されているので、これらをよりどころとして、拡大解釈するならば、試掘トレンチを設定した標高約100m付近の地点から、過去に遺物が表面採集された山裾の部分（標高約30m付近）にかけての範囲には、古墳時代後期の遺物が散らばっていて、山裾の部分で採集された遺物には副葬品の一部と見られるような遺物も混じることから、古墳が複数存在していたと考えられる。

第Ⅳ章 桜井周辺に分布する遺跡群の特徴

大阪府三島郡島本町の桜井周辺に分布する遺跡の特徴を、遺跡の地理的条件と発掘調査によって得られた知見を中心に述べることにする。

第1節 越谷遺跡と周辺の遺跡の分布状況について

大阪府三島郡島本町の平地部分を水無瀬川流域の平地部と、御所谷川、越谷川などの小河川が網の目状に入り組む部分の南北2か所の平地部として分ければ、『大阪府文化財分布図』上では、水無瀬川流域の北側平地部分には、広瀬遺跡、広瀬南遺跡が展開している。対して、南側平地部分の越谷川水系の部分には遺跡が分布していないことになっている。すなわち、今回調査を行なった桜井周辺の遺跡群は、桜井丘陵の沿辺に集中して展開しているが、その先に広がる平坦地には遺跡が分布していないということである。

この理由を今回の調査成果から考えるなら、越谷川水系の平地部は、水はけ等の条件も悪く不安定な状態で生活には不向きであったために、開発が遅れたことに起因しているのではないかと判断されるのである。

水無瀬川流域の北側平地部分のうち、水無瀬荘跡遺跡の調査例では地山層が砂礫層となる部分が多くあるが、これらの砂礫層の下位には、越谷遺跡で確認したような縄文時代後期の遺物包含層は検出していない。水無瀬荘跡遺跡では弥生時代の遺構は検出されていないが、包含層には弥生時代の遺物が含まれていることを考えれば、越谷遺跡と同様に砂礫層の上面にはかつて弥生時代の遺跡が存在していたことを想定でき、砂礫層の上面は弥生時代にまで遡って、生活面であった可能性がある。

これらのことから、越谷遺跡と周辺の遺跡の分布状況の特徴としてあげることができる、南側にある平坦部分に遺跡が見られない理由として考えられることは、縄文時代以降に平地部分に扇状地地形が形成されて、その上面が弥生時代後期以降にも不安定な状態であったために、条件の悪い小河川の流域から逃れて丘陵の端付近の丘陵上や、平坦地でも比較的安定した水利等の条件のよい土地を選んで生活の基盤を求めた結果の表れが、現在の遺跡分布図状況を示しているのではないだろうか。

第2節 越谷古墳群と源吾山古墳群について

(1) 越谷古墳群

越谷遺跡が古墳群として取り扱われることとなった契機は、現用の名神高速道路建設工事中

に、古墳時代の遺物が出土したことによるものである。しかしながら、今回の調査では、積極的に古墳として取り上げるものは確認されていない。このため、ここでは古墳群が存在する可能性について調査の成果から考察しておきたい。

従来より御所池の池底部分には横穴式石室の一部が露呈していると考えられてきたが、池の水を抜いたときにしか見ることができず、また、それらの石の周囲には池底の泥の堆積がある為に明瞭さに欠ける等、不明な点が多かった。たとえそれらの石が石室を構成している石であったとしても、その部分に主体部を持つこととなる古墳の墳丘形態や、規模などについては未知数として処理されていた。今回の調査によって池底の石周辺の泥の堆積を除去した結果から、従来より石室と考えられてきた石は原位置において石室を構成するような石材ではないことが判明し、加えて、今回の名神高速道路拡幅工事用地にかかる越谷遺跡内において設定した調査地区内では、古墳の存在を示すような遺構は検出できなかった。また、古墳に副葬されたと推定できるような遺物も出土しなかった。

この結果、これまでに越谷遺跡の分布内において、複数の古墳が存在しているとして位置が示されていることについては今後検討訂正する必要があるものと判断される。

しかし、今回の調査成果のみを用いて、越谷遺跡内に古墳群は存在していないとしてしまうものではなく、『島本町史』に掲載されている古墳の副葬品と考えられる遺物や、御所池底部分にある石室材にふさわしい巨石等の資料が、古墳の存在を検討するための資料的な価値を今後も失ってはいないといえる。さらに今回の発掘調査成果には、消滅した古墳の周溝の一部である可能性が十分にある遺構も検出している。現状の調査成果のみで、ただちにこれを円墳として復元することはできないが、これまでの資料に加えて検討すべき必要性が十分に考えられる遺構であるといえよう。越谷遺跡に古墳群が存在する可能性について、今回の調査の成果から考察できることは、以上のように古墳群の存在を全面的に否定するようなものでなく、新たに古墳の可能性のある遺構が含まれることや、従来からの古墳の位置については再検討する必要があるということが判明した、ということにつきるのではないだろうか。

(2) 源吾山古墳群

源吾山古墳群では、今回の試掘調査で古墳等の遺構を検出しなかった。出土した遺物の出土状況をみても須恵器破片2点が出土しただけである。これは攪乱土層中より出土したもので、須恵器・杯蓋（陶邑編年Ⅲ型式2段階）と須恵器・平瓶（Ⅱ型式4段階）である。古墳の存在を積極的に証明するような成果は得られなかったが、『島本町史』に掲載されている源吾山古墳群出土の遺物や、調査の成果のみを用いて拡大解釈するのであれば、試掘調査トレンチの周辺から過去に古墳時代後半の遺物が表面採集されている山裾の部分にかけての範囲には、古墳時代の後期に属する古墳群が存在していたと考えてもよいものと推定できる。

源吾山古墳群は、『島本町史』掲載の源吾山古墳群出土遺物の出土場所の検討結果や、当調査会が行なった試掘調査をもとにすれば、今回の調査地点よりも等高線的に見て下に古墳群が存在している可能性が高いと考えてよいだろう。

第3節 総括

大阪府三島郡島本町桜井周辺遺跡群の特徴としては、以下にまとめるように考えることができよう。

(1) 縄文時代

越谷遺跡第2調査区で遺物包含層ならびに遺構を検出したように、縄文時代後期以降には確実に生活の痕跡があったということをとらえることができた。これまでも、水無瀬荘跡遺跡内で縄文土器(図5-1・2)の出土が2点確認されているが、いずれも他所からの混入であったと判断されているものであり、越谷遺跡の今回の発掘調査において縄文時代の遺物包含層と遺構を確認した意義は大きいといえるであろう。

(2) 弥生時代

越谷遺跡内においては弥生時代後期の遺構と遺物が検出されている。これらを検出した面は第2遺構面上であり、弥生時代後期には砂礫層の上面に比較的安定した部分が出現していたものと思われる。なお、島本町では淀川河川敷内の広範囲にわたって弥生土器が散布しており、平地部分に存在していた同時期の遺跡が流失していることも十分に考えられる。

(3) 古墳時代

従来より桜井丘陵沿辺部には、後期古墳群が存在すると想定されていたところである。今回の発掘調査では、越谷遺跡第1調査区より小片ではあるが埴輪片が溝より出土しており、横穴式石室を主体とする群集墳以前に築造された古墳の存在を想定することができる。なお、埴輪を出土した溝は平坦地部分にあり、古墳時代後期以前には丘陵地に近い平地部分に古墳が存在していた可能性が考えられよう。

後期の古墳群は、分布図等に古墳群が示されていることもあり、これをよりどころとして古墳群が存在しているとされてきたが、やはり、今回の調査成果には古墳と判断できるような遺構はなく、このことから判断しても再検討する必要がある。結論としては、越谷遺跡内と源吾山古墳群内で行なった試掘調査や発掘調査からは、島本町内にある古墳群の特徴について述べることはできず、その詳細は今後の課題となろう。

(4) 奈良時代から平安時代

越谷遺跡と周辺の遺跡群の調査では、奈良時代の遺構は検出されていないが、水無瀬川流域の北側の平地部分にこの時代の遺跡がある。

この時代には、権力階級層の政治色を強くうかがわせるものである荘園が各地に設置されるようになるが、水無瀬川の中流点付近にも東大寺領の荘園として水無瀬荘が設置されている。この水無瀬荘は物資輸送の中継点的な機能を有していたものと推定されるなど、中央権力との結びつきがうかがわれ、当地が中央権力と強力に結びついたのはこの時期からであるといえる。この水無瀬荘跡遺跡については、名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査もすべて終了し、報告書がすでに刊行されている。

平安時代には、調査地の周辺に桜井御所があったと推定されている。今回の調査では、桜井御所に直接関連する遺構・遺物は検出されていない。

当地の周辺に残る耕作地には、条里地割りの方向性が残るとされており、当調査地の地割り方向は、周辺部のそれと方向が違い、これまでは地図上の違いのみで指摘されてきたものであった。これに対し今回の調査の成果からこの方向性の違いは平安時代にまで遡るものであるということが、越谷遺跡第2遺構面で検出した柱列より判明した。

この時期になると島本町の北側の平地部分にある広瀬遺跡から、土坑等の遺構やそれらに伴う遺物も出土しており、集落的な展開があることを予測させる。このように北側の平地部分では西国街道を中心として広がりを見せる広瀬遺跡や、隣接する広瀬南遺跡が河川交通等を基盤にして展開していたのではないかと考えられる。

(5) 鎌倉時代以降

鎌倉時代には在地領主等の存在を想定できるような遺構および遺物の検出が越谷遺跡第2調査区第1遺構面で検出された。そこでは、居館等の中心的な施設は検出していないが、調査地区にあたる部分は重要地域であったことは、遺構が集中していることや、遺物が多量に出土していることなどから容易に想定できるのである。また、大阪府下においては遺構に伴って出土したことがなかった早島式土器の出土がもつ意義は、単に物のみが単独で出土したという扱いを超えて、そこには吉備地方とのつながりをうかがわせる人物の存在を想定しなければならないだろう。

このように桜井の周辺は歴史的に見て重要な地域であり、名神高速道路内遺跡調査会が今回実施した発掘調査の成果はそれらのことを裏付けていると言えるのではないだろうか。

越谷遺跡の遺構から早島式土器が出土したこともつ意義については、高槻市立埋蔵文化財調査センター橋本久和氏に、御教示いただきました。ここに感謝の意を表したいと思います。

遺物観察表(一)

伝待宵小侍従墓出土遺物

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図9-1	31	弥生甕						良好	密	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ	
-2	31	弥生甕			4.0			良好	密 石粒含む	赤橙色	内面ハケ目 外面タタキ目	
-3	31	弥生甕			4.0			良好	密 石英・石粒含む	褐灰色	外面タタキ目	
-4	31	弥生甕			5.6			良好	密 石粒含む	にぶい黄橙色		
-5	31	弥生甕			5.3			良好	密	にぶい黄橙色	内面ハケ目	
-6	31	弥生甕						良好	密 石粒含む	赤橙色	外面タタキ目	
-7	31	土師皿	11.4	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	
-8	31	瓦器	13.6					良好	密	灰色		
-9	31	須恵器壺			9.1			良好	密	灰白色	底部回転系切り	

越谷遺跡第1地区出土遺物

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図15-1	32	布留 小型丸底甕	13.4	11.3				良好	密	橙色		
-2	32	円筒埴輪						良好	密	橙色	外面ナナメハケ 内面ナデ	
-3		円筒埴輪						良好	密 石英粒含む	橙色		
-4	32	朝顔型円筒 埴輪						良好	密	にぶい褐色	外面ハケ目	
-5	32	須恵器甕	29.5					良好	密	灰白色	外面タタキ目 口縁部ヨコナデ	
-6	32	土師器甕	26.4					良好	密	にぶい橙色	外面ハケ目 口縁部ヨコナデ	
-7	32	土師器甕	29.0					良好	密	にぶい黄橙色	外面ハケ目 口縁部ヨコナデ	
-8	32	土師皿	8.8	1.3				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-9	32	土師皿	9.3	1.9				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-10	32	瓦質羽釜	14.0					良好	密	褐灰色		大和型
-11	32	紡錘車	6.3	1.6						灰白色		滑石製

越谷遺跡第2地区出土遺物(包含層 その1)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図29-1	33	土師皿	11.5	3.2				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-2	33	土師皿	11.8	2.1				良好	密	灰白色	e手法	
-3	33	土師皿	7.4	2.3				良好	密	灰白色	e手法	白色
-4	33	土師皿	7.8	2.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-5	33	土師皿	7.6	1.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-6	33	土師皿	8.3	2.1				良好	密 2mm大の砂粒含む	淡黄色	口縁部ヨコナデ	白色
-7	33	土師皿	8.2	1.8				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-8	33	土師皿	7.4	2.1				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-9	33	土師皿	7.0	2.0				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-10	33	土師皿	7.1	1.9				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-11	33	土師皿	5.0	0.9				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-12	33	土師皿	3.8	0.7				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-13	33	土師皿	4.6	1.1				良好	密	灰白色		白色

遺物観察表(二)

越谷遺跡第2地区出土遺物(包含層 その2)

挿 番 号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図29-14	33	土師皿	6.8	1.0				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-15	33	土師皿	5.5	1.1				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-16	33	土師皿	13.0	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-17	33	土師碗	11.2	3.4		4.6	0.7	良好	密	灰白色	貼り付け高台	白色
-18	33	庄内小形壺	7.2	10.2				良好	密	にぶい黄橙色	内面ハケ目 外面ハケ目 口縁部ヨコナデ	
-19	34	土師皿	8.5	1.4				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-20	34	土師皿	8.2	1.5				良好	密 赤褐色の粒含む	にぶい橙色	e手法	
-21	34	土師皿	8.2	1.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-22	34	土師皿	6.2	1.3				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-23	34	土師皿	9.0	1.2				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-24	34	土師皿	8.6	1.5				良好	密	橙色	e手法	
-25	34	土師皿	8.2	1.6				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-26	34	土師皿	8.6	1.6				良好	密	橙色	e手法	
-27	34	土師皿	8.8	1.5				良好	密	橙色	e手法	
-28	34	土師皿	8.2	1.2				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-29	34	土師皿	8.4	1.3				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-30	34	土師皿	12.1	2.5				良好	密 赤褐色粒含む	灰白色	e手法	
-31	34	土師皿	12.4	2.7				良好	密	橙色	e手法	
-32	34	土師皿	12.0	2.0				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-33	34	土師皿	12.8	2.7				良好	密	橙色	e手法	
-34	34	土師皿	11.6	2.6				良好	密	橙色	e手法	
-35	34	土師皿	13.0	2.0				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-36	35	土師皿	13.0	2.7				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-37	35	土師皿	12.0	2.2				良好	密	にぶい黄橙	e手法	
-38	35	土師皿	11.7	2.5				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-39	35	土師皿	12.9	2.4				良好	密	橙色	e手法	
-40	35	土師皿	11.8	2.7				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-41	35	土師皿	12.2	2.0				良好	密	橙色	e手法	
-42	35	土師皿	12.8	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-43	35	土師皿	12.4	2.6				良好	密 赤褐色の粒含む	灰白色	e手法	
-44	35	土師皿	13.0	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-45	35	土師皿	12.8	2.7				良好	密	橙色	e手法	
-46	35	土師皿	12.9	2.9				良好	密 赤褐色粒 石英粒 含む	浅黄橙色	e手法	
-47	35	土師皿	12.6	2.8				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-48	35	土師皿	12.2	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-49	35	土師皿	12.4	2.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-50	35	土師皿	6.4	2.5				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-51	35	緑釉陶器壺	9.6					良好	密	オリーブ黄色		緑釉

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑1 その1)

挿 番 号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図30-1	36	土師皿	7.4	2.3				良好	密	灰白色	e手法	白色

遺物観察表(三)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑1 その2)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図30-2	36	土師皿	8.2	2.0				良好	密	灰白色	e手法	白色
-3	36	土師皿	8.0	1.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-4	36	土師皿	8.2	1.2				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-5	36	土師皿	8.0	1.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-6	36	土師皿	8.4	1.4				良好	密	橙色	e手法	
-7	36	土師皿	7.8	1.4				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-8	36	土師皿	8.1	1.1				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-9	36	土師皿	8.3	1.6				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-10	36	土師皿	8.1	1.4				良好	密 明褐色粒含む	淡橙色	e手法	
-11	36	土師皿	7.9	1.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-12	36	土師皿	7.8	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-13	36	土師皿	8.5	1.2				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-14	36	土師皿	8.7	1.3				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-15	37	土師皿	8.7	1.1				良好	密 黒色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-16	37	土師皿	8.2	1.8				良好	密	灰黄褐色	e手法	
-17	37	土師皿	8.6	1.1				良好	密 白色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-18	37	土師皿	8.2	1.4				良好	密	にぶい黄橙	e手法	
-19	37	土師皿	8.1	1.5				良好	密 赤褐色粒含む	灰白色	e手法	
-20	37	土師皿	8.0	1.4				良好	密	橙色	e手法	
-21	37	土師皿	8.2	1.3				良好	密 黒色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-22	37	土師皿	11.2	2.9				良好	密	灰白色	e手法	白色
-23	37	土師碗	13.1	3.1				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-24	37	土師皿	6.4	3.6				良好	密	灰白色	e手法	白色
-25	37	土師皿	13.1	3.1				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-26	37	土師皿	12.2	2.6				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	淡橙色	e手法	
-27	37	土師皿	12.0	2.2				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-28	37	土師皿	21.8	2.2				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-29	38	土師皿	11.2	1.6				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-30	38	土師皿	12.4	2.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-31	38	土師皿	12.0	2.5				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-32	38	土師皿	11.9	2.6				良好	密 褐色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-33	38	土師皿	12.2	1.9				良好	密 赤褐色粒含む	黄橙色	e手法	
-34	38	土師皿	12.4	2.7				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-35	38	土師皿	11.9	2.0				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-36	38	土師皿	12.3	2.2				良好	密 褐色粒 クサリ礫 含む	淡黄色	e手法	
-37	38	土師皿	11.6	2.0				良好	密	灰白色	e手法	
-38	38	土師皿	11.0	2.2				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-39	38	土師皿	11.1	2.2				良好	密 赤褐色粒含む	淡橙色	e手法	
-40	38	土師皿	12.0	2.3				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-41	38	土師皿	12.2	2.6				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-42	38	土師皿	13.8	2.5				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-43	39	土師皿	11.1	2.3				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	

遺物観察表(四)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑1 その3)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図30-44	39	土師皿	12.0	2.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-45	39	土師皿	12.7	2.6				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-46	39	土師皿	12.3	1.9				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-47	39	土師皿	12.4	2.6				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-48	39	土師皿	12.2	2.6				良好	密 赤色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-49	39	土師皿	11.8	2.3				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-50	39	土師皿	12.1	2.7				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-51	39	土師皿	12.0	3.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-52	39	土師皿	11.4	1.9				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-53	39	土師皿	12.0	2.4				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-54	39	土師皿	12.6	2.5				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-55	39	土師皿	12.0	2.1				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-56	39	土師皿	12.2	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-57	40	土師皿	12.0	2.3				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい黄橙	e手法	
-58	40	土師皿	12.4	2.6				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-59	40	土師皿	12.0	5.0				良好	密	にぶい黄橙	e手法	

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その1)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図31-1	40	土師皿	4.6	0.9				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-2	40	土師皿	4.6	0.7				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-3	40	土師皿	4.6	0.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-4	40	土師皿	4.4	0.8				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-5	40	土師皿	8.0	1.8				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-6	40	土師皿	8.0	2.1				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-7	40	土師皿	7.1	1.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-8	40	土師皿	7.4	2.1				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-9	40	土師皿	8.0	2.1				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-10	40	土師皿	9.1	1.7				良好	密	灰白色	e手法	白色
-11	40	土師皿	8.0	2.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-12	40	土師皿	7.6	2.0				良好	密	灰白色	e手法	白色
-13	40	土師皿	8.1	2.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-14	40	土師皿	9.2	1.8				良好	密 礫少量含む	灰白色	e手法	白色
-15	40	土師皿	8.7	1.7				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-16	40	土師皿	9.0	1.4				良好	密	灰白色	e手法	白色
-17	40	土師皿	7.7	2.2				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-18	41	土師皿	7.8	2.0				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-19	41	土師皿	8.8	1.7				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-20	41	土師皿	8.6	1.7				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-21	41	土師皿	9.0	1.7				良好	密	灰白色	e手法	白色 灯明痕
-22	41	土師皿	8.8	1.4				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-23	41	土師皿	8.4	1.4				良好	密	灰白色	e手法	白色

遺物観察表(五)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その2)

挿 番 号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図31-24	41	土師皿	9.2	1.8				良好	密	灰白色	e手法	白色
-25	41	土師皿	9.2	1.7				良好	密 礫含む	灰白色	e手法	白色
-26	41	土師皿	9.1	1.7				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-27	41	土師皿	8.7	1.6				良好	密 青灰色粒含む	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-28	41	土師皿	8.2	1.2				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-29	41	土師皿	9.0	1.8				良好	密 石英粒含む	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-30	42	土師皿	10.5	2.8				良好	密 青灰色粒含む	灰白色	e手法	白色
-31	42	土師皿	9.2	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-32	42	土師皿	10.7	2.8				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-33	42	土師皿	10.6	2.7				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-34	42	土師皿	10.6	2.7				良好	密	灰白色	e手法	白色
-35	42	土師皿	13.1	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-36	42	土師皿	12.4	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-37	42	土師皿	13.1	3.2				良好	密 青灰色粒 褐色粒 含む	灰白色	e手法	白色
-38	42	土師皿	6.2	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-39	42	土師皿	13.4	3.3				良好	密 黒色粒含む	灰白色	e手法	白色
-40	42	土師皿	13.0	3.4				良好	密	灰白色	e手法	白色
-41	42	土師皿	12.0	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-42	43	土師皿	13.0	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-43	43	土師皿	13.3	3.1				良好	密 青灰色粒含む	灰白色	e手法	白色
-44	43	土師皿	12.4	2.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-45	43	土師皿	12.2	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-46	43	土師皿	12.8	3.4				良好	密	浅黄色	e手法	白色
-47	43	土師皿	13.0	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-48	43	土師皿	13.1	3.3				良好	密 金雲母含む	灰白色	e手法	白色
-49	43	土師皿	12.5	3.2				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-50	43	土師皿	12.6	3.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	白色
-51	43	土師皿	12.5	3.3				良好	密	灰白色	e手法	白色
-52	43	土師皿	13.2	3.2				良好	密	灰白色	e手法	白色
-53	43	土師皿	12.8	3.3				良好	密	灰白色	e手法	白色
-54	44	土師皿	12.3	3.6				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-55	44	土師皿	13.4	3.4				良好	密 黒色粒 石英粒 含む	灰白色	e手法	白色
-56	44	土師皿	12.8	3.0				良好	密 黒色粒含む	灰白色	e手法	白色
-57	44	土師皿	14.3	3.3				良好	密	灰白色	e手法	白色
-58	44	土師皿	13.0	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-59	44	土師皿	12.6	3.5				良好	密	灰白色	e手法	白色
-60	44	土師皿	12.2	2.9				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-61	44	土師皿	12.4	2.9				良好	密	灰白色	e手法	白色
-62	44	土師皿	12.6	3.1				良好	密	灰白色	e手法	白色
-63	44	土師皿	11.2	3.3				良好	密 石英粒含む	灰白色	e手法	白色
-64	44	土師椀	11.2	3.9				良好	密	灰白色	口縁部ヨコナデ 貼り付け高台	白色

遺物観察表(六)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その3)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図32-65	44	土師皿	12.8	2.9				良好	密	橙色	e手法	
-66	44	土師皿	12.5	2.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-67	44	土師皿	12.2	2.5				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-68	45	土師皿	12.2	2.2				良好	密	灰白色	e手法	
-69	45	土師皿	11.8	2.2				良好	密 赤褐色粒 白色粒, 金雲母	橙色	e手法	
-70	45	土師皿	11.8	2.7				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-71	45	土師皿	12.2	2.4				良好	密 金雲母 赤褐色含む	にぶい橙色	e手法	
-72	45	土師皿	12.5	2.8				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-73	45	土師皿	12.8	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-74	45	土師皿	12.4	2.2				良好	密 赤褐色粒 金雲母含む	浅黄橙色	e手法	
-75	45	土師皿	12.2	2.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-76	45	土師皿	13.0	2.5				良好	密	橙色	e手法	
-77	45	土師皿	12.2	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-78	45	土師皿	12.0	2.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-79	45	土師皿	11.3	2.0				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-80	45	土師皿	11.9	2.1				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-81	45	土師皿	12.1	2.2				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-82	46	土師皿	12.9	2.5				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-83	46	土師皿	12.2	2.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-84	46	土師皿	12.8	3.0				良好	密	橙色	e手法	
-85	46	土師皿	12.2	2.6				良好	密	橙色	e手法	
-86	46	土師皿	12.6	2.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-87	46	土師皿	12.4	2.5				良好	密 黒雲母 石英粒含む	灰白色	e手法	
-88	46	土師皿	12.3	2.5				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-89	46	土師皿	12.4	2.6				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-90	46	土師皿	12.2	2.4				良好	密	橙色	e手法	灯明痕
-91	46	土師皿	12.8	2.7				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-92	46	土師皿	11.9	2.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-93	46	土師皿	11.6	2.0				良好	密	浅黄色	e手法	
-94	46	土師皿	12.2	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-95	46	土師皿	11.7	2.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-96	47	土師皿	11.8	2.6				良好	密 赤褐色粒 金雲母含む	にぶい黄橙色	e手法	
-97	47	土師皿	12.8	2.0				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-98	47	土師皿	12.0	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-99	47	土師皿	12.6	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-100	47	土師皿	12.8	2.8				良好	密	橙色	e手法	
-101	47	土師皿	12.4	2.5				良好	密	橙色	e手法	
-102	47	土師皿	11.9	2.5				良好	密	橙色	e手法	
-103	47	土師皿	11.8	2.3				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-104	47	土師皿	12.4	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-105	47	土師皿	12.4	2.5				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-106	47	土師皿	12.2	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	

遺物観察表(七)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その4)

挿 番 号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図32-107	47	土師皿	12.6	2.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-108	47	土師皿	12.3	2.1				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-109	47	土師皿	12.1	2.5				良好	密 黒色赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-110	48	土師皿	12.4	2.3				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-111	48	土師皿	11.0	2.1				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-112	48	土師皿	12.0	2.3				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-113	48	土師皿	12.2	2.3				良好	密	橙色	e手法	
-114	48	土師皿	12.2	3.0				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-115	48	土師皿	11.8	2.2				良好	密 赤褐色粒含む	橙色	e手法	
-116	48	土師皿	12.5	2.4				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	黄灰色	e手法	
-117	48	土師皿	12.6	2.6				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-118	48	土師皿	12.2	2.8				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-119	48	土師皿	12.4	2.5				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-120	48	土師皿	12.8	2.7				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-121	48	土師皿	12.2	2.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-122	48	土師皿	12.4	2.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-123	48	土師皿	12.8	2.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-124	49	土師皿	11.8	2.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-125	49	土師皿	11.5	2.4				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-126	49	土師皿	12.5	2.1				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	浅黄橙色	e手法	
-127	49	土師皿	11.8	2.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-128	49	土師皿	11.9	2.1				良好	密	浅黄橙色	e手法	

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その5)

挿 番 号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図33-129	49	土師皿	8.7	1.2				良好	密 金雲母・黒色粒 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-130	49	土師皿	8.2	1.1				良好	密	灰白色	e手法	
-131	49	土師皿	8.0	1.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-132	49	土師皿	8.6	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-133	49	土師皿	8.4	1.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-134	49	土師皿	8.2	1.2				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-135	49	土師皿	8.2	1.2				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-136	50	土師皿	8.2	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-137	50	土師皿	8.2	1.3				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-138	50	土師皿	8.3	1.3				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-139	50	土師皿	7.8	1.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-140	50	土師皿	8.4	1.5				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-141	50	土師皿	7.6	1.2				良好	密	橙色	e手法	
-142	50	土師皿	8.0	1.5				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-143	50	土師皿	8.4	1.2				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-144	50	土師皿	7.8	1.6				良好	密	橙色	e手法	
-145	50	土師皿	8.3	1.3				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	

遺物観察表(八)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その6)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図33-146	50	土師皿	8.4	1.7				良好	密	橙色	e手法	
-147	50	土師皿	8.0	1.1				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-148	51	土師皿	7.8	1.1				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい黄橙色	e手法	
-149	51	土師皿	8.6	1.4				良好	密	橙色	e手法	
-150	51	土師皿	8.1	1.4				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-151	51	土師皿	8.2	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-152	51	土師皿	8.0	1.7				良好	密	橙色	e手法	
-153	51	土師皿	8.0	1.1				良好	密 石英粒 赤褐色粒 含む	にぶい橙色	e手法	
-154	51	土師皿	8.3	1.2				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	浅黄色	e手法	
-155	51	土師皿	8.4	1.3				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-156	51	土師皿	7.2	1.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-157	51	土師皿	8.0	2.1				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-158	51	土師皿	7.9	1.0				良好	密 赤褐色粒含む	淡橙色	e手法	
-159	51	土師皿	7.8	1.3				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-160	52	土師皿	8.2	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-161	52	土師皿	8.0	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-162	52	土師皿	7.8	1.1				良好	密	橙色	e手法	
-163	52	土師皿	8.6	1.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-164	52	土師皿	8.4	1.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-165	52	土師皿	7.9	1.3				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-166	52	土師皿	9.2	1.8				良好	密	橙色	e手法	
-167	52	土師皿	6.8	1.3				良好	密	橙色	e手法	
-168	52	土師皿	7.8	1.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-169	52	土師皿	8.4	1.4				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-170	52	土師皿	8.3	1.7				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-171	52	土師皿	8.0	1.6				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-172	53	土師皿	7.8	1.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-173	53	土師皿	7.7	1.2				良好	密 赤褐色粒含む	淡橙色	e手法	
-174	53	土師皿	8.2	1.3				良好	密	橙色	e手法	
-175	53	土師皿	8.1	1.2				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-176	53	土師皿	8.3	1.0				良好	密 赤褐色粒含む	にぶい橙色	e手法	
-177	53	土師皿	7.8	1.4				良好	密	橙色	e手法	
-178	53	土師皿	8.4	1.6				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-179	53	土師皿	8.6	1.5				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-180	53	土師皿	8.0	1.1				良好	密	灰白色	e手法	
-181	53	土師皿	8.2	1.4				良好	密	橙色	e手法	
-182	53	土師皿	8.2	1.2				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-183	53	土師皿	11.8	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-184	54	土師皿	12.2	2.3				良好	密	淡橙色	e手法	
-185	54	土師皿	11.2	2.4				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-186	54	土師皿	12.8	2.9				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-187	54	土師皿	11.8	2.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	

遺物観察表(九)

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面・土坑2 その7)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図33-188	54	土師皿	11.8	2.6				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-189	54	土師皿	11.9	2.2				良好	密 石英粒 赤褐色粒 含む	にぶい橙色	e手法	
-190	54	土師皿	11.8	2.5				良好	密 赤褐色粒 金雲母 含む	にぶい橙色	e手法	
-191	54	土師皿	11.4	2.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	
-192	54	瓦器椀	13.1	4.3		4.3	0.2	良好	密	灰色	貼り付け高台	
-193	54	瓦器椀	14.4	5.2				良好	密	オリーブ黒色	貼り付け高台 同心円暗文	
-194	54	瓦器椀	10.0	3.0				良好	密	オリーブ黒色		
-195	54	須恵器鉢	28.1	11.8				良好	密	にぶい黄橙色	外面ヨコナデ	東播磨産
-196		丸瓦	高 5.0	長 23.1				良好	密	灰色	内面布目	鎌倉時代

越谷遺跡第2地区出土遺物(第1面 土坑19・20・23・24・25)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図34-1	55	土師皿	8.8	1.3				良好	密	灰白色	e手法	
-2	55	土師皿	12.2	2.5				良好	密	にぶい黄橙色	e手法	
-3	55	須恵器甕						良好	密	灰白色		東播磨産
-4	55	須恵器甕	28.8					良好	密	黒褐色	外面タタキ目 口縁部ヨコナデ	東播磨産
-5	55	土師皿	8.8	1.4				良好	密	浅黄橙色	e手法	
-6	55	丸瓦		8.3				良好	密	灰色	内面布目	鎌倉時代
-7	55	土師皿	8.5	1.4				良好	密 金雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-8	55	土師皿	8.6	1.9				良好	密	灰白色	e手法	白色
-9	55	土師皿	10.7	2.9				良好	密 石英粒含む 多少礫有り	灰白色	口縁部ヨコナデ	白色
-10	55	土師皿	11.8	2.4				良好	密	にぶい橙色	e手法	灯明痕
-11	55	土師皿	12.5	2.2				良好	密 雲母含む	にぶい橙色	e手法	
-12	55	土師皿	13.4	2.5				良好	密	橙色	e手法	
-13	55	須恵器鉢	36.8					良好	密	灰色		東播磨産
-14	55	土師皿	12.2	1.8				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色		
-15	55	土師皿	9.0	1.0				良好	密 赤褐色粒含む	浅黄橙色		

越谷遺跡第2地区出土遺物(第2面・土坑1・2 その1)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図39-1	56	壺か甕	17.0					良好	密	橙色	外面ヘラミガキ	
-2	56	壺	13.2					良好	密	淡橙色	口縁ヨコナデ 外面タタキ目	
-3	56	鉢	18.2	9.3				良好	密	浅黄橙色	外面ヘラミガキ	
-4	56	高杯			13.0	脚部 9.4		良好	密	にぶい黄橙	外面ヘラミガキ	
-5	56	壺	18.2	17.5				良好	密 石英粒 雲母含む	明褐色		
-6	56	器台	16.8					良好	密	にぶい橙色		
-7	56	甕	12.4	13.2				良好	密	明褐灰色	外面ハケ目	
-8	56	甕	16.8					良好	密	橙色	口縁部ヨコナデ 外面タタキ目	
-9	57	甕	16.1					良好	密 石英粒含む	にぶい橙色	口縁部ヨコナデ 外面タタキ目	
-10	57	甕	17.9					良好	密 石英粒 赤褐色粒含む	浅黄橙色	外面タタキ目	
-11	57	甕	18.2					良好	密	浅黄色	外面タタキ目 口縁部ヨコナデ	
-12	57	高杯	21.4			頸部 2.8		良好	密 シャモット含む	橙色		

遺物 観 察 表 (十)

越谷遺跡第2地区出土遺物 (第2面・土坑1・2 その2)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図39-13	57	高杯			13.0			良好	密	浅黄橙色	外面ヘラミガキ	
-14	57	器台	頸部 5.9		14.0			良好	密 金雲母含む	橙色		
-15	57	器台			14.8			良好	密	にぶい橙色	外面ヘラミガキ	
-16	57	甕			4.4			良好	密	浅黄色	外面タタキ目 内面ハケ目	
-17	57	甕			4.0			良好	密	灰黄色	外面タタキ目 内面ハケ目	
-18	58	甕			4.8			良好	密	にぶい橙色	外面タタキ目 内面ハケ目	
-19	58	甕			3.2			良好	密	浅黄色	外面タタキ目 内面ハケ目	
-20	58	甕			4.1			良好	密	暗灰色	外面タタキ目	
-21	58	甕			4.5			良好	密	明黄褐色	外面タタキ目	

越谷遺跡第2地区出土遺物 (第2面・柱穴1・井戸)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図40-1	58	土師皿	12.3	2.3				良好	密	灰黄色	e手法	白色
-2	58	土師皿	12.8	3.0				良好	密 金雲母	にぶい黄橙色	e手法	
-3	58	土師皿	12.7	2.3				良好	密 黒色粒 青灰色粒含む	浅黄橙色	e手法	
-4	58	青磁椀	16.1	3.7				良好	密	灰オリーブ色		緑釉・龍泉窯
-5	58	土馬		6.2				良好	密	淡橙色	ナデ	

越谷遺跡第2地区出土遺物 (縄文時代包含層)

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考 (縄 文)
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図42-1	59	壺		2.3				良	密	灰黄色	肩部外面に横位の沈線と 鋸歯状文	
-2	59	鉢		4.8				良	密	灰白色	口縁部と体部の外面を沈 線で区画し、縄文を充填	LR
-3	59	鉢		3.2				良	密	黒褐色	口縁部と体部の外面を沈 線で区画し、縄文を充填	LR
-4	59	鉢		4.5				良	密	にぶい橙色	体部外面に横位・垂下・ 蛇行沈線文と渦巻文	
-5	59	深鉢		7.5				良	密	褐色	口縁部外面に縄文、体部 外面に縦位の櫛指条線文	LR
-6	59	深鉢		2.2				良	密	にぶい褐色	口縁部外面に斜め方 向の櫛指条線文	
-7	59	深鉢		2.8				良	密	灰白色	口縁部外面に斜め方 向の櫛指条線文	
-8	59	深鉢		3.2				良	密	橙色	体部外面に横位の条痕	LR
-9	59	深鉢		4.0				良	密	にぶい黄褐色	口縁部外面に縄文	LR
-10	60	深鉢		3.3				良	密	暗褐色	口縁部外面に縄文	LR
-11	60	深鉢		3.8				良	密	黒褐色	口縁部外面に横位の 3本沈線	
-12	60	深鉢		5.0				良	密	灰黄褐色	口縁部外面に刻目を もつ隆帯	LR
-13	60	深鉢		3.8				良	密	にぶい橙色	口縁部外面に横位沈 線文	
-14	60	深鉢		3.9				良	密	黒褐色	口縁部外面に横位沈 線文	
-15	60	深鉢		3.2				良	密	黒褐色	体部外面を沈線で区画し、 縄文を充填	LR
-16	60	深鉢		3.6				良	密	灰白色	口縁部内面に刺突文 をもつ隆帯	
-17	60	深鉢		4.5				良	密	灰黄褐色	口縁部内面を沈線と不定 形刺突文で加飾	

源吾山遺跡出土遺物

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量					焼成	胎 土	色 調	技 法	備 考
			口径	器高	底径	高台径	高台高					
図44-1		須恵器蓋			12.8			良好	密	灰白色		
-2		須恵器平瓶						良好	密	灰色		

図 版



島本町遺跡周辺航空写真（昭和30年撮影）

調査前の調査地
(越谷遺跡第2地区)



調査地遠景
(南から)



調査地全景
(北から)



調査地全景
(北から)

御所池瓦窯跡



試掘第 3 トレンチ
(南から)



試掘第 3 トレンチ
(北から)



試掘第 3 トレンチ
(東から)

越谷遺跡



試掘第 5 トレンチ
(南西から)



試掘第 5 トレンチ
(西から)



試掘第 5 トレンチ
(西から)

越谷遺跡



試掘第7トレンチ
(東から)

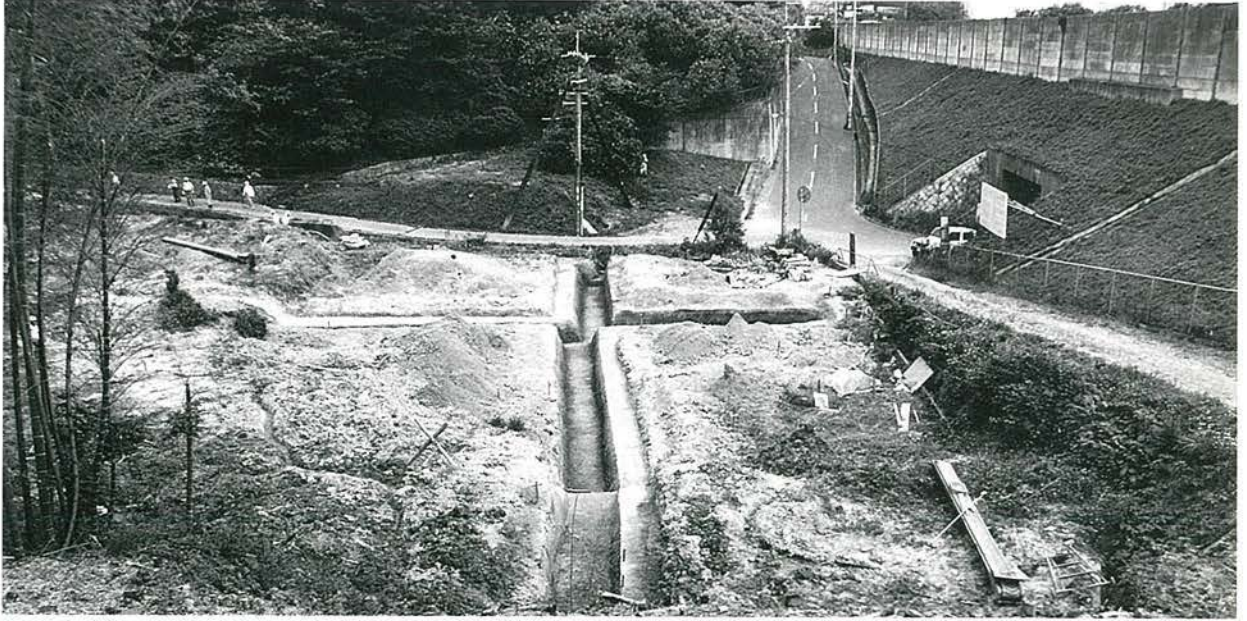


試掘第7トレンチ
(北から)

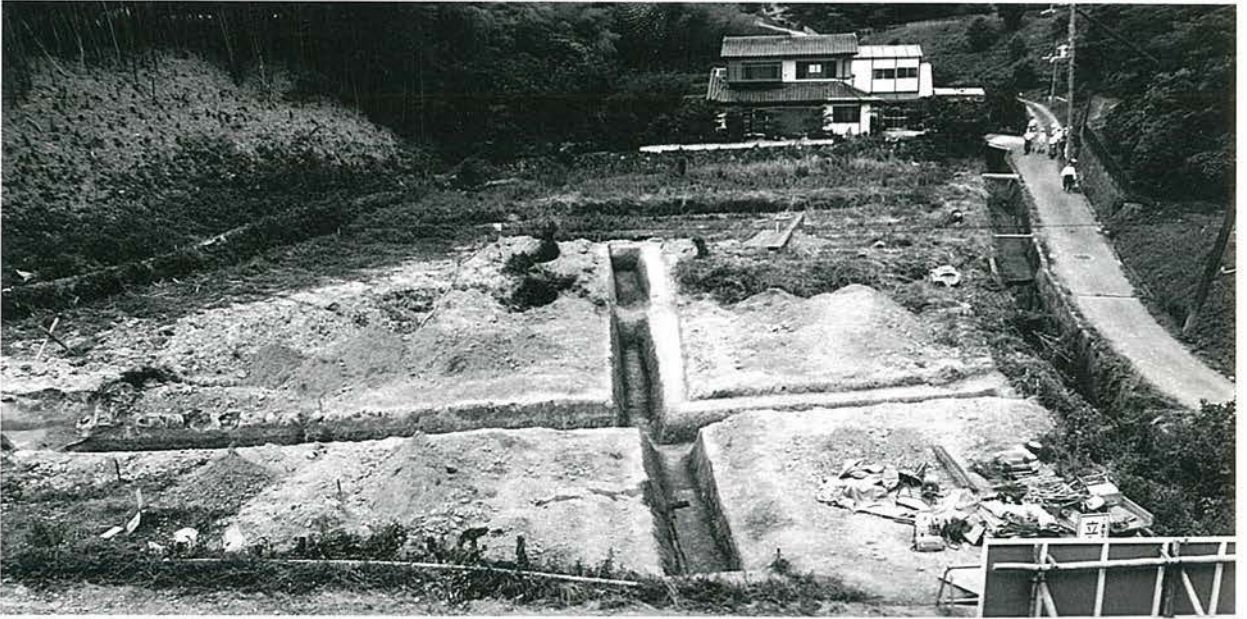


試掘第7トレンチ東壁

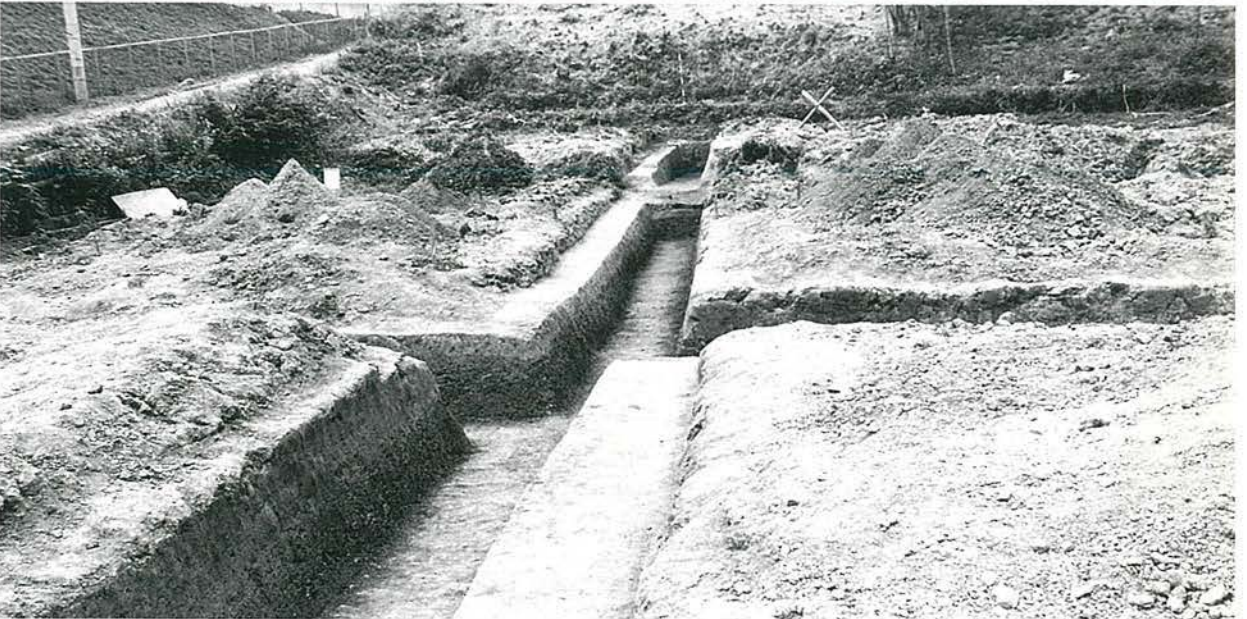
桜井御所跡



試掘第 8 トレンチ
(北側・南から)



試掘第 8 トレンチ
(北側・東から)

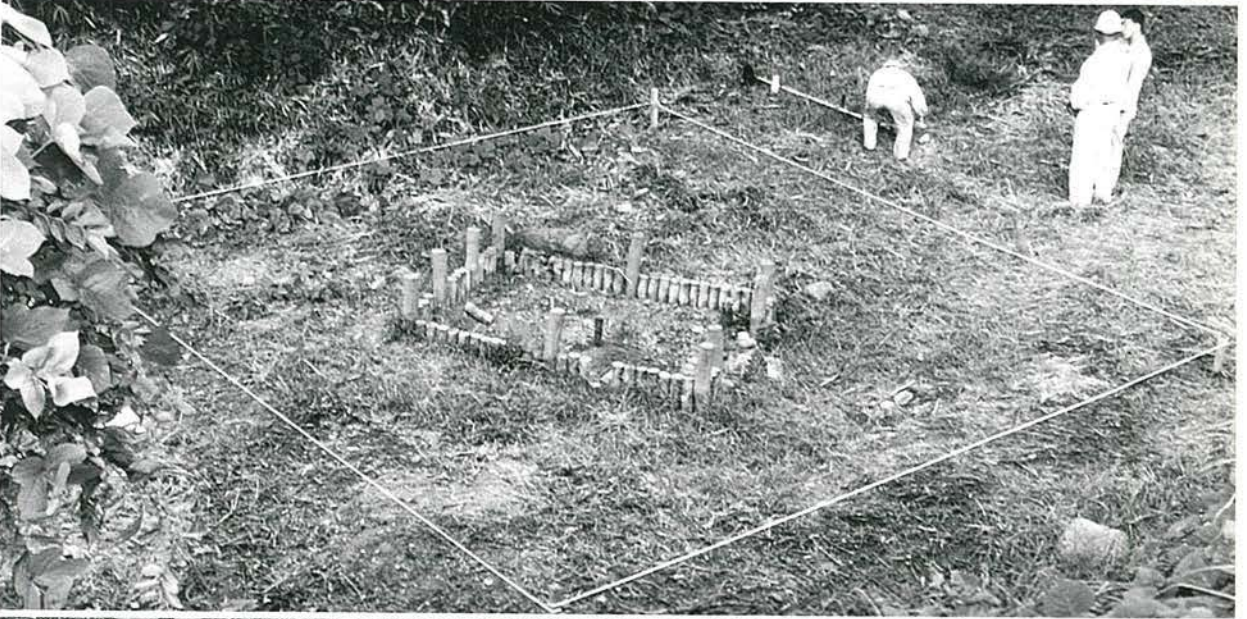


試掘第 8 トレンチ
(北側・北から)

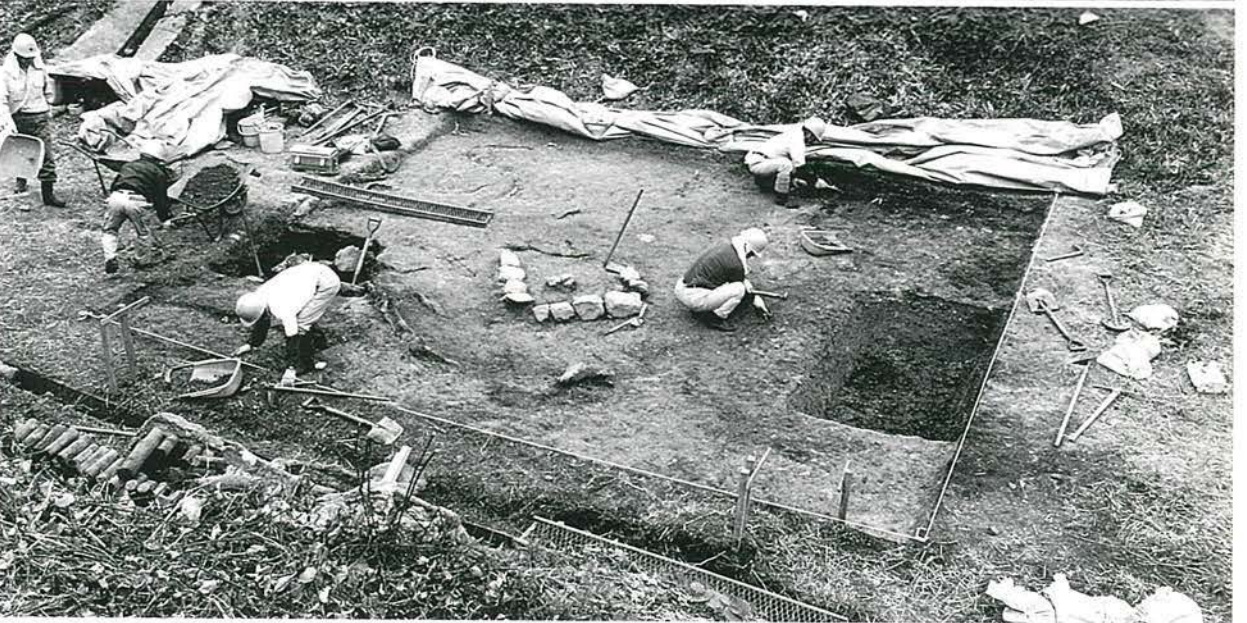
伝待宵小侍従墓の調査



試掘第2トレンチ
西壁

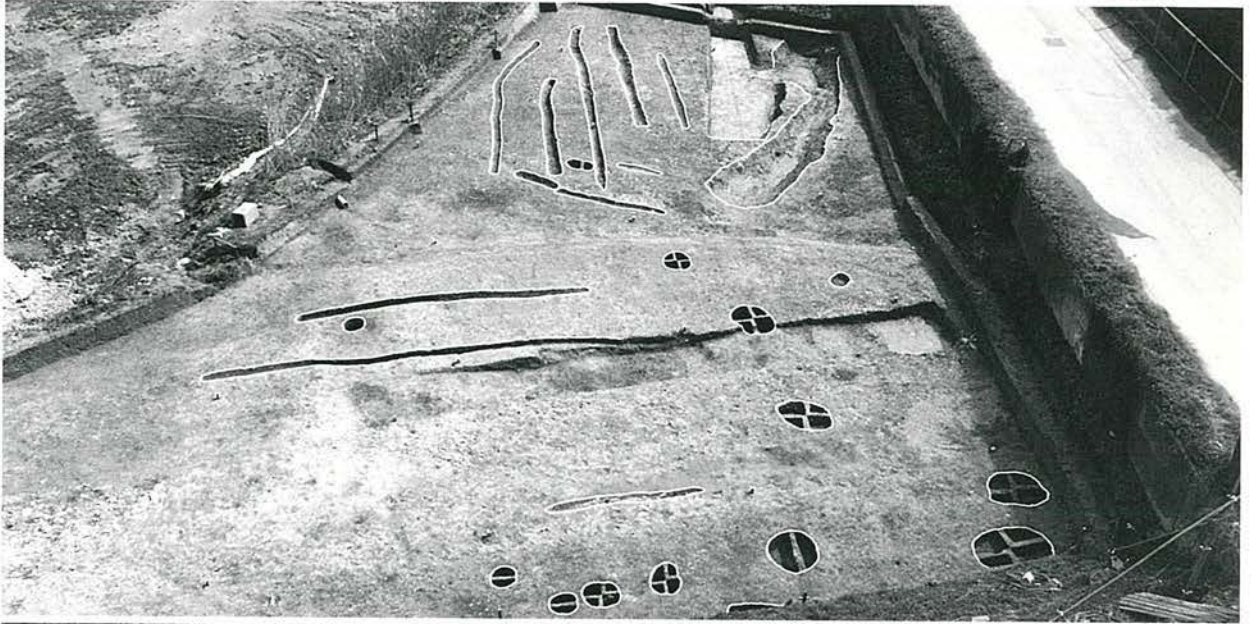


調査区全景
(東から)



石組遺構
(東から)

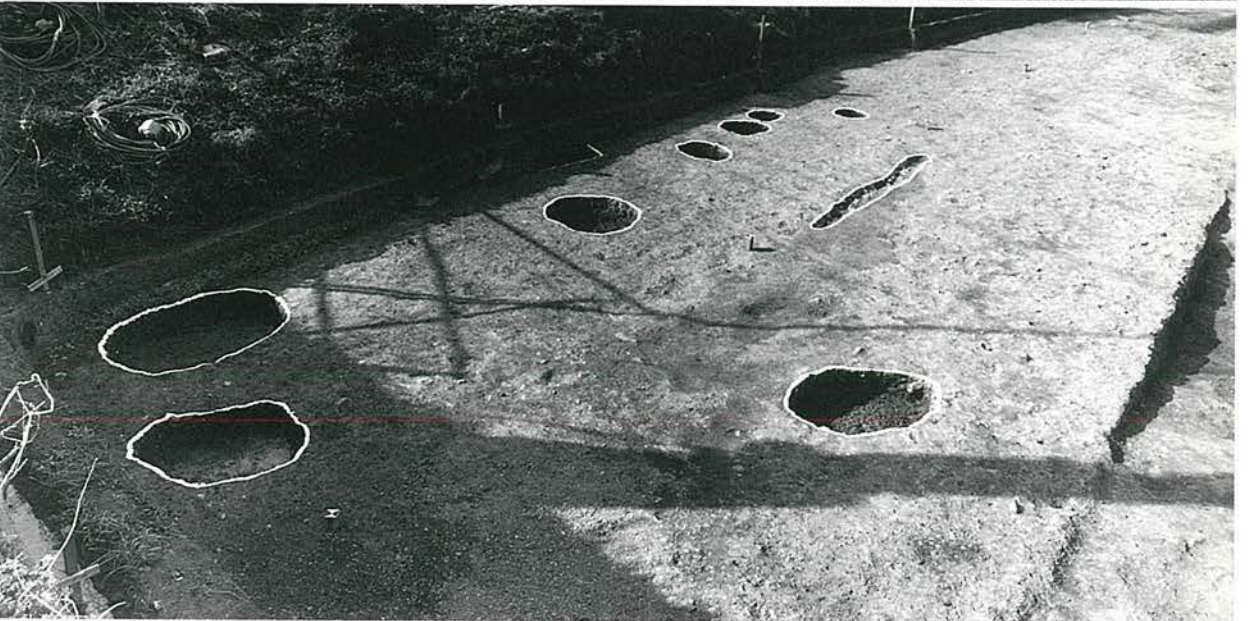
越谷遺跡第1地区
の調査



第1遺構面の西半部
(西から)



第1遺構面の西半部
(東から)



第1遺構面の西半部
(南から)

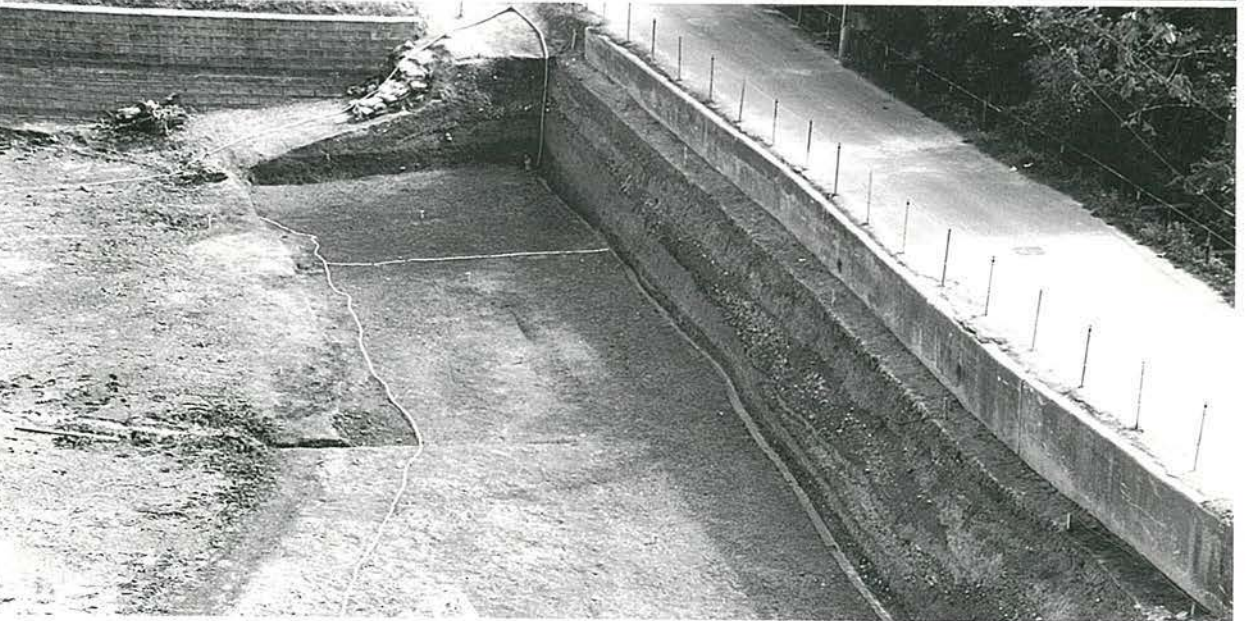
越谷遺跡第1地区
の調査



第1遺構面の東半部
(東から)

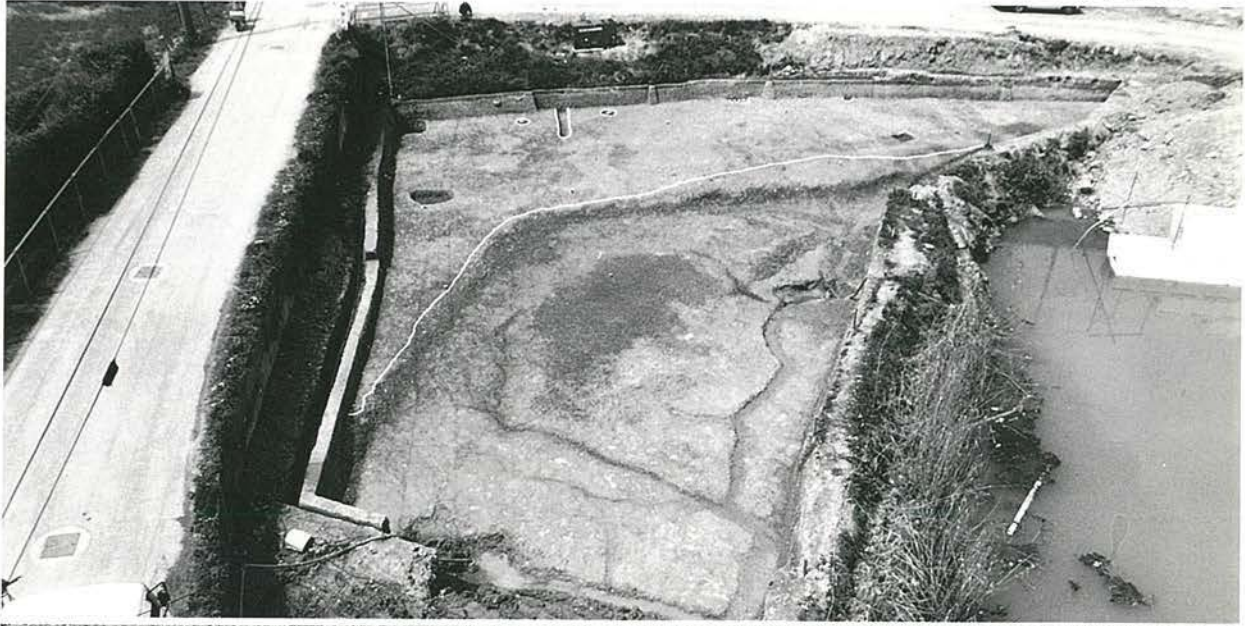


第1遺構面の東半部
(西から)

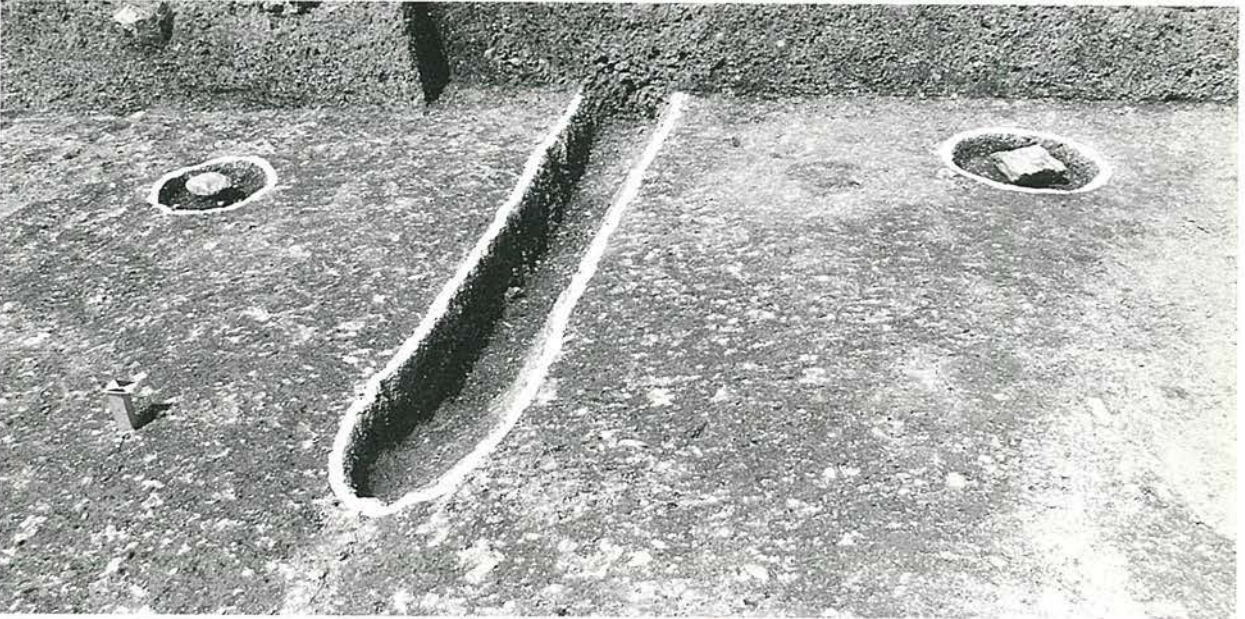


第1遺構面の東半部
(西から)

越谷遺跡第1地区
の調査



第2遺構面の西半部
(東から)



第2遺構面の
柱穴と溝1
(東から)

第2遺構面の西半部
(西から)



越谷遺跡第1地区
の調査



第2遺構面の東半部
(東から)



第2遺構面の溝2
(西から)



南壁
(東端部)

越谷遺跡第1地区
の調査



南東隅壁面

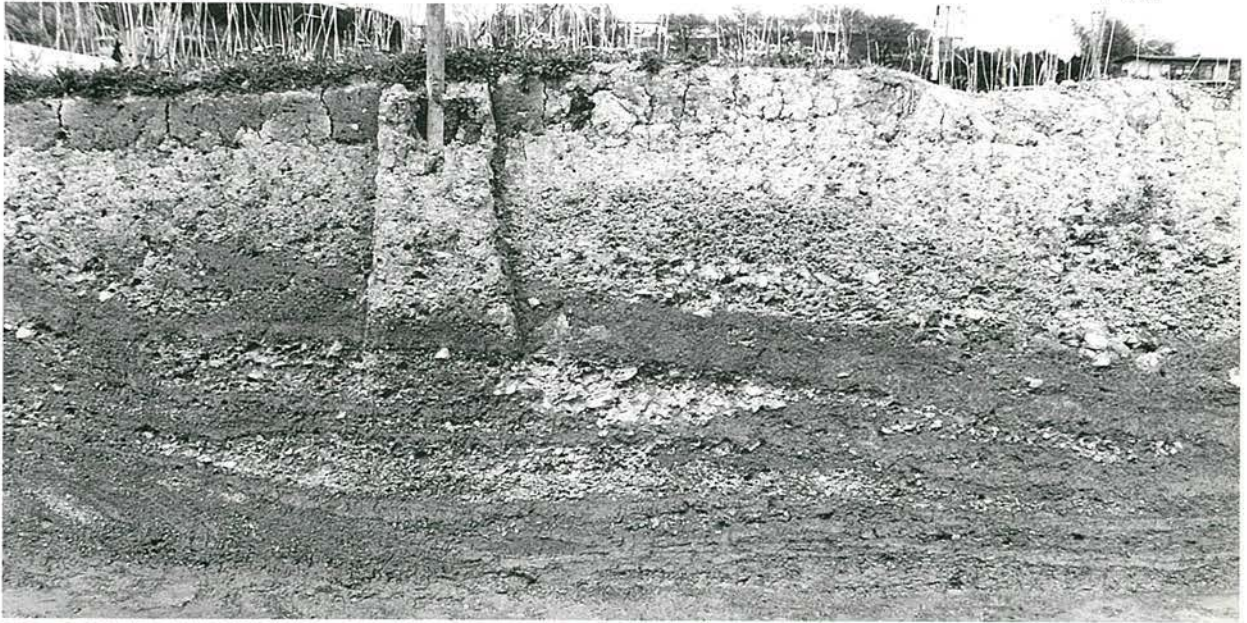


北西隅壁面

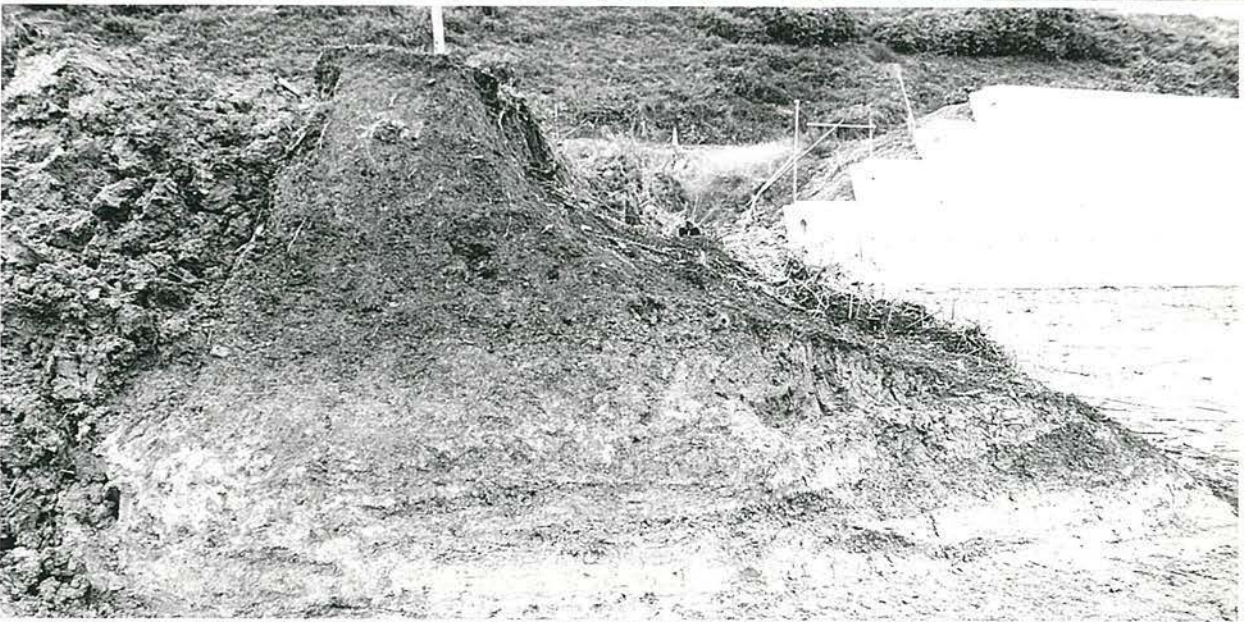


北東隅壁面

越谷遺跡第1地区
の調査



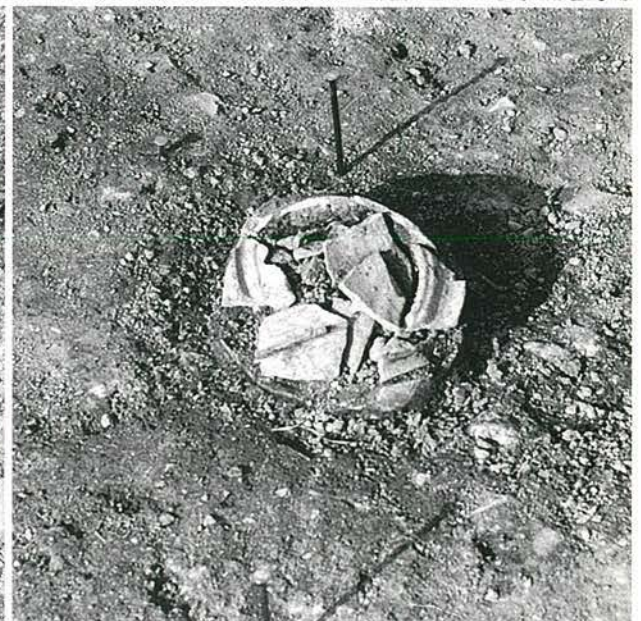
南壁
(中央付近)



御所池堤防の断面
(東から)



左：第2遺構面の土坑
(東から)



右：第1遺構面の
掘下げ時出土遺物
(西から)

越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面全景
(南から)

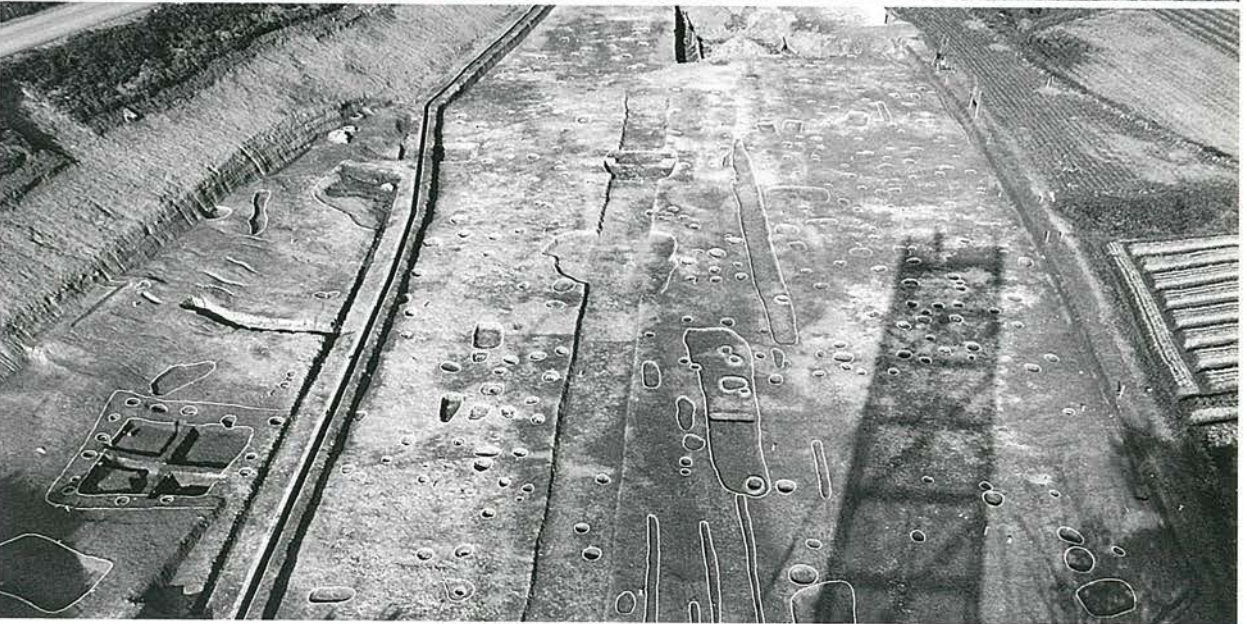
越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の
全景南側部分
(北から)



第1遺構面の
全景中央部分
(北から)



第1遺構面の
全景北側部分
(南から)

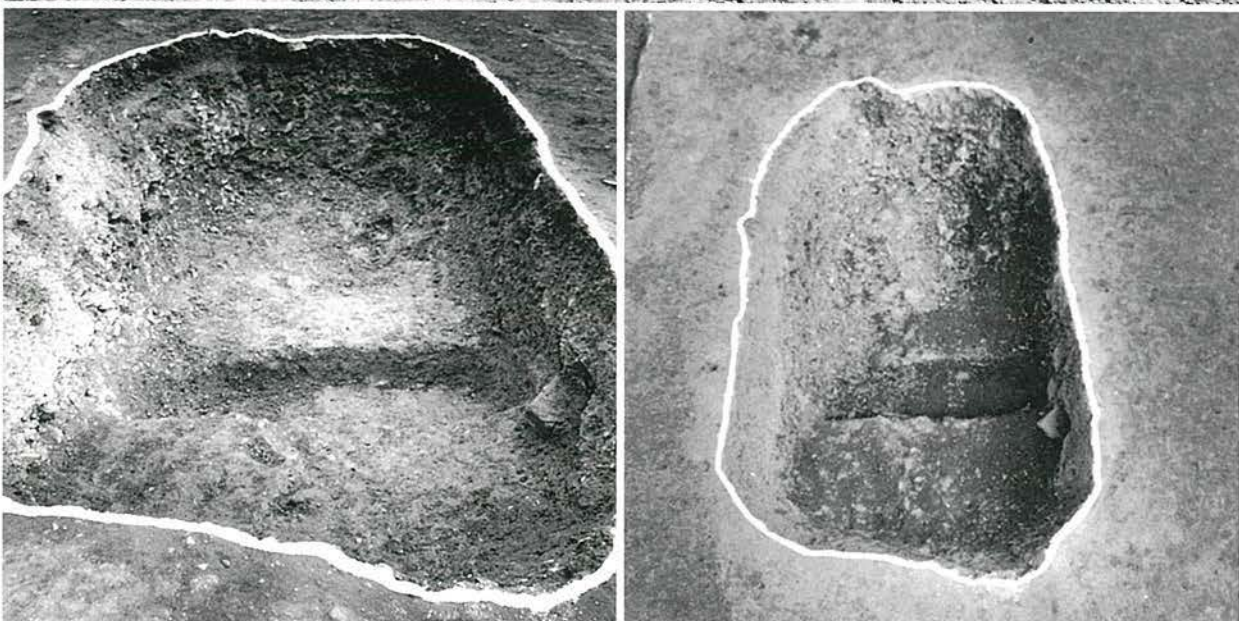
越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の土坑1の
遺物出土状況
(東から)

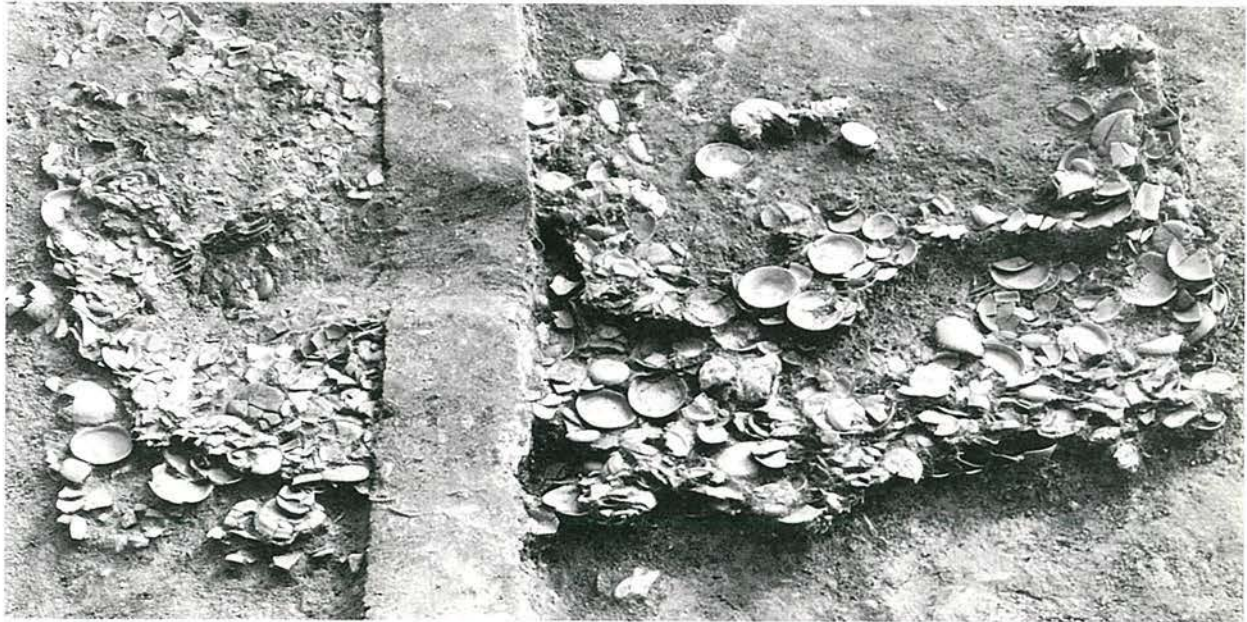


第1遺構面の土坑1の
遺物出土状況
(北から)



第1遺構面の土坑1の
完掘状況
(左：西から
右：東から)

越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の土坑2の
遺物出土状況
(西から)

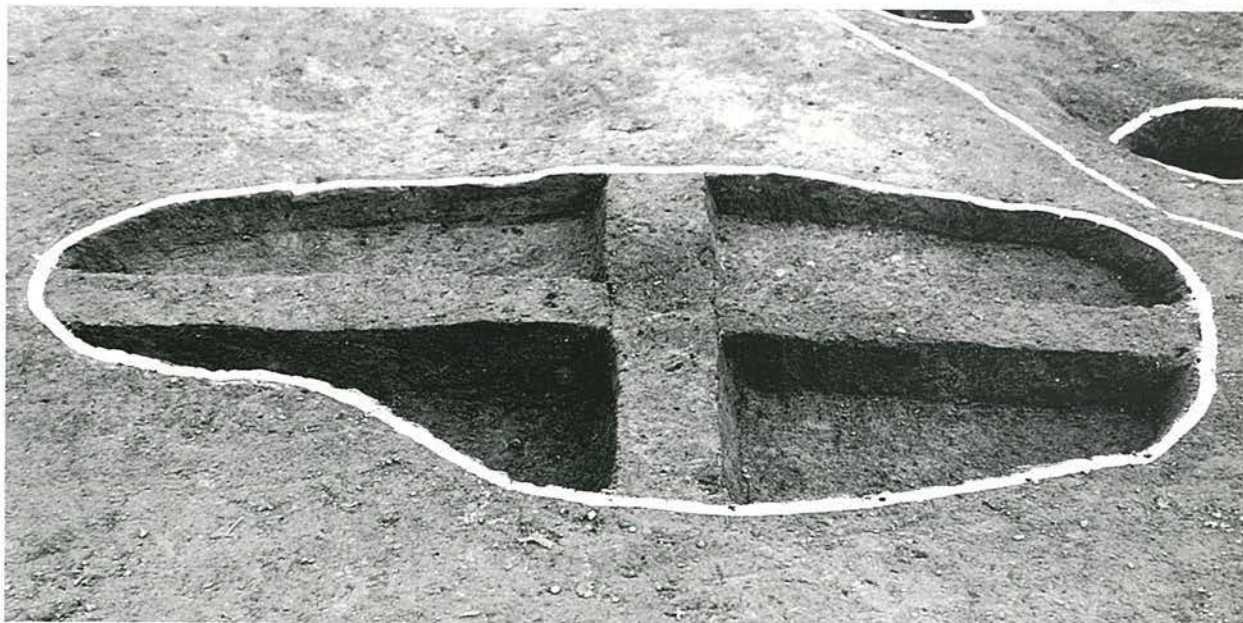


第1遺構面の土坑2の
遺物出土状況
(北側中央部分)

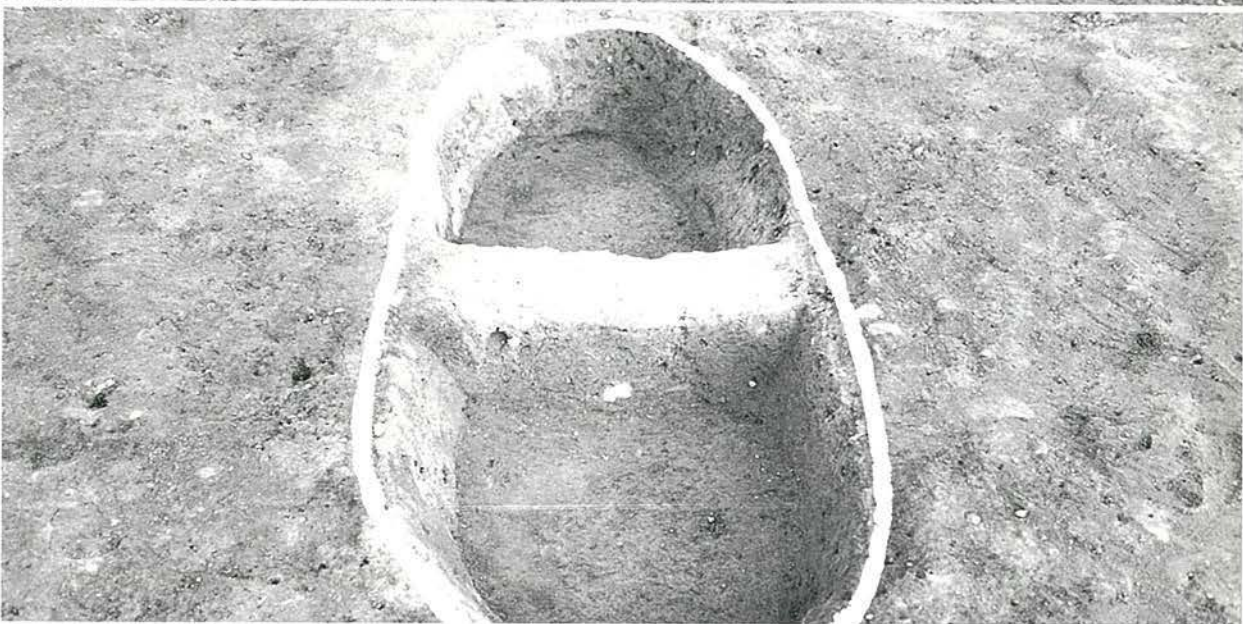


第1遺構面の土坑2の
遺物出土状況
(北側中央部分)

越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の土坑5
(北から)

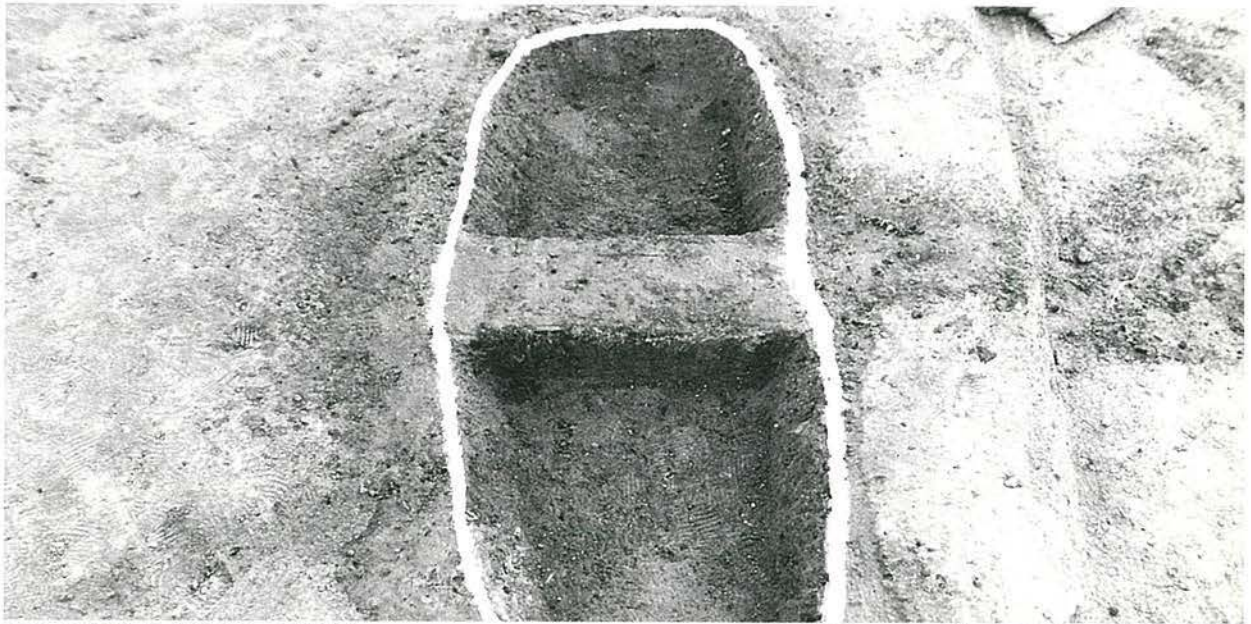


第1遺構面の土坑11
(西から)



第1遺構面の土坑12
(東から)

越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の土坑13
(北から)



第1遺構面の土坑14
(西から)

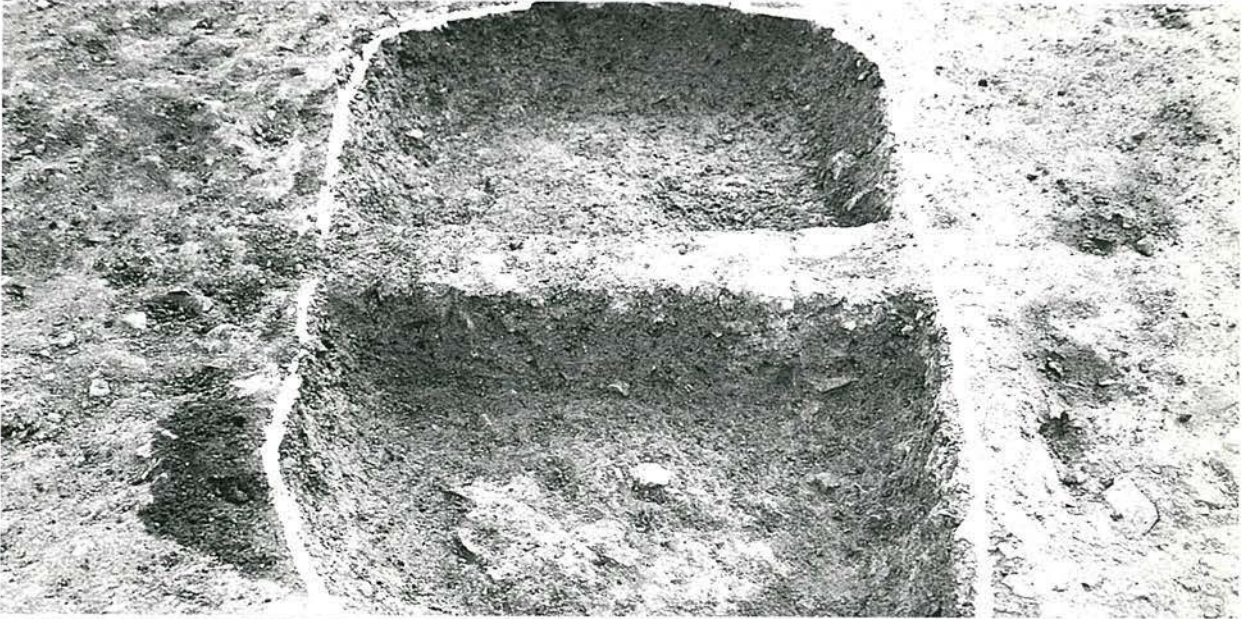


第1遺構面の土坑19
(北から)

越谷遺跡第2地区
の調査



第1遺構面の土坑19
(東から)



第1遺構面の土坑21
(北から)



第1遺構面の土坑23
(北から)

越谷遺跡第2地区
の調査



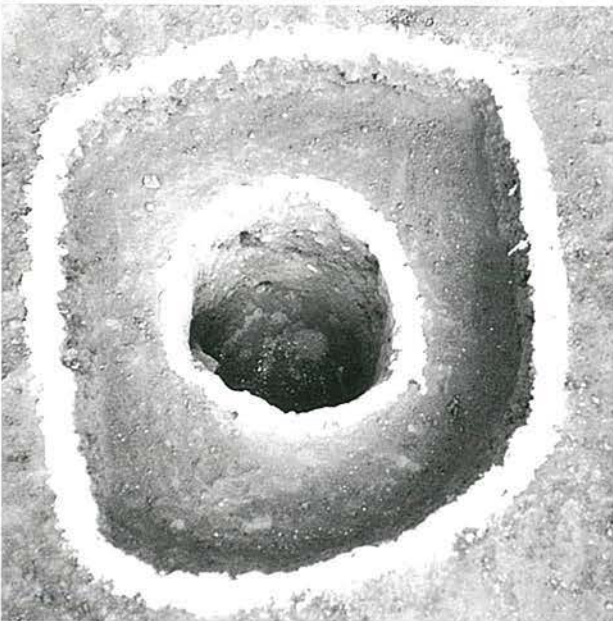
第1遺構面の土坑24
(東から)



左：第1遺構面の
土坑25
(南から)



右：第1遺構面の
柱穴1
(北から)



左：第1遺構面の
柱穴2
(北から)



右：第1遺構面の
柱穴2
断ち割り状況
(北から)

越谷遺跡第2地区
の調査

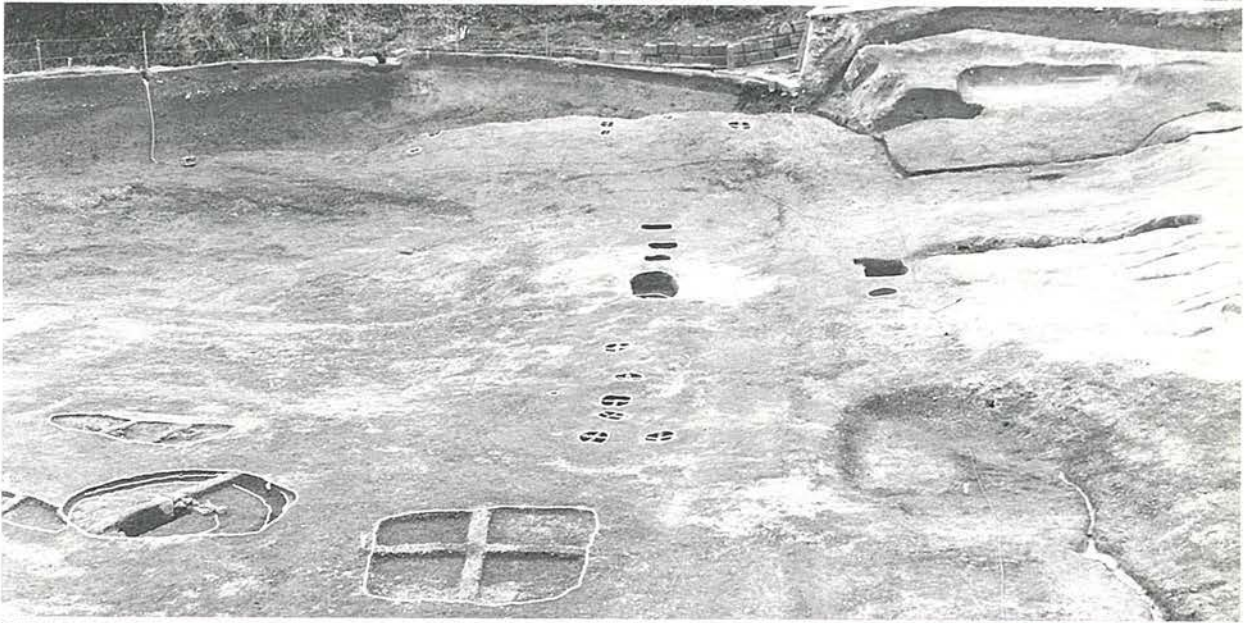


第2遺構面全景
(南から)

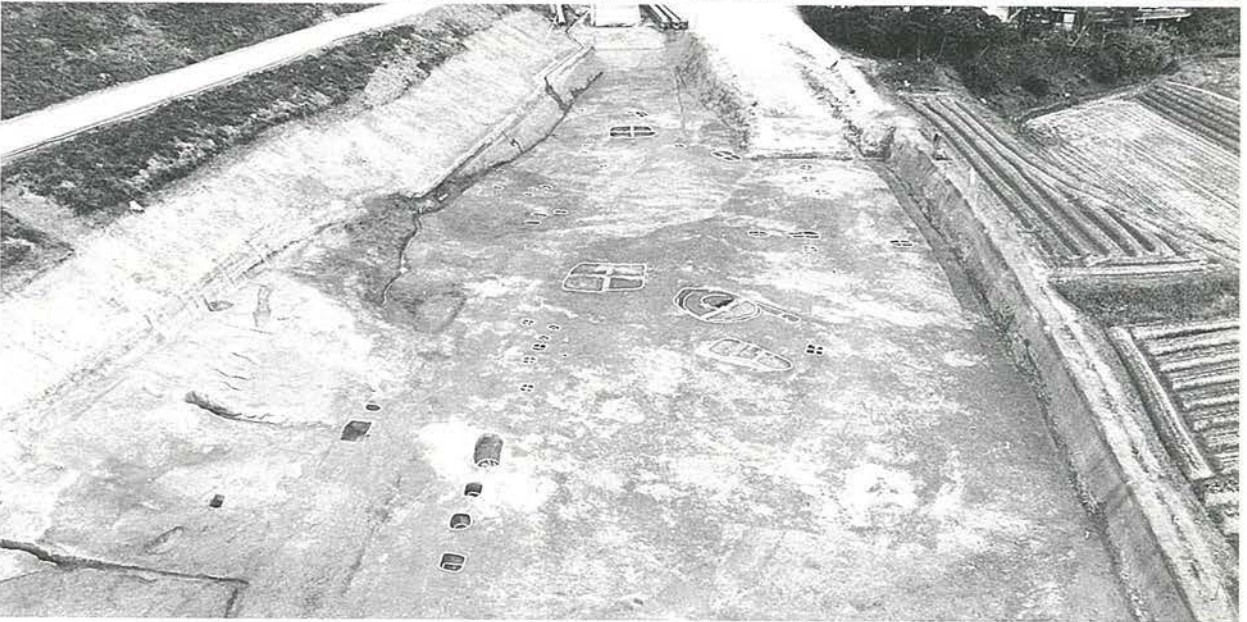
越谷遺跡第2地区
の調査



第2遺構面南側部分
(北から)



第2遺構面中央部分
(北から)



第2遺構面北側部分
(南から)

越谷遺跡第2地区
の調査



調査区南壁



調査区東壁



第2遺構面井戸
断ち割りトレンチ南壁

越谷遺跡第2地区
の調査



第2遺構面の土坑2
(北東から)

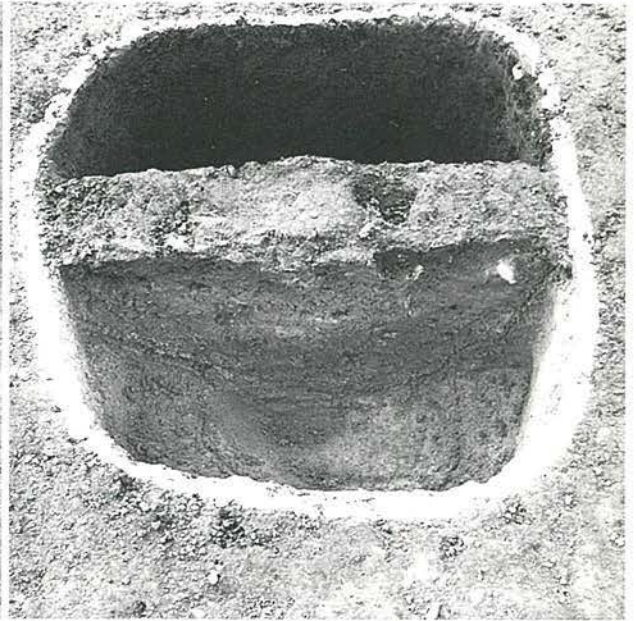
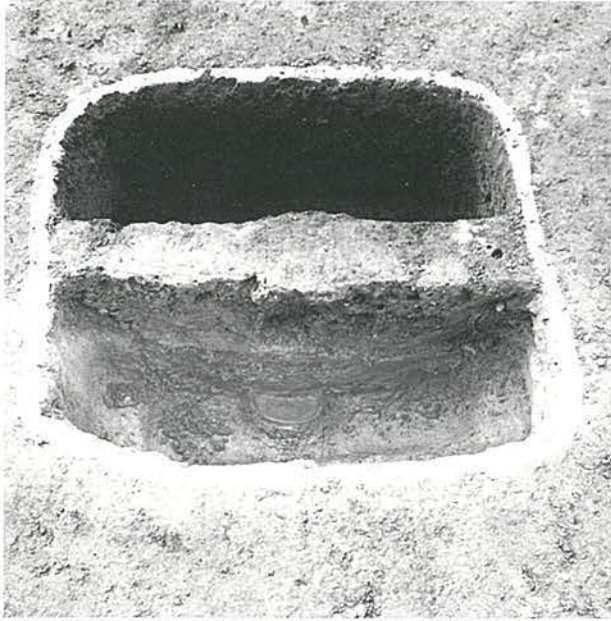


第2遺構面の土坑2
(南西から)

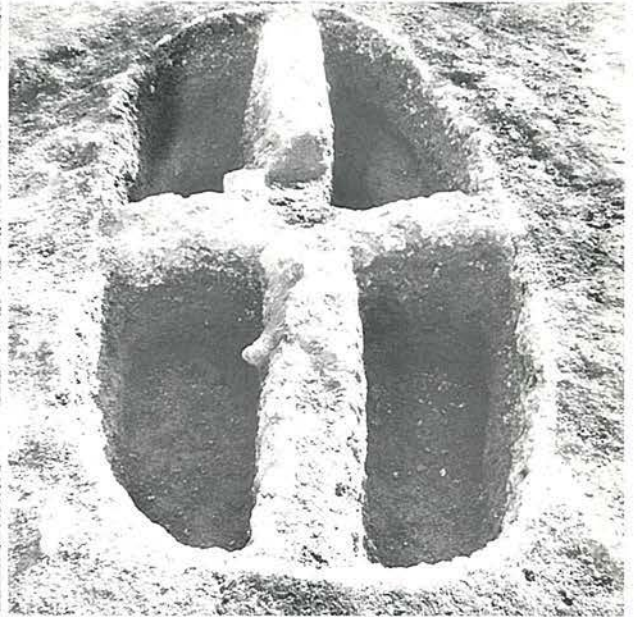
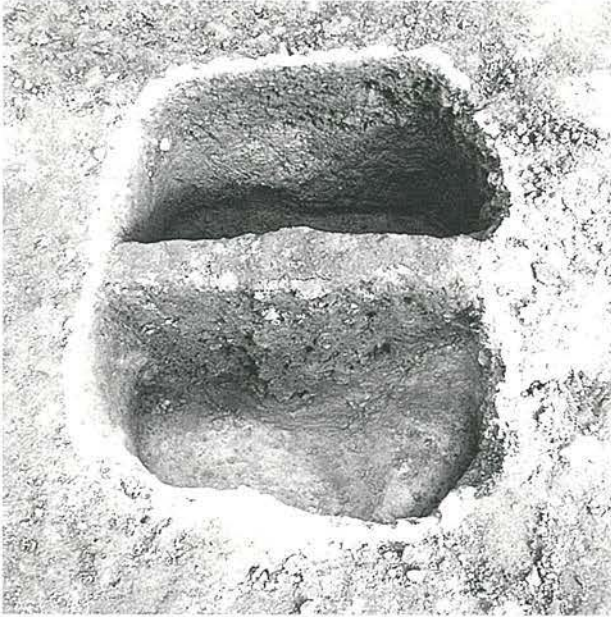


第2遺構面の土坑2の
遺物出土状況
(南から)

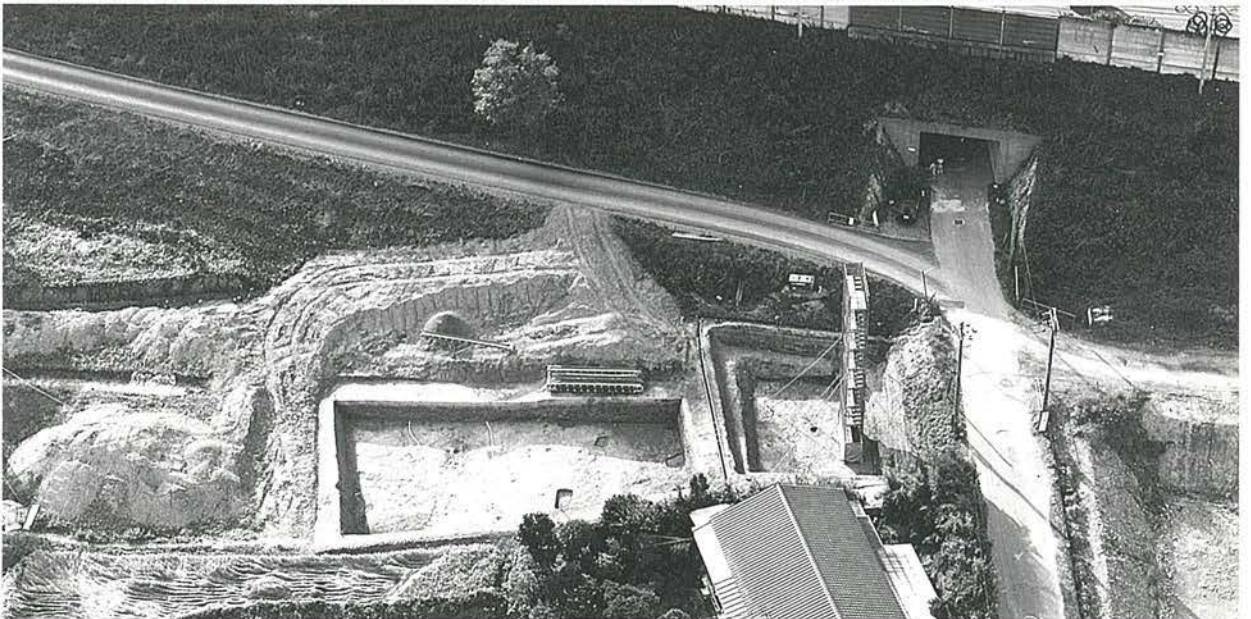
越谷遺跡第2地区
の調査



第2遺構面柱列の柱穴
左：柱穴1（北から）
右：柱穴1の北側の
柱穴（北から）

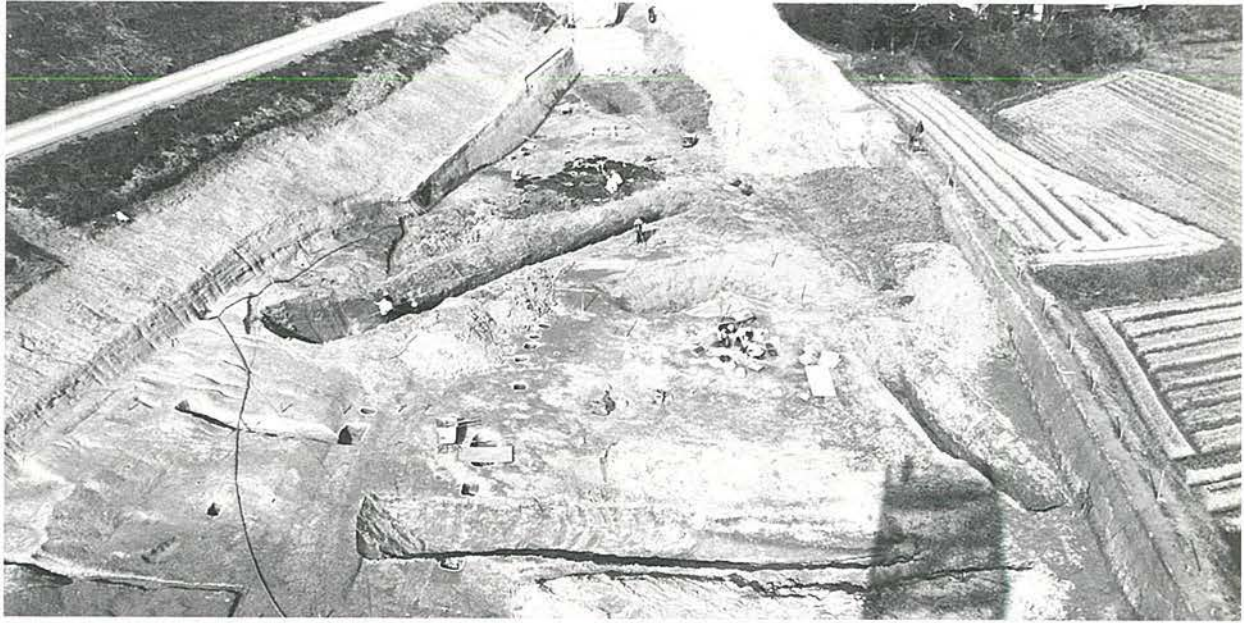


第2遺構面柱列の柱穴
右：柱穴2（北から）
左：柱穴2の南側の
柱穴（南から）

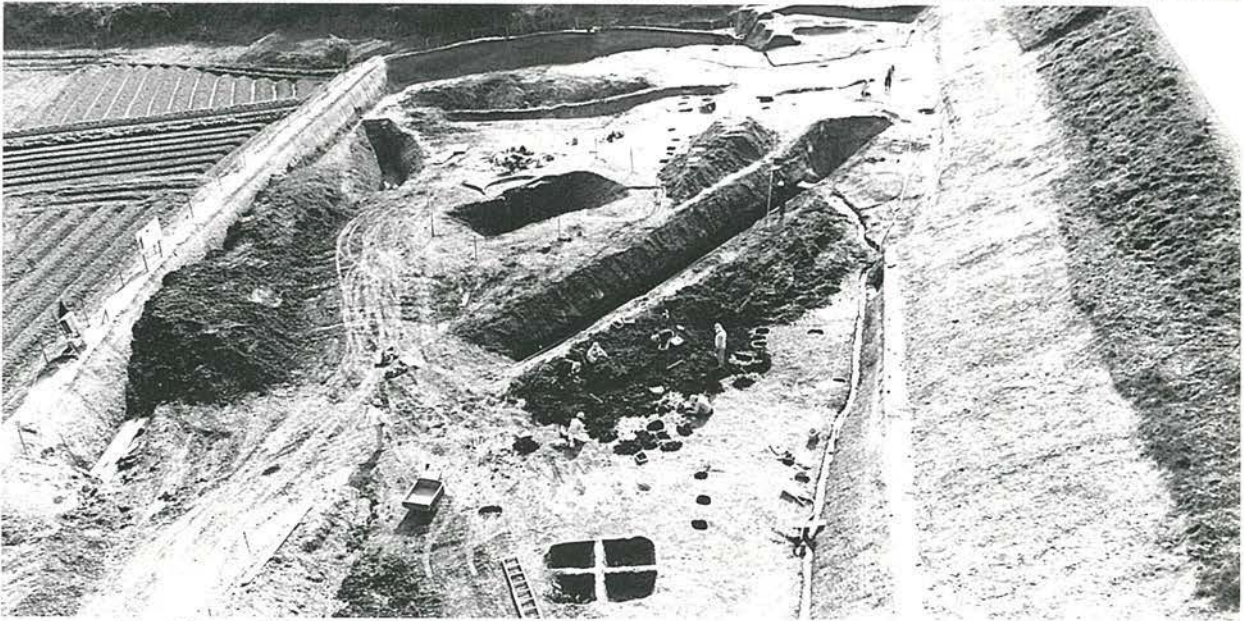


第2遺構面
北東部分全景
（東から）

越谷遺跡第2地区
の調査



第3遺構面確認
トレンチ全景
(南から)



第3遺構面確認
トレンチ全景
(北から)



第3遺構面確認
トレンチ全景
(北から)

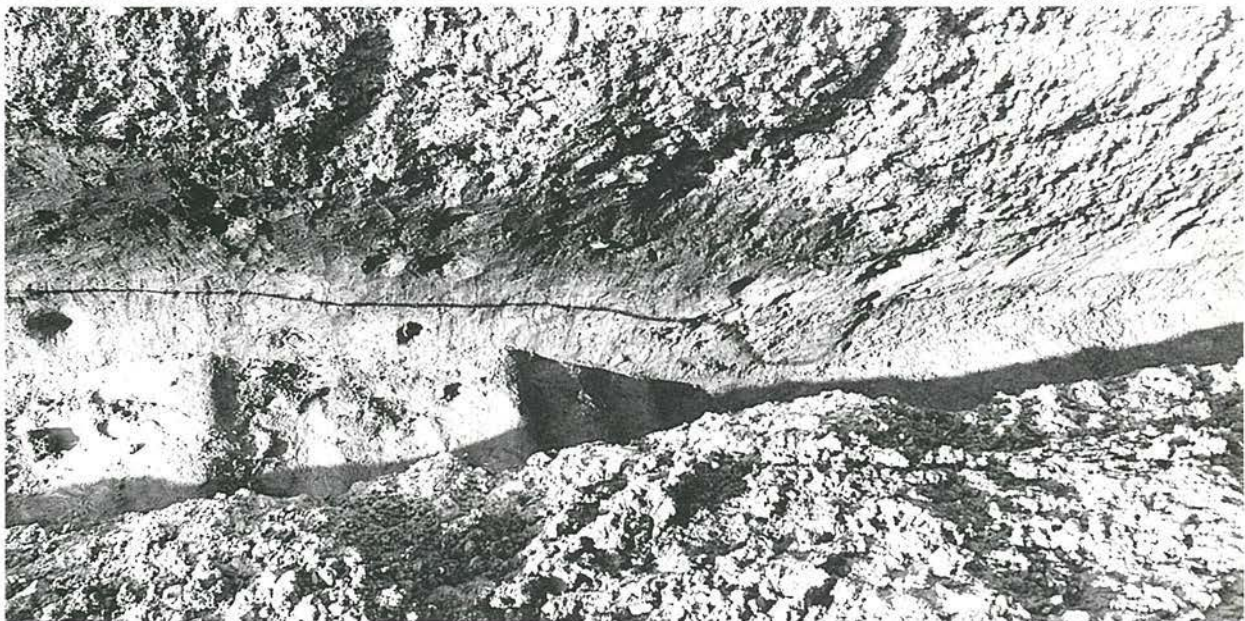
越谷遺跡第2地区
の調査



第3遺構面確認
Dトレンチ北壁



第3遺構面確認
Eトレンチ全景
(北東から)



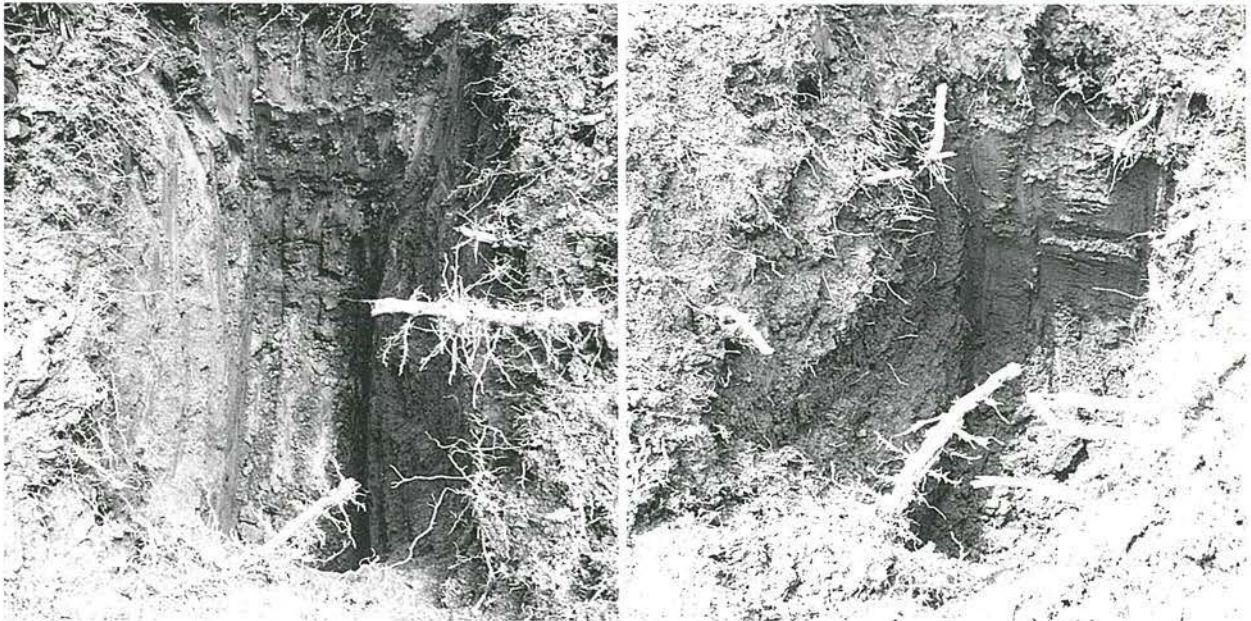
第3遺構面確認
Eトレンチ北壁
(溝部分)



南トレンチ
(西から)



北トレンチ
(西から)



北トレンチ
周辺のグリッド

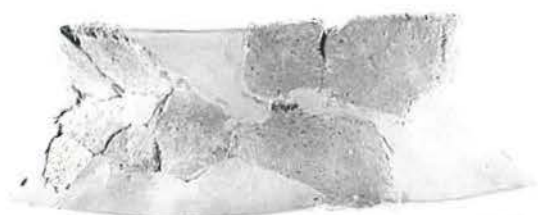


図9-1



6



4



5



9



2



8



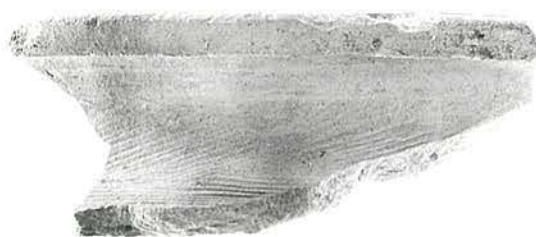
7



3



図15-1



5



8



6



9



2



7



4



10



11

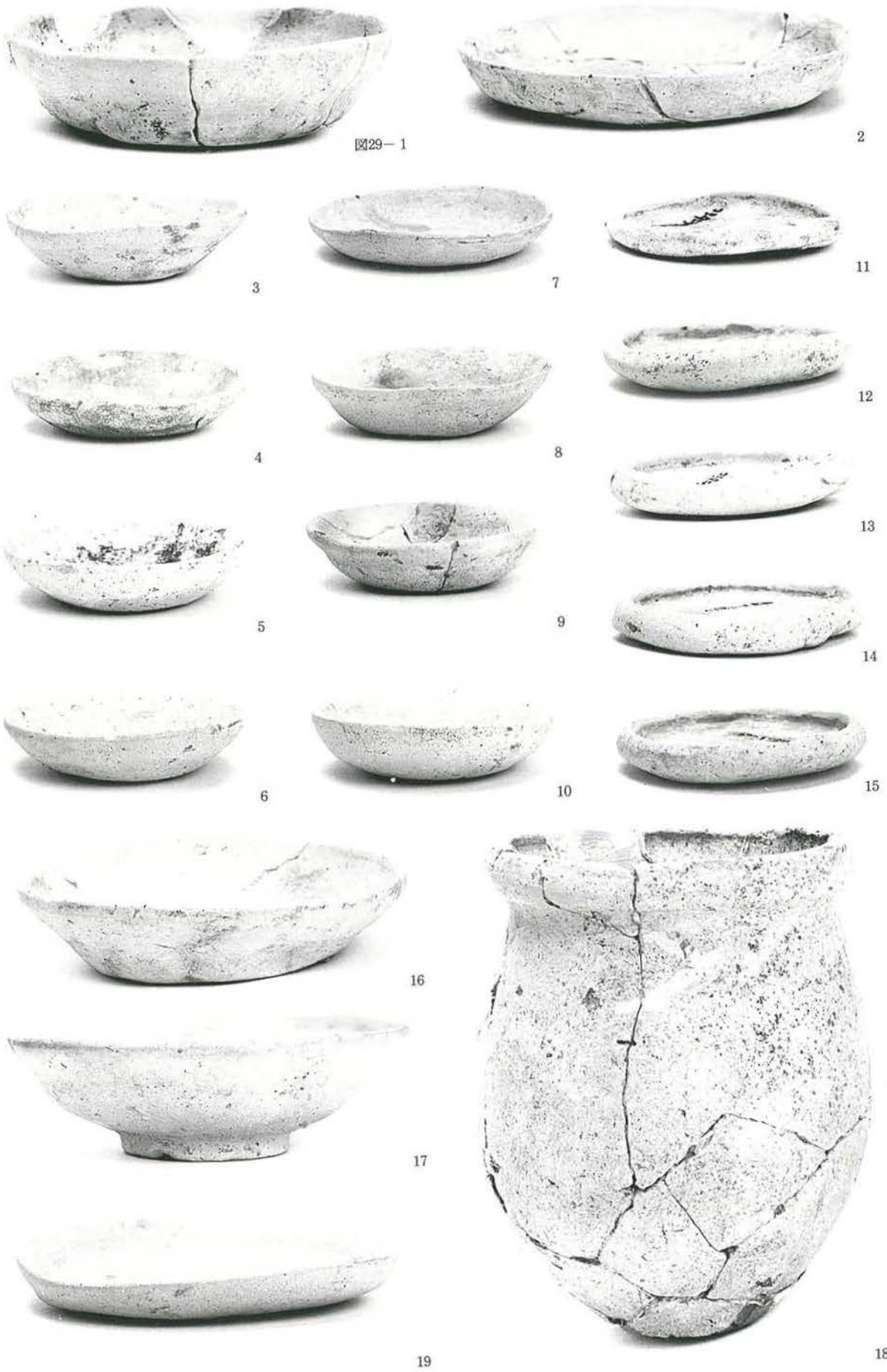


図29-1

越谷遺跡第2地区の包含層の出土遺物



図29-20



28



21



29



22



30



23



31



24



32



25



33



26



34



27



35



図29-36



44



37



45



38



46



39



47



40



48



41



49



42



50



43



51



図30-1



8



2



9



3



10



4



11



5



12



6



13



7



14

越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物



図30-15



22



16



23



17



24



18



25



19



26



20



27



21



28

越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物



図30-29



36



30



37



31



38



32



39



33



40



34



41



35



42

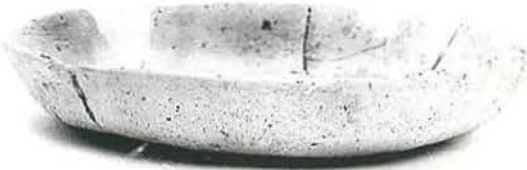
越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物



図30-43



50



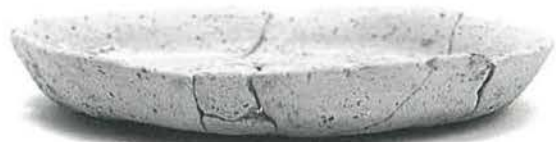
44



51



45



52



46



53



47



54



48



55



49



56

越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑1の出土遺物



図30-57



58



59



図31-13



図31-1



5



9



2



6



10



3



7



11



4



8



12



14



16



15



17



図31-18



24



19



25



20



26



21



27



22



28



23



29



図31-30



36



31



37



32



38



33



39



34



40



35



41



図31-42



48



43



49



44



50



45



51



46



52



47



53



図31-54



61



55



62



56



63



57



64



58



図32-65



59



66



60



67

越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物



図32-68



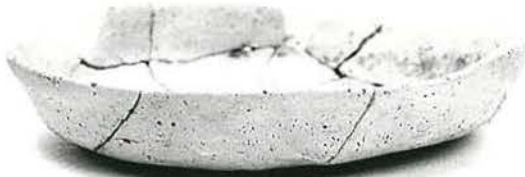
75



69



76



70



77



71



78



72



79



73



80



74



81



図32-82



89



83



90



84



91



85



92



86



93



87



94



88



95

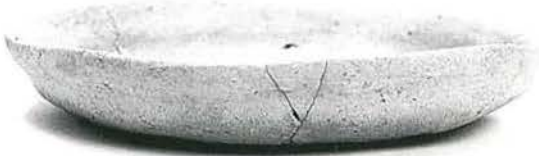
越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物



図32-96



103



97



104



98



105



99



106



100



107



101



108



102



109

越谷遺跡第2地区の第1遺構面の土坑2の出土遺物



図32-110



117



111



118



112



119



113



120



114



121



115



122



116



123



図32-124



図33-130



125



131



126



132



127



133



128



134



図33-129



135



図33-136



142



137



143



138



144



139



145



140



146



141



147



図33-148



154



149



155



150



156



151



157



152



158



153



159



図33-160



166



161



167



162



168



163



169



164



170



165



171



図33-172



178



173



179



174



180



175



181



176



182



177



183



図33-184



190



185



191



186



192



187



193



188



194



189



195



図134-1



8



2



9



4



10



5



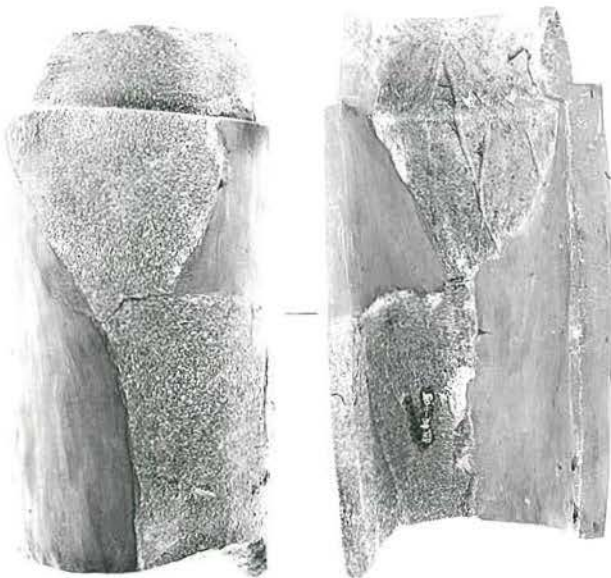
11



7



12



6



14



15



図39-1



5



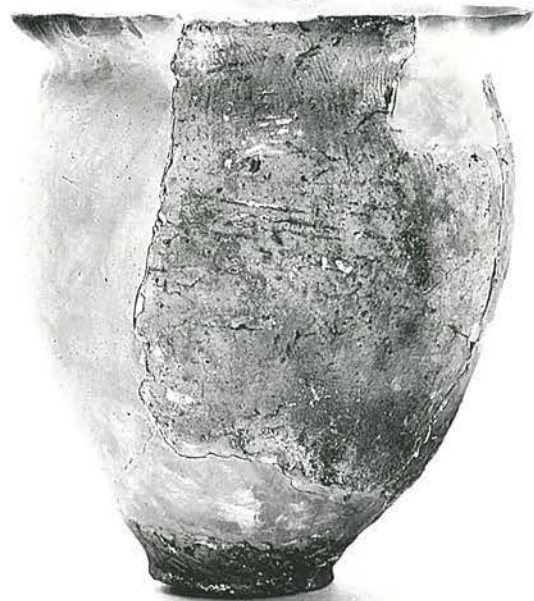
2



6



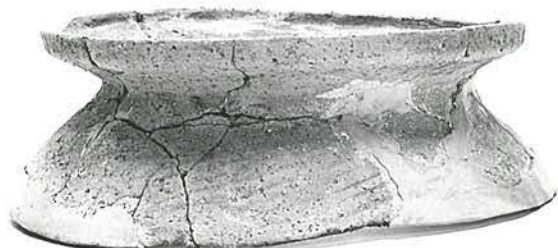
3



7



4



8

越谷遺跡第2地区の第2遺構面の土坑1・2の出土遺物



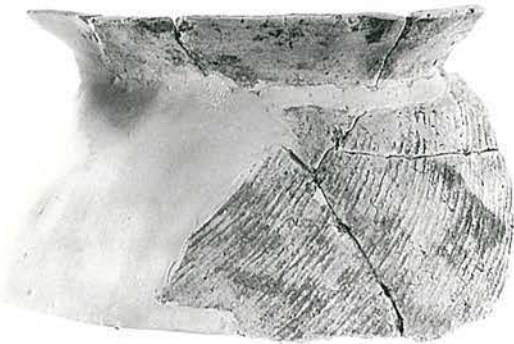
図39-9



10



14



11



15



12



16



13





図39-18



19



20



21



図40-1



4



2



3



5

越谷遺跡第2地区の第2遺構面の土坑2・柱穴1と井戸の出土遺物

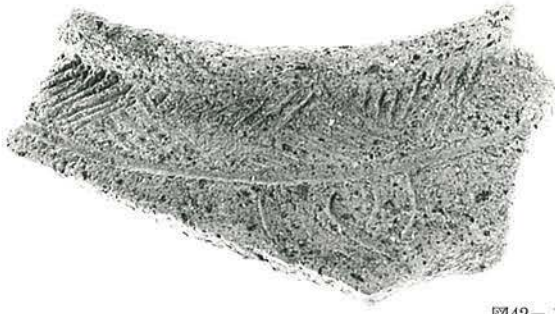


図42-1



2



3



4



8



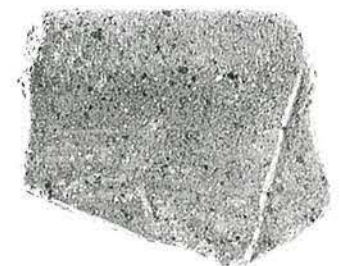
6



5



7



9

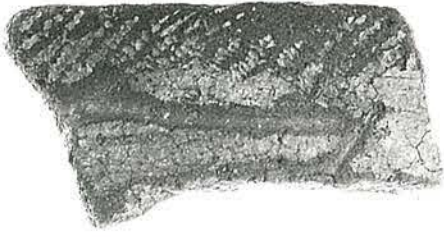


図42-10



11



12



13



14



15



16



17

報 告 書 抄 録

ふりがな	こしたにいせきほかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	越谷遺跡 他 発掘調査報告書							
副書名	名神高速道路内遺跡調査会調査報告書							
巻次	第2輯							
シリーズ名								
シリーズNo.								
編著者名	大塚 隆							
編集機関	名神高速道路内遺跡調査会							
所在地	〒569 大阪府高槻市井尻1丁目17-1 ☎ 0726 69 0283							
発行年月日	平成9年(1997年)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡No.					
でんまちよいこしじゅうぼ 伝待宵小侍従墓 こしたにいせき 越谷遺跡 げんごやまこふんぐん 源吾山古墳群	おおさかふみしまぐん 大阪府三島郡 さくらいちょうめ 桜井3丁目	27301		34° 52' 31"	135° 39' 39"	19910214 から 19931029	3562m ²	道路(中央自動車道西宮線) 拡幅工事に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伝待宵小侍従墓			石組遺構 1		弥生土器 (包含層から)			
越谷遺跡	集落 田畑	縄文・弥生・古墳 平安・鎌倉・江戸	土坑 383 柱穴 83 溝 28		縄文・弥生土器 埴輪・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器		中世の土坑から早島式土器出土	
源吾山古墳群	古墳群	古墳			須恵器			

名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯
中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

越谷遺跡他発掘調査報告書
伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群

発行 名神高速道路内遺跡調査会
〒569
大阪府高槻市井尻1丁目17-1

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537
大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL 06(976)8761

